



# 北方北の原遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業

西部山麓線（3期工区）建設に先立つ発掘調査報告書

1996年3月

長野県飯田市教育委員会

## 序

社会の変化に伴って、飯田市内に於いても様々な開発事業が行われています。それらに関連し、飯田市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存をして後世に伝える事業を実施しています。

近年、飯田市街地における開発は飽和状態に達しており、周辺地区の道路環境の整備が進みつつある状況と相俟って、市街地周辺へ企業や住宅が拡散してきています。この北方地区に於いても飯田バイパス153号、市道運動公園通りが開通し、沿線への店舗事業所等の進出が相次いでおり、それに伴い住宅開発が盛んになっています。

この開発は、農作業等の振興に不可欠な農道整備事業であり、宅地化が進む当地区の状況などを考えますと、是認すべきといえ、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることも又、大切なことであると考えます。

北方北の原遺跡の発掘調査結果は、本報告書のとおりであり、これまで周辺で積み重ねられてきた調査成果に、さらに重要な知見を加えたわけであります。すなわち、地域の歴史解明が進むとともに、ひいては古代日本史の復元の一助となるものと確信いたします。

最後になりましたが、地元の皆様、現地作業、整理作業に従事された作業員の方々に謝意を申し述べる次第であります。

平成8年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

## 例　　言

1. 本書は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業西部山麓線建設に伴い実施された飯田市北方地区の埋蔵文化財包蔵地北方北の原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は開発主体者である下伊那地方事務所土地改良課の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
- 3 調査は平成5年7月に試掘調査を実施し、本調査を同8月～6年9月にかけて行った。続いて6～7年度に整理作業および報告書作成作業を行った。
- 4 発掘調査および整理作業においては遺跡名に略号 KKH1861、KKH1863、KKH1736-2、KKH1736-1、KKH1746、KKH1748、KKH1759をそれぞれ付して使用した。
- 5 発掘調査位置は国土基本図の区画、LC-8-3に位置し（社団法人日本測量協会 1969 「国土基本図式 同適用規定」参照）、基準点の設定は株式会社ジャステックに委託した。詳細は（飯田市教育委員会 1996 『三尋石遺跡』）を参照のこと。
- 6 本報告書の記載順は、時代毎住居址を優先した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物および写真図版は本文末に一括した。
- 7 本書の編集および執筆は、佐々木嘉和・吉川豊・山下誠一・馬場保之・吉川金利・下平博行・福澤好晃がおこない、小林正春が総括した。
- 8 遺物写真撮影は、吉川金利・福澤好晃がおこなった。
- 9 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
- 10 本書に掲載した石器実測図の表現は『恒川遺跡群』（飯田市教育委員会 1986）に準拠し、それ以外の表現として、節理面を斜線で表現した。
- 11 本書に関連する出土品および諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市川路1004-1 飯田市考古資料館に保管している。

# 目 次

## 本文目次

序 例 目 文 次			
I 経過	1	III 調査の結果	9
1 調査に至るまでの経過	1	1) 調査区の設定	9
2 調査の経過	1	2) 基本層序	9
3 調査組織	2	3) 調査結果	15
II 遺跡の環境	4	IV まとめ	51
1 自然環境	4	写真図版	
2 歴史環境	6	報告書抄録	

## 挿図目次

挿図1 調査遺跡位置及び周辺遺跡図	5	挿図23 土坑5, 6	28
挿図2 調査位置及び周辺地図	7	挿図24 土坑14~22	30
挿図3 北方北の原遺跡調査区地番	8	挿図25 土坑23~27	32
挿図4 基準メッシュ区画位置図	10	挿図26 1861番地第V層検出ピット	35
挿図5 1861番地 基本層序	11	挿図27 1861番地第VI層検出ピット	36
挿図6 1863番地 基本層序	12	挿図28 1863番地第III~IV層検出ピット	37
挿図7 1748番地 基本層序	12	挿図29 1863番地第III~IV層検出ピット	38
挿図8 1736-2番地 基本層序	13	挿図30 1736-2番地第IX層検出ピット	39
挿図9 1746番地 基本層序	14	挿図31 1736-2番地第IX層検出ピット	40
挿図10 1号住居址	15	挿図32 1736-1番地第IX層検出ピット	41
挿図11 集石1	16	挿図33 1746番地第IV層検出ピット	42
挿図12 集石3	16	挿図34 1748番地第III~IV層検出ピット	43
挿図13 集石4	17	挿図35 1736-2番地第XII層検出ピット	44
挿図14 土器棺墓1, 2	18	挿図36 1736-2番地, 1736-1番地 検出ピット	45
挿図15 土器棺墓3	19	挿図37 1736-1第XII層 1746第V層検出ピット	46
挿図16 溝址1	20	挿図38 1746番地第V層検出ピット	47
挿図17 溝址2	21	挿図39 1748番地第IX層検出ピット	48
挿図18 溝址3	21	挿図40 1748番地第IX層検出ピット	49
挿図19 溝址4	22	挿図41 1736-2番地第XI層検出ピット	50
挿図20 溝址5	23	挿図42 1号住居址出土土器	56
挿図21 溝状址1	24		
挿図22 土坑1~3, 7~13	27		

挿図43	1号住居址出土土器	57	挿図57	1861番地遺構外出出土土器	71
挿図44	土器棺墓1	58	挿図58	1861番地遺構外出出土土器	72
挿図45	土器棺墓2・土器棺墓3	59	挿図59	1863番地遺構外出出土土器	73
挿図46	溝址3・溝址4・溝址5出土土器	60	挿図60	1863番地遺構外出出土土器	74
挿図47	土坑2・土坑6・土坑7・ 土坑9・土坑10	61	挿図61	1863番地遺構外出出土土器	75
挿図48	土坑10・土坑11・土坑12出土土器	62	挿図62	1736-2・1746番地 遺構外出出土土器	76
挿図49	1861番地遺構外出出土土器	63	挿図63	1746・1759番地遺構外出出土土器	77
挿図50	1861番地遺構外出出土土器	64	挿図64	土坑1・土坑13・1861番地遺構外, 1736-2番地遺構外出出土石器	78
挿図51	1861番地遺構外出出土土器	65	挿図65	1736-2番地1746番地 遺構外出出土石器	79
挿図52	1861番地遺構外出出土土器	66	挿図66	1746番地遺構外出出土石器	80
挿図53	1861番地遺構外出出土土器	67	挿図67	1746・1759番地遺構外出出土石器	81
挿図54	1861番地遺構外出出土土器	68			
挿図55	1861番地遺構外出出土土器	69			
挿図56	1861番地遺構外出出土土器	70			

## 写真図版目次

図版1	調査前	84	図版21	溝址4・5出土土器・土坑2出土土器	104
図版2	重機表土剥ぎ作業・作業風景	85	図版22	土坑6・7・9出土土器	105
図版3	爪形文土器出土地点作業風景	86	図版23	土坑10出土土器	106
図版4	1号住居址・1号住居址断面	87	図版24	土坑10・11出土土器	107
図版5	土器棺墓1・2	88	図版25	土坑11・12出土土器	108
図版6	土器棺墓1・2	89	図版26	遺構外出出土土器	109
図版7	土器棺墓3・5・6・7・土坑1・3	90	図版27	遺構外出出土土器	110
図版8	土坑5・6・7	91	図版28	遺構外出出土土器	111
図版9	土坑8・1~12	92	図版29	遺構外出出土土器	112
図版10	集石1・3	93	図版30	遺構外出出土土器	113
図版11	集石3・4	94	図版31	遺構外出出土土器	114
図版12	溝址1・溝状址1	95	図版32	遺構外出出土土器	115
図版13	遺構全景	96	図版33	遺構外出出土土器	116
図版14	遺構全景	97	図版34	遺構外出出土土器	117
図版15	調査区全景・基本層序	98	図版35	遺構外出出土土器	118
図版16	基本層序	99	図版36	遺構外出出土土器	119
図版17	1号住居址出土土器	100	図版37	土坑1・13出土石器・遺構外出出土石器	120
図版18	1号住居址出土土器・土器棺墓1	101	図版38	遺構外出出土石器	121
図版19	土器棺墓1・3	102	図版39	遺構外出出土石器	122
図版20	溝址3・4出土土器	103	図版40	遺構外出出土石器	123

# I 経過

## 1 調査に至るまでの経過

飯田市西部の中央アルプス山麓際は、果樹園が主体の農業地帯である。近年の農業経営上、車をつかう農作業が不可欠な状況となっているが、この地帯の道路は不十分なもので、南北方向に走る主要な道路は国道153号のみであり、各地区間の交通には様々な支障をきたしていた。

そこで西部の山本地区・伊賀良地区・上飯田地区等を結ぶ道路としての農道整備が計画された。計画立案は長野県（下伊那地方事務所）、飯田市農林部においてなされ、具体的に建設へと至った。

その結果、飯田市西部の山本・伊賀良地区の活性化を目途とした農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の西部山麓地区の建設工事は、伊賀良地区南西端よりⅠ期工事として着手された。それにかかわる埋蔵文化財の調査は、昭和60・61年度において、飯田垣外・火振原・梅ヶ久保の三遺跡についておこなわれ、平成元年度にⅡ期工区の細田北遺跡がおこなわれた。平成2年度はⅢ期工区の大原・直刀原遺跡、3年度に入野遺跡、4年度から5年度にかけて立野遺跡がおこなわれた（別編）。

引き続き、下伊那地方事務所と飯田市教育委員会の協議を基に、北方北の原遺跡の発掘調査実施についての受託契約を締結し、その契約に基づき、平成5・6年度に現地での発掘調査を実施し、平成7年度に整理作業・報告書作成をおこなった。

## 2 調査の経過

関係者による諸協議を受け、平成5年8月4日より、KKH1861 KKH1863 KKH1742 KKH1736-2 KKH1736-1 KKH1746について重機により試掘調査をおこなった。そして、KKH1742では遺構・遺物は確認されなかったが、KKH1861・KKH1863で遺物等を確認したため、引き続き表土剥ぎ作業をおこない、本発掘調査に着手した。

まず、重機の荒れ土を除去し、竪穴住居址・土坑その他の遺構を検出し、掘り下げて精査し、それについて写真撮影をおこなった。

そして、空中写真撮影・空中写真測量業務を（株）ジャステックに委託し、補充の測量調査をして、平成5年11月18日、平成5年度の現地での作業を終了した。

平成6年度に入り、6月7日よりKKH1748 KKH1759の試掘調査および本発掘調査をおこない、9月30日、現地での作業を終了した。

工事計画地は、路線幅のみであったため、表土剥ぎによる土の置き場の都合により、何度もわたり土を送り返しての調査であったため、調査は特に慎重におこなった。

その後平成7年度にかけて、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗・接合・復元作業、実測・写真撮影作業、遺構図の作成・トレース、版組み等をおこな

い、報告書作成作業にあたった。

### 3 調査組織

#### (1) 調査団

調査担当者	小林 正春	佐合 英治	吉川 豊	山下 誠一	馬場 保之
調査員	佐々木嘉和 吉川 金利	瀧谷恵美子 池田 幸子	福澤 好見 池戸智恵子	下平 博行 市瀬 長年	伊藤 尚志 市瀬 房吉
作業員	新井ゆり子 伊藤 博紀	井上 恵資	今村 春一	今村 治子	小沢 信治
	小沢 はな 唐沢 恵子	金井 照子 唐沢古千代	金子 正子 北川 彰	金子 裕子 北沢 直子	香山 貴章 木下 貞子
	木下 早苗 木下 玲子	木下 経子 櫛原亞紀子	木下 傳 櫛原 勝子	木下 義男 久保田やよい	木下 良子 熊谷 義章
	小池千津子 小林 千枝	小平不二子 齊藤 千里	小平 正樹 齊藤 徳子	小平 峰子 柳原 政夫	小林千加子 坂下やすゑ
	佐々木文茂 塙沢 澄子	佐々木真奈美 塙沢 節	佐々木美千枝 清水 三郎	佐藤知代子 下井田 衛	澤柳 藤夫 代田 和登
	菅沼和加子 田中 恵子	鈴木 尊子 田中 智子	関島真由美 塙原 次郎	高橋収二郎 中島佳寿子	滝上 正一 中島かね子
	中島 正 丹羽 啓子	中島 真弓 丹羽 由美	仲田 昭平 萩原 弘枝	中平 隆雄 服部 光男	西塙 洋子 林田 加代
	林田 諭 広井 保	原田四郎八 福沢 幸子	肥後 みち 福本 静雄	平栗 陽子 福本まさ志	平松 正子 古根 素子
	細田 七郎 増沢 友美	牧内 修 松井 明治	牧内喜久子 松重 靖香	牧内 寛之 松下 成司	牧内 八代 松下 直市
	松下 直幸 松本 幸子	松下 光利 丸本 裕子	松島 直美 三浦 厚子	松村かつみ 溝上 清見	松下 直市 松本 恵子
	宮内真理子 森藤美和子	宮下 貞一 矢澤 博志	宮下 裕子 柳沢 謙二	元村 敬子 山田 康夫	森 章 吉川 悅子
	吉川 和夫 吉沢 二郎	吉川 和宏 吉村 節子	吉川紀美子 依田 時子	吉川小夜子 渡部 誠	吉川 正実

#### (2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

安野 節（社会教育課長）

～平成5年度)

横田 穆（ “ 平成 6 年度～）  
原田 吉樹（ 文化係長 ～平成 5 年度）  
小林 正春（ “ 平成 6 年度～）  
吉川 豊（ 文化係 ）  
山下 誠一（ “ 平成 6 年度～）  
馬場 保之（ “ ）  
吉川 金利（ “ ）  
濵谷恵美子（ “ ～平成 5 年度）  
福澤 好晃（ “ ）  
伊藤 尚志（ “ 平成 6 年度～）  
下平 博行（ “ ）  
上沼 由彦（県派遣職員 平成 7 年度）  
岡田 茂子（ 社会教育係）

## II 遺跡の環境

### 1 自然環境

飯田市は南アルプスと中央アルプスに挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。見かけ上は天竜川による河岸段丘地形を成すが、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い、大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

伊賀良地区は飯田市西部、市街地の南西4~2kmにあり、北西半分は中央アルプスの前山である笠松山(1271m)・高鳥屋山(1397m)の東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川に区切られ、笠松山・高鳥屋山から流れ出す入野沢川・南沢川・滝沢川・新川等の河川によって形成された広大な扇状地が広がる。南東半分は扇状地を載せている段丘面が露呈し、前述の扇状地と連続した地形を成している。

扇端部の位置は、おおむね北方地籍で新井付近、大瀬木地籍で伊賀良小学校付近、中村地籍で長清寺付近を結ぶ線で画され、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。なお、旧河道による谷地を埋める箇所では、扇端部の一部が前述の線を大きく越えて東側に伸びており、下殿岡地籍まで達するものもある。

扇端部付近では通例の如く湧水が豊かであるが、この扇状地が小河川により幾重にも複合して形成されているため、扇尖部付近でも比較的湧水に恵まれ、今日でも横井戸を利用している住宅がみられる。

扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は、下谷作用に転じていて、扇状地形内での浸蝕力は弱く、解析谷の規模は比較的小さい。これに対し、東側の段丘面部分での状況は、扇端部から離れる程深い浸蝕谷を形成し、地下水位も低くなる。

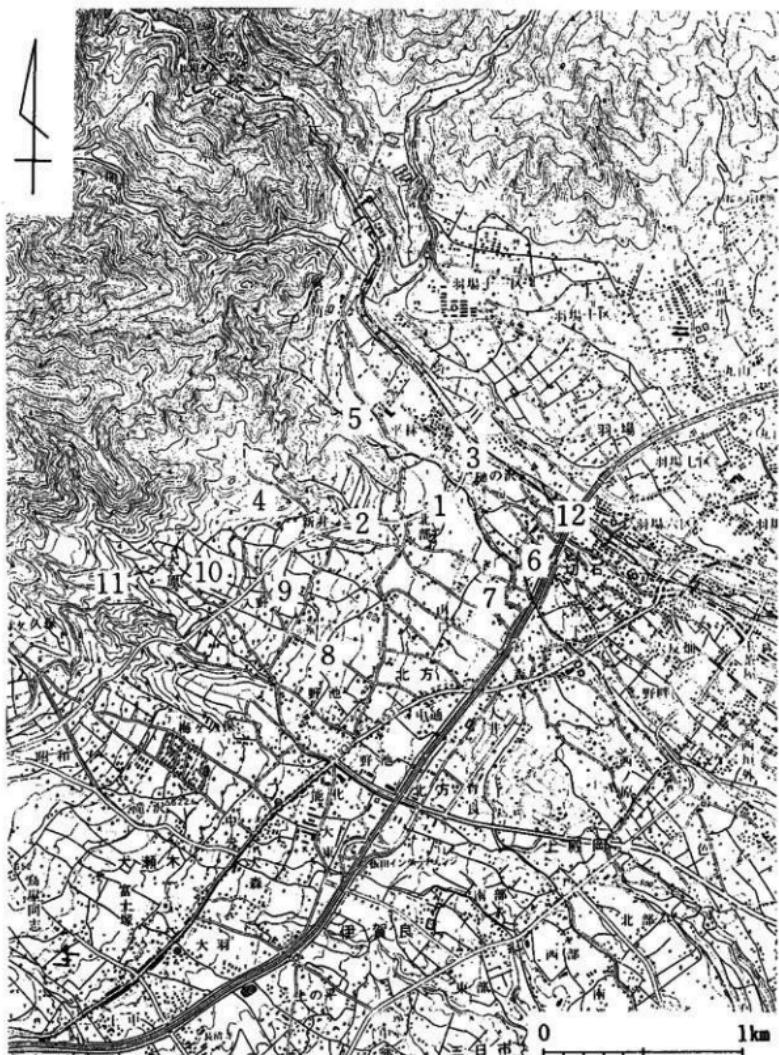
古代末以来、この高燥な地帯への、井水の開削が繰り返し行なわれ、大井をはじめ多くの井水が開けられているほか、地区内の大小河川には人為的な改変が加えられてきた。

北方北の原遺跡は、飯田市伊賀良北方地籍に位置する東西約600m、南北約350mの遺跡である。北方北部地区は、山麓の扇状地先端部の広大な北東向きの斜面にあり、北側斜面の下部で鼎切石地区に統一され、南西側は新井地区に至る。北西側は入野沢川を挟んで真慶寺原遺跡と対峙し、南東側は緩やかな斜面で山口地区に統く。

本調査地点は、北方北の原遺跡の中央やや南側に位置し、標高556m前後の北東向き斜面で、調査地点内の比高差は約20mである。

現在、この遺跡の範囲はほとんどが果樹園と水田で、表土の浅いところでは耕作により破壊が進んでおり、住人の話によると調査地周辺では、土器・石器などの遺物がよく拾えるという。基盤の土は、黄色の砂礫が混入した土で、二次堆積のロームである。

この斜面は飯田市街地から見ると、最後まで雪が残るところで、現在の住環境からすると劣悪な地と思われる。また、傾斜地にあり、入野沢川の氾濫が多い地形といえる。



1. 北方北の原    2. 立野    3. 桶の沢    4. 在京原    5. 山の洞    6. 天伯A  
 7. 山口    8. 北方野池    9. 入野    10. 北方大原    11. 桜山城跡    12. 天伯1号古墳

挿図1 調査遺跡位置及び周辺遺跡図

## 2 歴史環境

伊賀良地区の遺跡を概観すると、山地及び浸透谷を除いてほぼ全面的に包蔵地といつて良く、100遺跡を数える。調査がなされた遺跡は、縄文時代から中世まで各期の好資料・遺構が発見され飯田下伊那地区を代表する埋蔵文化財包蔵地密集地域といえる。

中央自動車道に伴う各遺跡の調査では各期の住居址等の遺構が調査され、扇状地中央部分付近の遺跡の状況が明確にされた。

農業構造改善事業に伴う中島平遺跡では、縄文時代早・前期、弥生時代後期、古墳時代の遺構が調査され、扇状地端の小さな舌状台地の遺跡の在り方が注目された。

伊賀良地区内の古墳は、52基が数えられているが、現存するものは数基である。古墳分布は飯田松川に面する扇端部、新川両岸の台地端部などに並ぶ。その他散在する古墳がわずかに見られる。

奈良時代に入って律令制が整い、古代東山道がこの地区を通過していた。「延喜式」には、美濃国坂本駅から神坂峠を越えて信濃国阿知駅・育良駅の名前が見え、育良=伊賀良の関連も指摘され、有力な候補地の一つとされている。

育良駅は阿知駅と共に、その所在は確認されておらず、位置については諸説があり、ともに中央自動車道から、南東側の扇状地端部にかけて設定されている。(注1)

中世に入ると伊賀良庄の記録(注2)がある。鎌倉時代初期伊那郡伊賀良庄の地頭が北条時政で、江馬氏が司り北条氏滅亡後は、小笠原氏の所領となり小笠原氏繁栄の基盤の一つとなった地区である。また、当遺跡の西方約500mには、桜山城跡があり、戦国期においても何らかの意味を持った地としての位置付けもなされる。

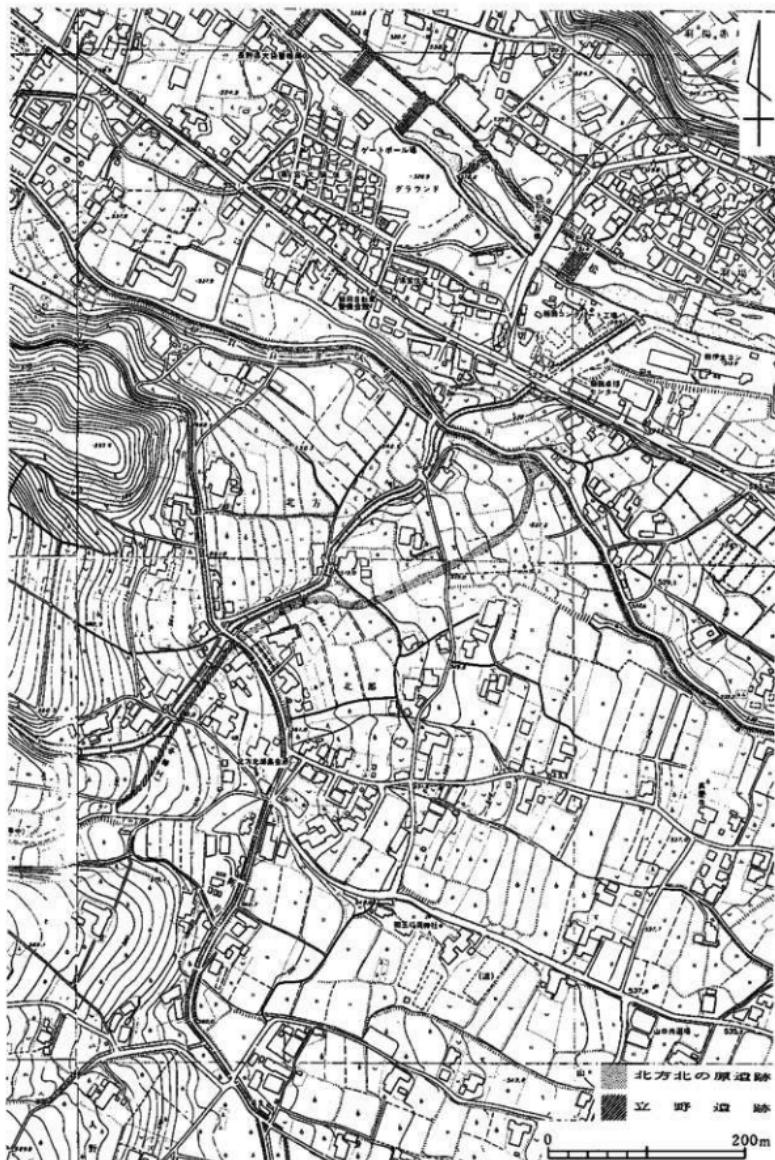
この様に伊賀良地区を歴史的に概観したが、広大で肥沃な地であり、原始より古代そして現代まで大いに栄えた地ということができる。

こうした歴史背景のなかで、北方北の原遺跡は、原始・古代の人々の生活の場であったとともに、伊賀良地区全域を見下ろす地にあり、地区内で展開された各時代の様々な人々の生活を見続けてきた場所でもある。

遺構の確認された、縄文時代から弥生時代において、自然災害が恒常的であり、かつかのような高所まで居住域を求めた当時の生活や、当時の人々の旺盛な生き様が偲ばれる遺跡といえる。

注1 市村 咸人 1961 下伊那史第4巻 下伊那史編纂委員会

注2 宮下 操 1967 " 第5巻 "



挿図2 調査位置及び周辺地図



挿図3 北方北の原遺跡調査区地番

### III 調査の結果

#### 1) 調査区の設定

現地発掘調査におけるグリッド設定は、国土基本図式に基づき、 $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ の正方形小区画に分割し、調査区地番ごとに付した。(『三尋石遺跡 三尋石(II)遺跡』 1996 飯田市教育委員会 参照)

#### 2) 基本層序

調査地は、地形が複雑に変化する舌状台地側面の斜面にあり、氾濫等により複雑な堆積を見せる。このため、各地点における基本層序を以下に示したが、それぞれ各層毎の対比は困難である。

##### 1. 1861番地

第III層(挿図5参照)にて検出された遺構は、溝跡のみであり近世以降に比定される。第VI層(挿図5参照)では遺構は確認できなかったが、出土した遺物は、縄文時代晚期後半に比定される。第VII層(挿図5参照)にて検出された遺構は、縄文時代中期後半～晚期後半のものであり、遺物の出土も多い。第XII層(挿図5参照)では、前期後半から中期前葉の遺物が僅かではあるが出土している。

##### 2. 1863番地

第III～IV層(挿図6参照)にて検出された遺構は、ほとんどが縄文時代晚期に比定され、出土遺構・遺物はかなり多い。第V層(挿図6参照)では、遺構の確認はできたものの、時期が比定できる遺物は出土しなかった。第VII層(挿図6参照)では、尖底土器が出土し、早期に比定されると思われるが、遺構は確認できなかった。以降各層を掘り下げ、隨時検出をおこない第XII層(挿図6参照)より表裏縄文土器が、第XV層(挿図6参照)より爪形文土器が出土し、遺構は確認できなかったものの、縄文時代草創期の包含層であるといえる。

##### 3. 1736-2番地

第IX層・第XII層・第XIII層(挿図8参照)にて検出をおこない、各層それぞれで遺構・遺物を確認するが、遺構の時期は特定にまでは至らなかった。

##### 4. 1746番地

第V層・第VI層・第IX層(挿図9参照)にて検出をおこない、それぞれに遺構・遺物を確認するが、遺構の時期は特定できない。

##### 5. 1748番地

第III層・第IV層(挿図7参照)にて検出をおこない、それぞれに遺構・遺物を確認するが、遺構の時期は特定できず、特に氾濫による砂礫層の堆積が見られる。

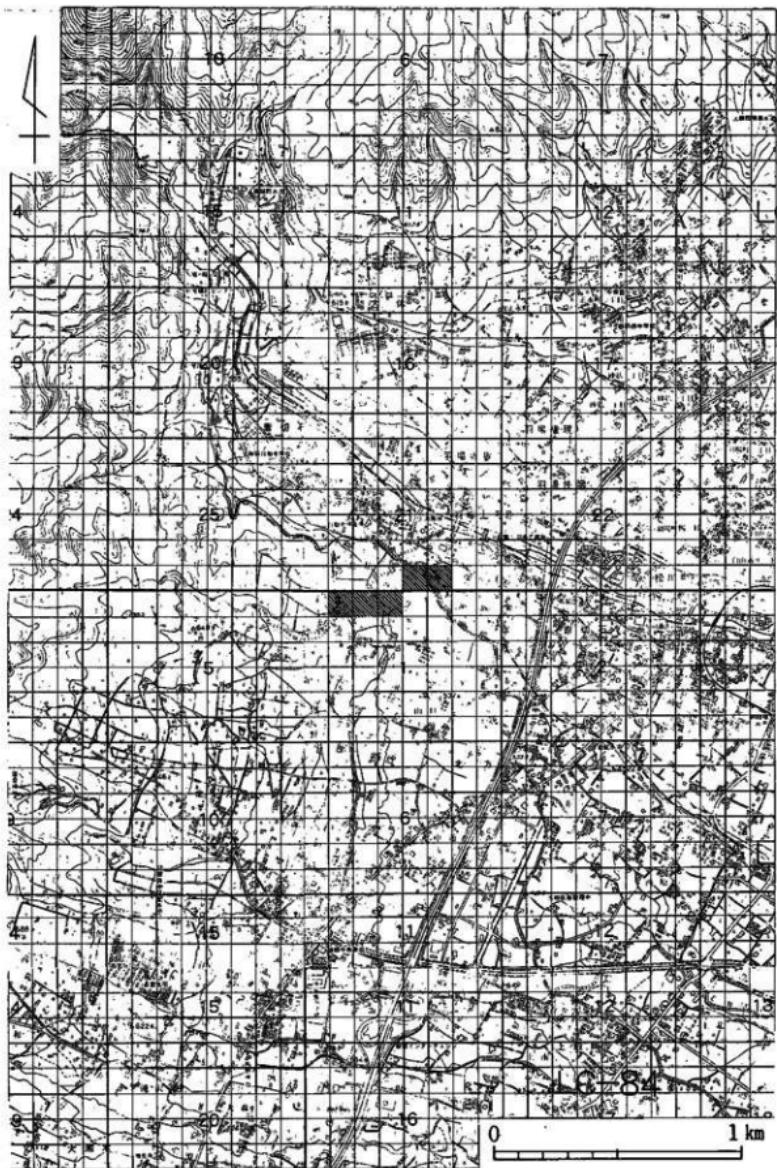
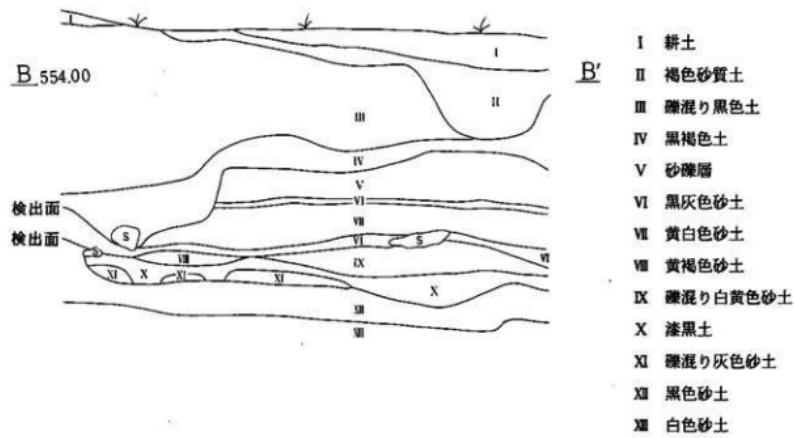
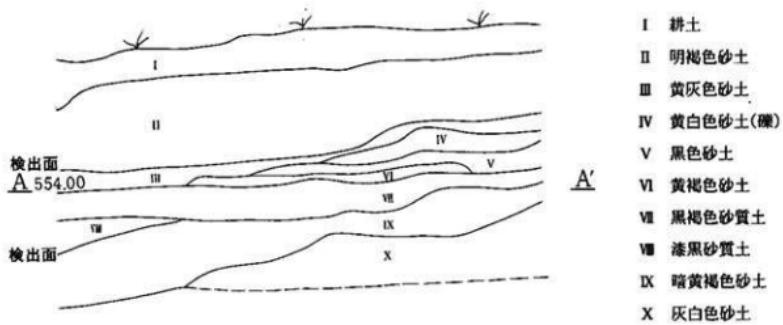
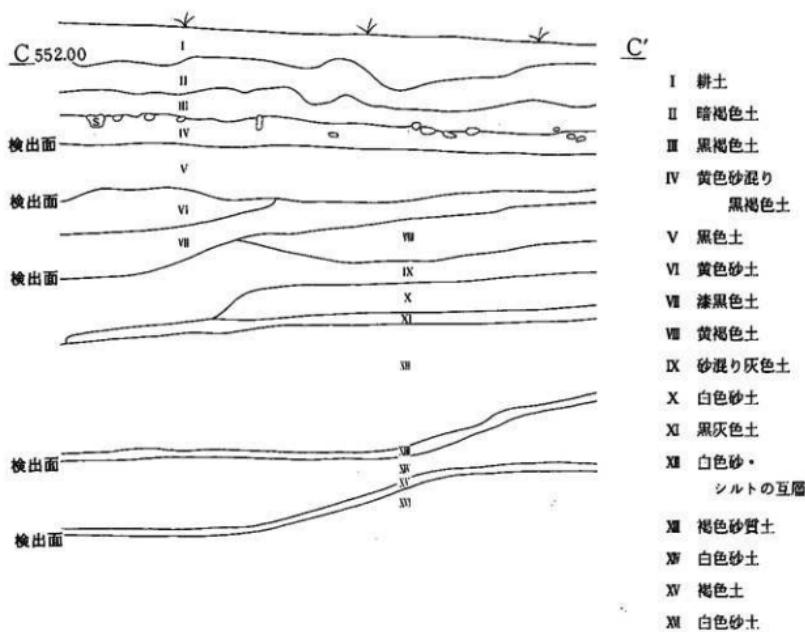


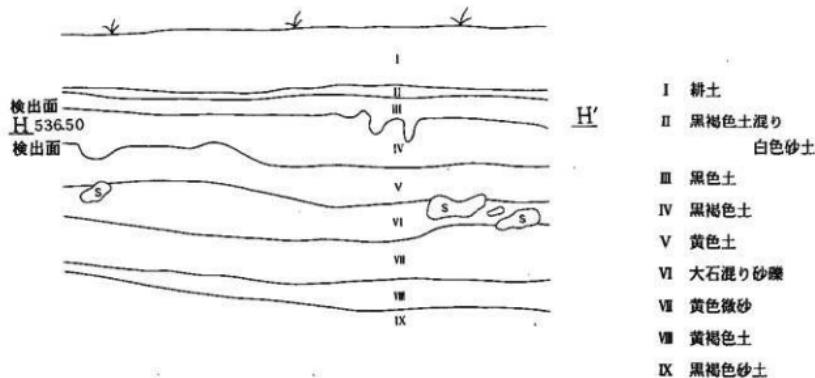
図4 基準メッシュ区画位置図



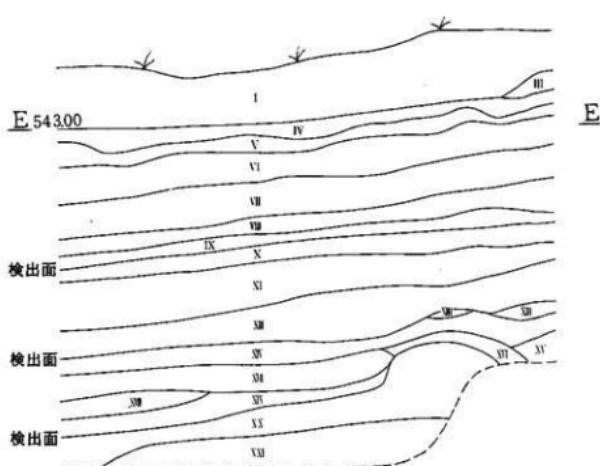
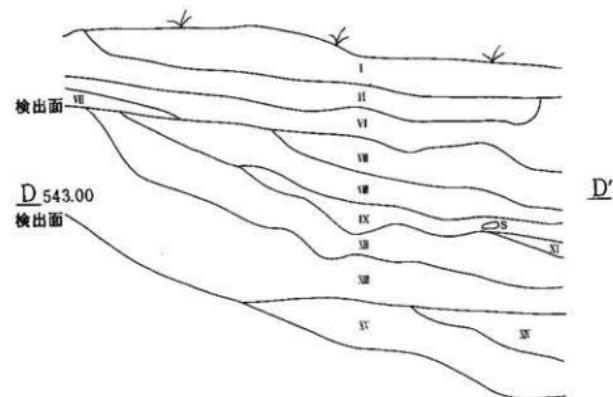
挿図5 1861番地 基本層序（上段 南東側 下段 北西側）



挿図 6 1863番地 基本層序

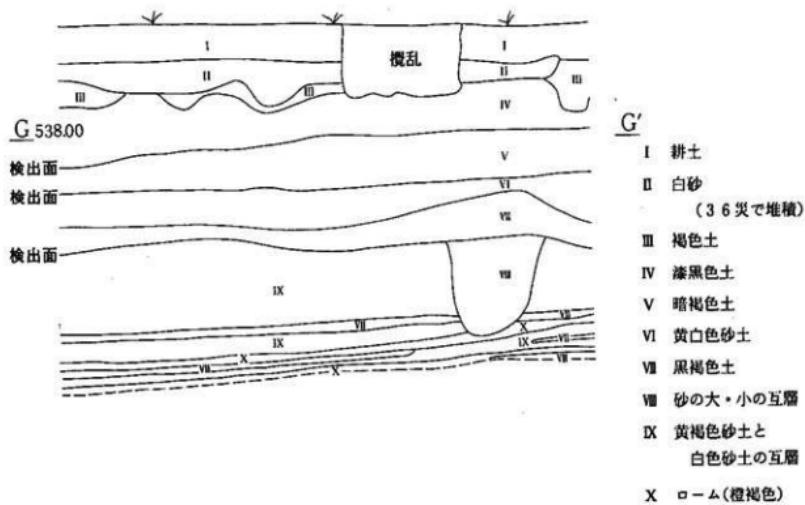
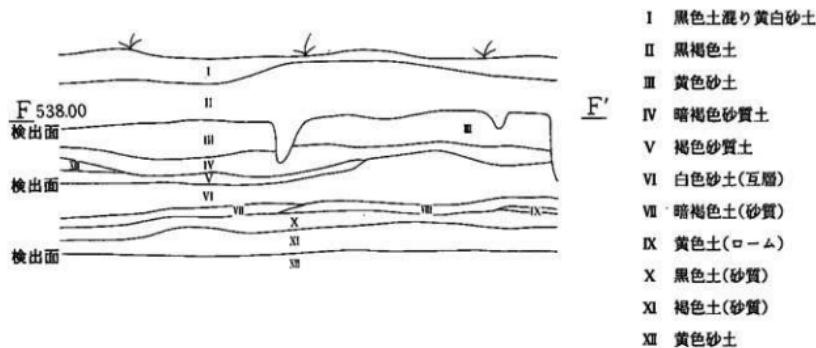


挿図 7 1748番地 基本層序



- I 横乱
- II 耕土
- III 暗褐色土混り  
黒褐色土
- IV 暗褐色土
- V 黑色土
- VI 暗黄褐色土
- VII 漆黒土
- VIII 暗黄褐色土
- IX 黑褐色砂質土
- X 黑色砂質土
- XI 橙白色砂土
- XII 黑褐色土
- XIII 暗黄褐色土
- XIV 黑褐色土
- XV 灰黑色砂質土
- XVI 橙褐色砂質土
- XVII 黑色砂質土
- XVIII 灰色砂土
- XIX 黑色砂土
- XX 灰白色砂土
- XXI 橙灰色砂土

挿図 8 1736-2番地 基本層序（上段 西側 下段 南側）



挿図9 1746番地 基本層序 (上段 南西側 下段 南東側)

### 3) 調査結果

#### 1. 縄文時代

##### (1) 壺穴住居址

###### ① 1号住居址（挿図10・42・43）

1861番地、第X層（挿図5参照）のB F12を中心として検出された不整形の壺穴住居址である。

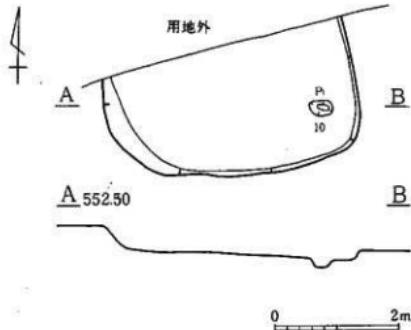
規模は東西396cmを測るが、南北は調査区外にかかるため不明である。壁高は40cm前後で緩やかに立ち上がる。

床面は、灰色砂層上に部分的に硬く締まっており、周溝および焼土は確認されない。

主柱穴はP1と考えられるが、深さ10cm程と浅く、遺物は確認されない。

炉などの施設も確認されておらず、出土遺物も僅かであり詳細は不明である。

出土遺物は、水式土器がほとんどであり、縄文時代晚期後半に比定される。



挿図10 1号住居址

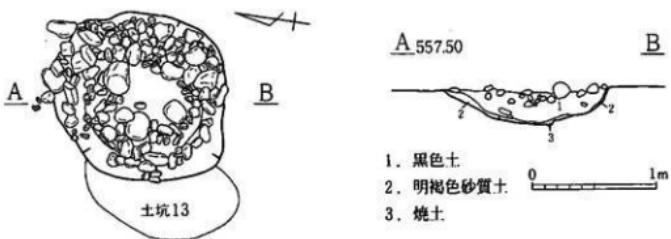
##### (2) 集石

###### ① 集石1（挿図11）

1861番地、第VII層（挿図5参照）のA R43・44で検出した。152×132cmの範囲に大小の礫が集中し、焼けた花崗岩が目立ち、埋土に炭が入る。中央部には礫は確認されない。埋土は三層に分層できるが、上層に礫が多いほか下層からは、あまり出土していない。

土坑13を切っており、壁面はなだらかに落ち込んでいる。底部からはしっかりとした焼土が確認でき、この状況より集石炉と判断できる。

形態・埋土ほか周囲の状況より、縄文時代中期の可能性があるが、出土遺物はなく、時期の特定は困難である。



挿図11 集 石1

② 集石3（挿図12）

1861番地、第VII層（挿図5参照）のA U49で砂質土に掘り込まれて検出した。84×90cmの範囲に10~20cm程度の礫が分布し、それらのほとんどは焼けている。埋土は黒色土で、底部で僅かに焼土が確認できるが、炭等は認められない。

この状況より、集石炉と判断できるが、炉としての使用期間は短いといえる。  
出土遺物はなく、時期は不明である。

③ 集石4（挿図13）

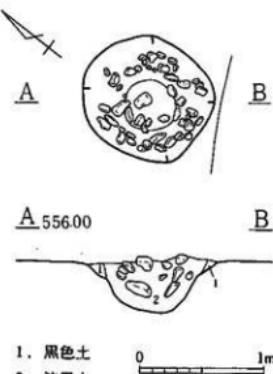
1861番地、第VII層（挿図5参照）のB E14で検出した。88×68cmの範囲に10cm前後の礫がまばらにあり、そのほとんどが焼けている。

埋土は、ほぼ全面が炭層であり、炭化物が多く確認される。確認面より底部までは、15cm前後で浅く、今次調査で確認した集石と比較すると、極端に浅い。

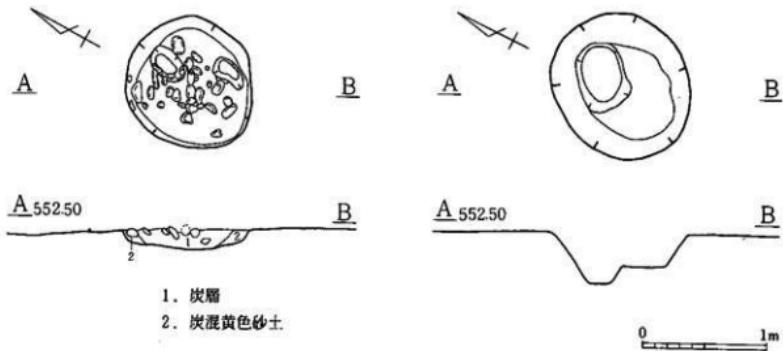
壁面は、ほぼ垂直に立上がり、底部は平坦で焼土が僅かに確認できるのみである。

これらの状況より、集石炉と判断できる。

埋土より、縄文時代中期の土器が出土しているが、小片で図化できず、詳細時期は不明である。



挿図12 集 石3



挿図13 集石4

### (3) 土器棺墓

#### ① 土器棺墓1 (挿図14・44)

1863番地、第Ⅲ～Ⅳ層（挿図6参照）のB E32より黒褐色土に掘り込まれて検出される。土器は80×52cmの範囲で確認され、横倒しに埋められた三個体の土器からなる。主軸（長軸）はN 101° Eを測り、二個体は口縁部分を合わせてあり、もう一個体は、西側土器の底部にかぶせるようになる。

西側土器は、口径46cm・器高47cmの壺であり、底部に網代痕がある。この底部にかぶせられた土器は、底部より胴部にかけて確認されるが、口縁部はない。

東側土器は、口径43cm・器高は底部を欠くので不詳であるが44cm以上ある。口径はこの土器が小さいものの、西側土器の口縁部の一部にかぶせるようにしてある。

また、それぞれの土器の両側底部付近には、意図的に掘えたと考えられる20cm前後の花崗岩石がある。土器棺内部の埋土は、褐色土の単層で、遺物・炭化物等は確認できないものの、土器その物は、ほぼ原形に近い状態で出土している事より、何らかの物を入れて埋めたものと考えられる。

形態より合わせ口壺棺墓であると判断できる。

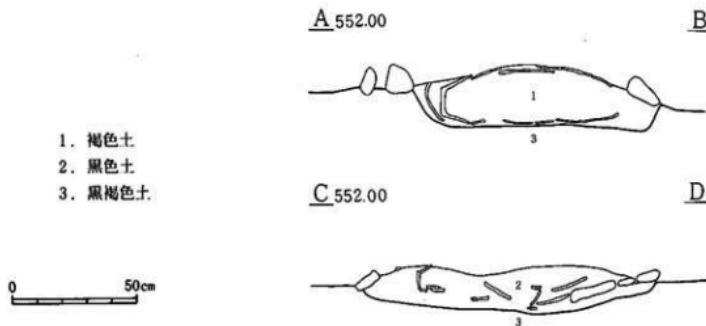
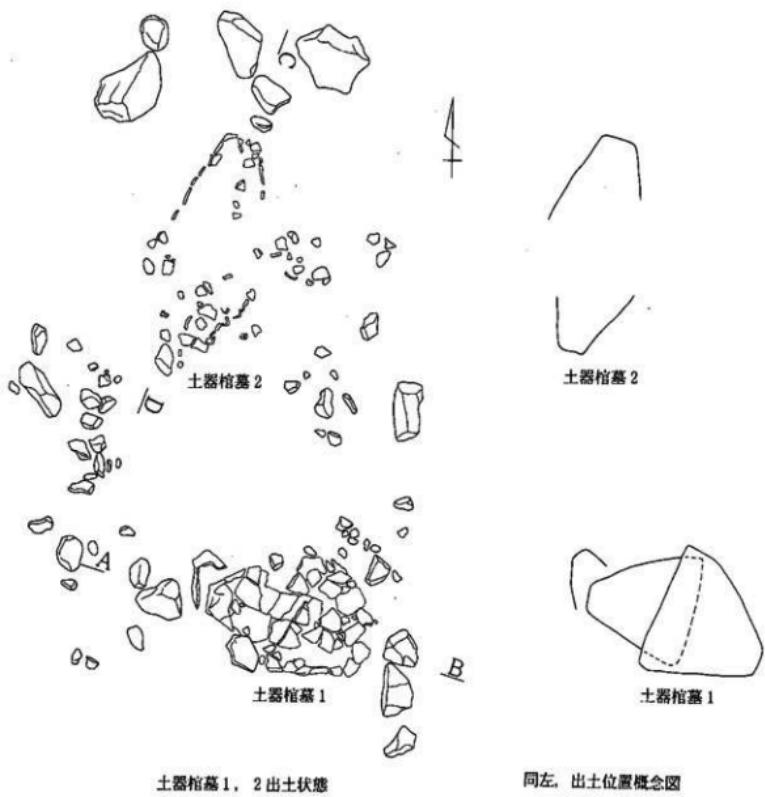
#### ② 土器棺墓2 (挿図14・45)

1863番地、第Ⅲ～Ⅳ層（挿図6参照）のB F32より黒褐色土に掘り込まれて検出される。土器は平面で98×53cmの範囲に二個体が横倒しになり、口縁部分を合わせた状態で、土器棺墓1に隣接して確認される。主軸はN14° Eを測る。

北側土器（挿図45 1）は、口径51cm・器高50cmを測り、南側土器（挿図45 2）は胴部のみで、口縁部及び底部はなく、これが北側土器の内側に入る。

土器棺墓の埋土は、黒色土の単層で、遺物・炭化物などは確認されないが、平らな花崗岩石が南側の一部に据えられている。

形態より、これらは合わせ口壺棺墓であると判断できる。



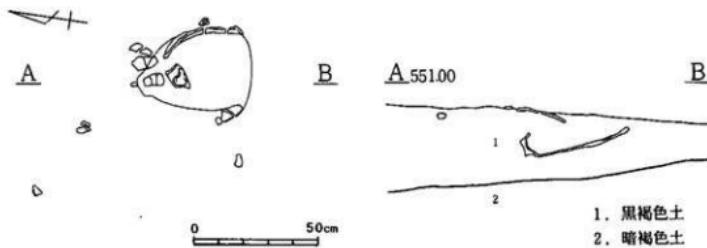
插図14 土器棺墓 1, 2

③ 土器棺墓 3 (挿図15・45)

1863番地、第Ⅲ～Ⅳ層（挿図6参照）のB D40より黒褐色土に掘り込まれて検出される。土器は平面で77×60cmの範囲で横倒しになり、口縁部分が南側を向いて出土する。主軸はN18° Wを測る。

出土土器は、口径38cm・器高37cmを測り、口唇部に連鎖状押圧文を施し、口縁下に2個の補修孔を穿った深鉢である。土器棺墓の埋土は、黒褐色土の単層で、炭化物等は確認されない。

周囲の状況より、甕棺墓であると判断できる。



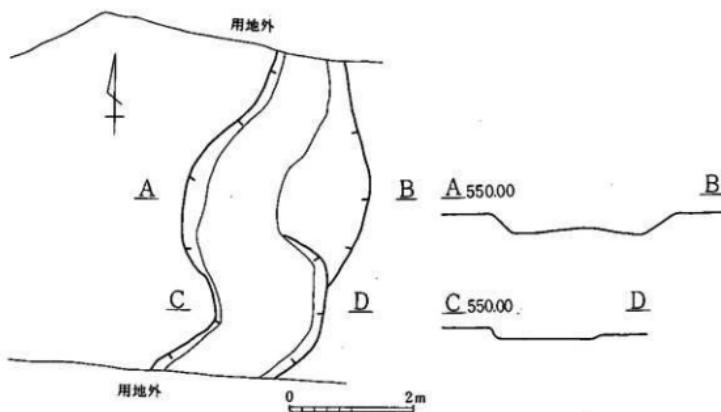
挿図15 土器棺墓 3

#### (4) 溝 址

##### ① 溝址 1 (挿図16)

1863番地、第V層(挿図6参照)のB E33・34付近で南北方向に確認される。規模は調査できた範囲で5.9m、幅1.0m~2.9m、深さ0.2~0.3mで、底部は北側に向かって低くなる。埋土は黒褐色砂質土で、水成の堆積である。

出土遺物はなく、時期は不明である。



挿図16 溝 址 1

##### ② 溝址 2 (挿図17)

1863番地、第V層(挿図6参照)のB E36付近で南北方向に確認される。規模は、調査できた範囲で5.3m、幅2.0~5.1m、深さ0.3m~0.9mで、北側に段になり低くなる。埋土は黒褐色砂質土で水成の堆積である。

出土遺物はなく時期は不明である。

##### ③ 溝址 3 (挿図18・46)

1861番地、第III層(挿図5参照)のA U42付近で溝4を切って検出。幅1.8m、深さ0.7m、長さ6.0mでさらに用地外へ延びる。覆土は暗褐色の砂質土で、底は礫が露出する。

出土遺物は、土器片が数点あり、挿図46-1は諸磯C式土器片であり、縄文時代前期後半とみられるが、氾濫による混入品である。

入野沢川の旧河道とみられ、溝址5の深い部分の可能性もある。

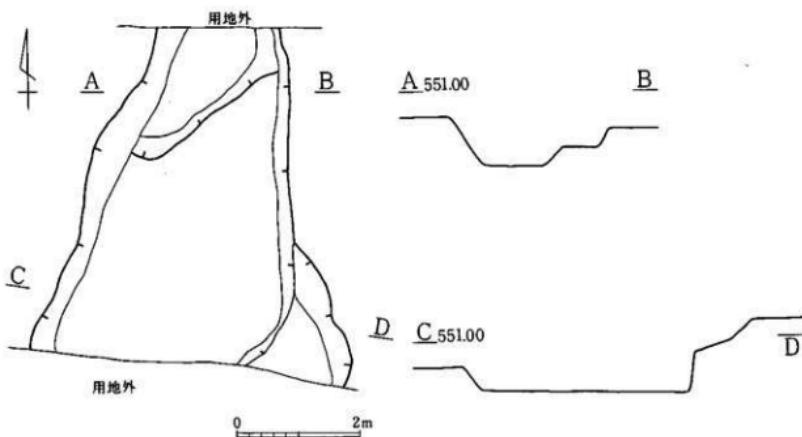
##### ④ 溝址 4 (挿図19・46)

1861番地、第III層(挿図5参照)のA T39付近の用地外から始まり溝址3に切られる。完掘で

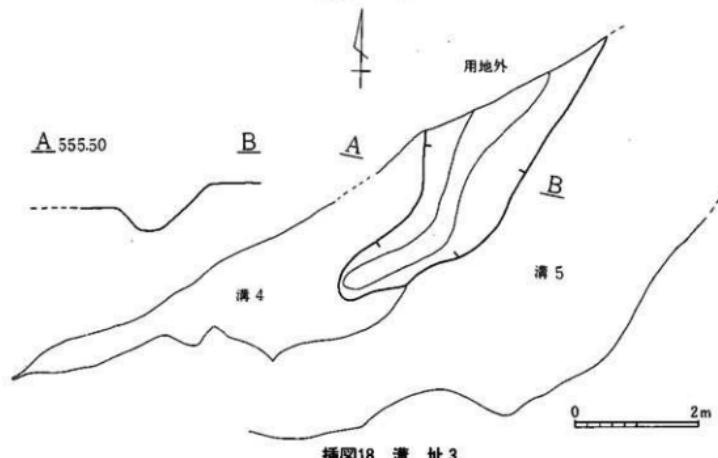
きなかったため、規模は不明。調査できた範囲で 7.6m、深さ 0.6m、最大幅で 1.7m であった。  
AV41付近では段になる。覆土は暗褐色砂質土で、底は礫が露出する。

入野沢川の旧河道とみられ、出土遺物は縄文時代早期の土器が数点あるが、いずれも氾濫による混入品である。

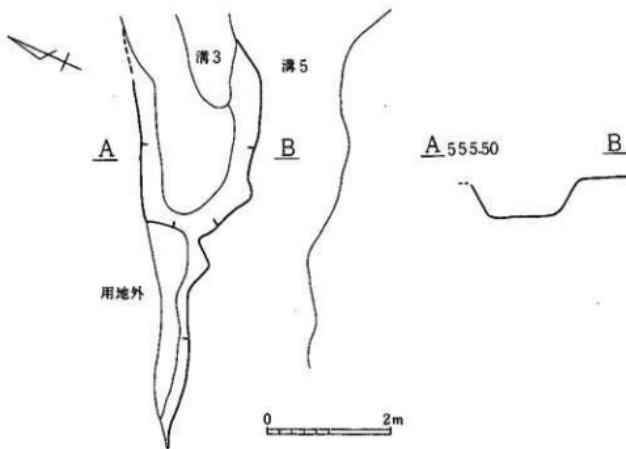
溝址 5 の深い部分の可能性がある。



挿図17 溝 址 2



挿図18 溝 址 3



挿図19 溝 址4

⑤ 溝址5（挿図20・46）

1861番地、第Ⅲ層（挿図5参照）のAQ37付近の用地外からAX45付近まで約20m、幅3.2mを確認したが、さらに用地外に広がる。覆土は暗褐色の砂で深さは0.5m程度あった。遺物の出土はなく時期不明。

入野沢川の旧河道とみられ、地形に沿って西から東へ流れた跡と考えられる。

出土遺物は、縄文時代中期後葉の土器があるが、いずれも混入品である。

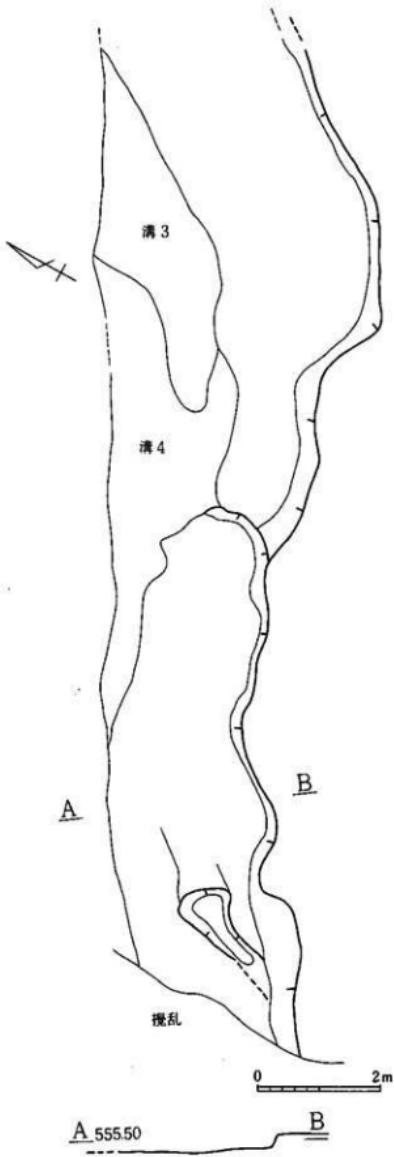


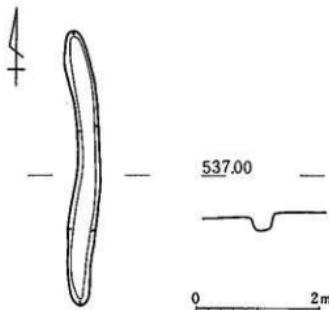
插圖20 溝 址 5

## (5) 溝状址

### ① 溝状址 1 (挿図21)

1748番地、第IV層（挿図7参照）のB E 30付近で南北方向に確認される。規模は全長 4.4m、幅 0.4m前後、深さ 0.2～0.3mで、底部はほぼ平坦である。埋土は黒褐色砂質土で、水成の堆積となる。

出土遺物はなく時期・性格は不明である。



## (6) 土坑

### ① 土坑 1 (挿図22)

1861番地、第VII層（挿図5参照）でB E

挿図21 溝 状 址

9・10にかけて検出された2.2×1.6mの不

整円形の掘り込みである。深さは40cm弱あり、壁面はほぼ垂直に落ち込み、底部は平坦である。埋土は黒褐色砂質土で、炭・焼土・疊等は確認されない。

遺物は、分銅型石器・馬の歯・近世陶器等が出土しており、土壤墓と考えられる。

土坑 2 と切り合って確認できたが、新旧関係は不明である。

出土遺物より、中・近世以降に比定できる。

### ② 土坑 2 (挿図22・47)

1861番地、第VII層（挿図5参照）でB E 9から用地外にかかって検出された (2.0)×1.4m 楕円形の掘り込みである。深さは50～60cm程を測り、底部は平坦であり、30cm前後の疊がならぶ。埋土は黒褐色砂質土である。

土坑 1 と切り合っているが新旧関係は不明である。

遺物は、縄文時代晩期後半の土器および近世の陶器が出土しており、このことより近世以降に比定できる。

### ③ 土坑 3 (挿図22)

1861番地、第VII層（挿図5参照）のB C13で検出された径90cm程の円形の掘り込みである。深さは20cm前後で、埋土は炭層・炭混黄色砂土の二層である。炭層には8～10cm程の疊が入り、それらは焼けている。

壁面は、やや緩やかに落ち込み、砂質土のため軟弱である。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

### ④ 土坑 5 (挿図23)

1863番地、第III～IV層（挿図6参照）のB E 35で検出された200×175cmの不整形の掘り込みで

ある。深さは100cm前後で、埋土は上層から黄色砂土・黄色砂土混黑色土・黒色土の三層で、黄色砂土には40cm前後の疊が入る。

土坑6を切り、壁面はやや緩やかに落ち込み、ほぼ中心部分で急角度に落ちる。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

#### ⑤ 土坑6（挿図23・47）

1863番地、第III～IV層（挿図5参照）のB E35で検出された（200）×220cm程の梢円形の掘り込みである。深さは60cm前後で、埋土は黒色土である。

土坑5に切られており、壁面はやや緩やかに立ち上がる。

底部付近より、縄文時代晚期の土器（挿図47-5）が出土している。この事より、縄文時代晚期に比定される。

#### ⑥ 土坑7（挿図22・47）

1861番地、第VII層（挿図5参照）のA U45・46で検出された200×175cm程の不整円形の掘り込みである。深さは80cm弱で、壁面は西側で緩やかに立上がり、地山の疊が確認される。

埋土は黒褐色砂質土の一層で、底部はほぼ平坦になり、疊が出土している。

出土遺物は、縄文時代前期後半・晚期後半の土器があり、この事より晚期後半に比定される。

#### ⑦ 土坑8（挿図22）

1861番地、第VII層（挿図5参照）のA S・AT44で検出された260×160cm、深さ50cm弱の掘り込みである。壁面は緩やかに立ち上がり、砂土のため軟弱である。底面は、東側になだらかに傾斜しており、30cm前後の疊が確認できる。

埋土は明褐色砂土で、出土遺物はなく時期・性格は不明である。

#### ⑧ 土坑9（挿図22・47）

1861番地、第VII層（挿図5参照）のAV45でロームマウンド・ピットに切られて確認される不整形の掘り込みである。規模は、270×140cm、深さ50cm前後で、壁面は緩やかに立ち上がる。

埋土は黒色砂質土で、若干ではあるが縄文時代中期後半の土器が出土している。この事より縄文時代中期後半に比定される。

#### ⑨ 土坑10（挿図22・47・48）

1861番地、第VII層（挿図5参照）のAV44で土坑11に接して砂土に検出された円形の掘り込みである。径は90cm、深さ40cm前後で、壁面は東側でほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は黒褐色砂質土で、底面には60cmほどの疊が確認できる。その疊の周囲からは、縄文時代中期終末の深鉢が出土し、また全体的にこの時期の遺物が多数出土する。このことより、縄文時代中期終末に比定される。

⑩ 土坑11（挿図22・48）

1861番地、第VII層（挿図5参照）で検出された土坑10に接して確認された不整形の掘り込みである。規模は150cm×100cm、深さ40cm前後で、壁面はやや緩やかに立ち上がる。

埋土は黒褐色砂質土で、上層からは径20cmほどの礫が入り、一部は焼けている。

遺物は、縄文時代中期終末の土器が多く出土しており、土坑10と同様この時期に比定される。

⑪ 土坑12（挿図22・48）

1861番地、第VII層（挿図5参照）のA T43で検出された不整形の掘り込みであり、溝址5を切り、ピットに切られる。規模は180×150cm、深さ100cmで壁面は緩やかに立ち上がる。

埋土は黒褐色土で、底面は二段になり砂土である。

出土遺物は、縄文時代前期後半および中期後半の土器があるが、僅かであり、時期・性格は不明である。

⑫ 土坑13（挿図22）

1861番地、第VII層（挿図5参照）のA R43で検出された梢円形の掘り込みで、集石1に切られる。規模は長さ126cm・深さ65cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。

埋土は漆黒色砂質土で、底部は平坦となる。

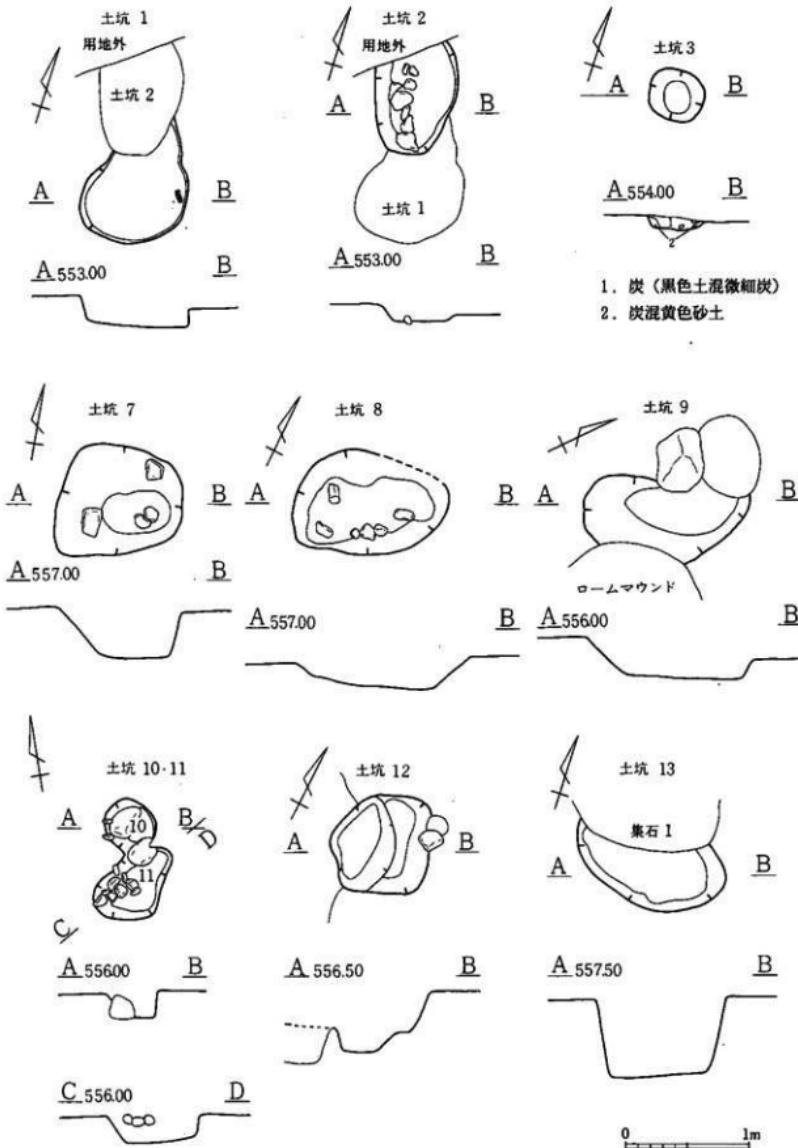
出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

⑬ 土坑14（挿図24）

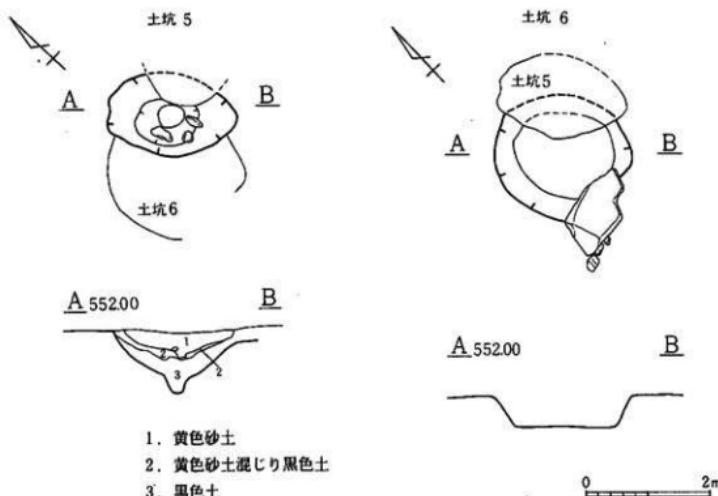
1863番地、第III～IV層（挿図6参照）のB E32で検出された梢円形の掘り込みである。規模は118×90cm・深さ65cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。

埋土は暗褐色土で、底部はナベ底状となる。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。



插図22 土坑 1～3, 7～13



挿図23 土 坑 5, 6

⑭ 土坑15（挿図24）

1736-2番地、第IX層（挿図8参照）のB T 43で検出された $70 \times 64\text{cm}$ の不整形の掘り込みである。深さは40cm前後で、埋土は黒色土と黄色砂土で、後者には40cm前後の礫が入る。土坑 6 を切り、壁面は緩やかに落ち込み、ほぼ中心部分で急角度に落ちる。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

⑮ 土坑16（挿図24）

1736-2番地、第IX層（挿図8参照）のB T 48で検出された不整椭円形の掘り込みである。規模は $92 \times 75\text{cm}$ ・深さ24cmを測り、やや垂直の壁面をなす。

埋土は黒色土で、底部はナベ底状となる。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

⑯ 土坑17（挿図24）

1736-2番地、第IX層（挿図8参照）のB T 49で検出された不整椭円形の掘り込みである。規模は $54 \times 42\text{cm}$ ・深さ18cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。

埋土は黒褐色砂質土で、底部は平坦となる。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

⑩ 土坑18（挿図24）

1748番地、第IV層（挿図7参照）のB D29で検出された楕円形の掘り込みである。規模は32×22cm・深さ32cmを測り、南側が緩やかで北側が垂直の壁面をなす。

埋土は黒褐色砂質土で、底部は小さい。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

⑪ 土坑19（挿図24）

1748番地、第IV層（挿図7参照）のB E29で検出された細長い楕円形の掘り込みである。規模は50×27cm・深さ16cmを測り、緩やかな壁面をなす。

埋土は黒褐色砂質土で、底部は平坦となる。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

⑫ 土坑20（挿図24）

1759番地のB E29で検出された細長い楕円形の掘り込みである。規模は132×110cm・深さ32cmを測り、緩やかな壁面をなす。

埋土は褐色砂土で、底部はナベ底をなす。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

⑬ 土坑21（挿図24）

1736-2番地、第XII層（挿図8参照）のB R45で検出された不整形の掘り込みである。規模は95×48cm・深さ26cmを測り、緩やかな壁面をなす。

埋土は炭混黒褐色砂質土で、底部に長楕円形の小穴がある。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

⑭ 土坑22（挿図24）

1736-2番地、第XII層（挿図8参照）のB U2で検出された円形の掘り込みである。規模157cm・深さ83cmを測り、緩やかな壁面をなして途中で稜をもつ。

埋土は褐色砂質土で、底部は西側がわずかに低くなる。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

⑮ 土坑23（挿図25）

1746番地、第V層（挿図9参照）のA F22で検出された不整形の掘り込みである。規模は60×44cm・深さ27cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。

埋土は褐色砂質土で、底部は平坦である。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

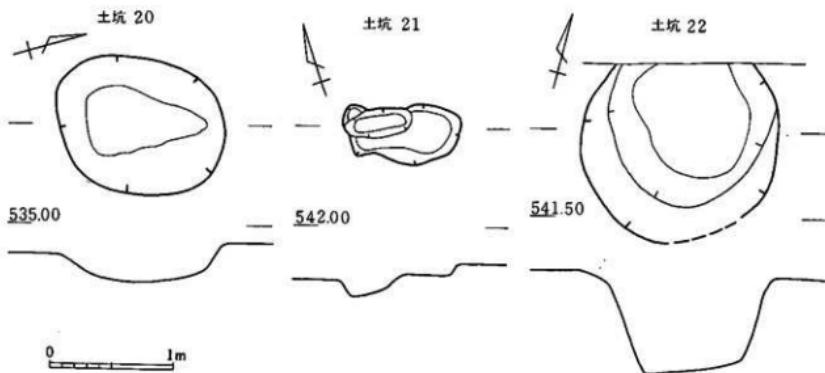
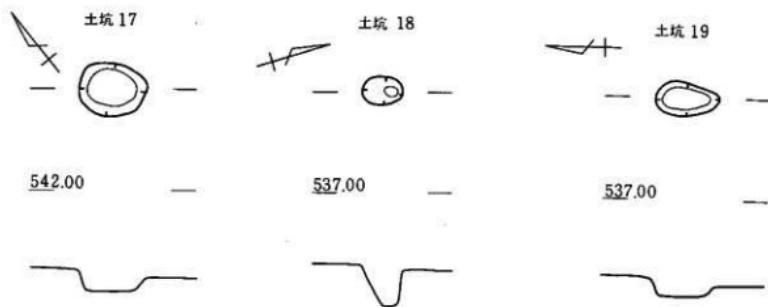
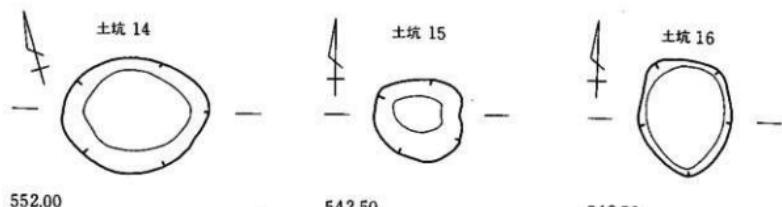


插圖24 土坑14~22

② 土坑24（挿図25）

1748番地、第IX層（挿図7参照）のB C31で検出された不整円形の掘り込みである。規模は85×84cm・深さ14cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。

埋土は褐色砂質土で、底部は平坦である。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

③ 土坑25（挿図25）

1748番地、第IX層（挿図7参照）のB G33で検出された不整形の掘り込みである。規模は106×100cm・深さ54cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。

埋土は黒褐色砂質土で、底部は平坦である。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

④ 土坑26（挿図25）

1748番地、第IX層（挿図7参照）のB I 31で検出された不整円形の掘り込みである。規模は110×106cm・深さ61cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。

埋土は黒褐色砂質土で、底部は平坦である。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

⑤ 土坑27（挿図25）

1748番地、第IX層（挿図7参照）のB K32で検出された不整円形の掘り込みである。規模は100×69cm・深さ54cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。

埋土は黒褐色砂質土で、底部は平坦である。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

(7) 遺構外出土遺物

調査地点地番毎に分類し、資料提示した。（挿図49～67）遺構外については一括提示とした。

1) 1861番地

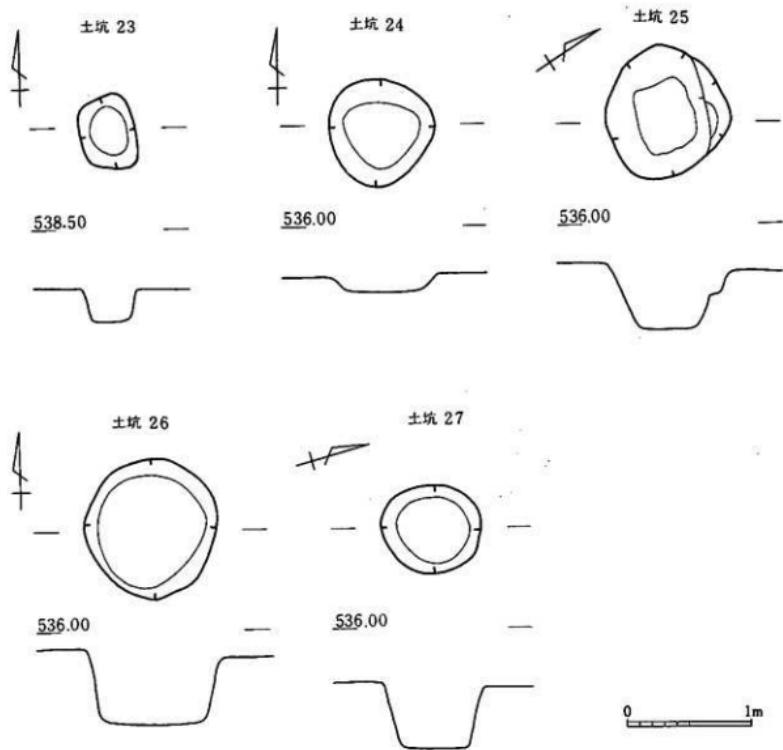
① 縄文時代早期

氾濫による堆積層である第II～IV層（挿図5）より、押型文土器が計13点出土している。それらの挿図49の1～6は山形文で、7・8は格子目文施文、7は横位、8は縦位施文と思われる。

挿図50の1・2はネガティブ文、3～5は梢円文で、3・4は横位密接施文され、繊維を含む。5は縦位密接施文されている。

② 縄文時代前期

早期と同じ層より、約50点の出土があるが、図示できるものは、挿図51の1～37である。1・



挿図25 土坑23~27

2・4~12・15~18・33・34・36・37は、諸磯a~c式土器である。30~32は、前半の羽状縄文系土器である。3・19~24・35は、関西系の前期終末の土器であり、25~28は北白川下層2b~2cである。

### ③ 繩文時代中期

第II~X層（挿図5）より出土し、遺物の量が最も多い時期である。しかし、遺構出土遺物と接合するものはない。

挿図52 1~6は、中期初頭の五領ヶ台期併行の沈線文系で、7は中期中葉末の井戸尻Ⅲ期併行の櫛形文、8~26は中期中葉末から中期後葉にかけての細隆線文系土器である。27~挿図53 4は、中期後葉の土器で、4は唐草文が衰退した形で、沈線の変わりに縄文を充填してい

る。5～挿図54・55は、中期最終末の結節縄文土器で、当地域では普遍的に出土するものである。

#### ④ 縄文時代後期

第II～IV層（挿図5）検出のAU45付近で、後期前葉の堀之内式に比定される土器が、多く出土している（挿図56 1～16）。また、AW0にかけての第II層で、後期中葉の加曾利B式と思われる土器が、出土している（挿図56 17～27）。

#### ⑤ 縄文時代晚期

1号住居址周辺のBB・BC5～9、X層より遺物が集中しており、すべて水I式土器である（挿図56・25～挿図58）。

なかでも挿図56の25～挿図57の5・11は浮線文で、挿図57の17～挿図58の9は細密条痕である。また、挿図57の6～8・15は粗製の深鉢形土器であり、10・12は壺形土器で、同一個体である。9は口縁部に押圧がされている。

### 2) 1863番地

#### ① 縄文時代草創期

挿図59の1～5は、第X層より出土した爪形文土器で、出土地点は北向きに傾斜する。6～8についても、第X層より出土した表裏縄文土器で、草創期末に位置づけられる。

#### ② 縄文時代晚期

第III～IV層検出の、BD32からBF40で出土し、細密条痕の土器が多い。土器棺墓と接合する遺物はないものの、この時期の遺構・遺物が大半を占めており、堆積状況から見ても、第III～IV層が、当該期に比定され、以降本調査地点は、比較的安定していた状況がわかる。

#### ③ 弥生時代

第III～IV層、調査区東端のBE43～44で確認された3点のみである。（挿図61 10～12）。いずれも壺片と思われるが、該期の遺構は、今回の調査では確認されていない。特に、12は後期の座光寺原式と考えられる。

### 3) 1736-2番地

#### ① 縄文時代早期

第X層（挿図8）より、挿図62 1～3の押型文土器が、第X層より4が出土するが、この調査地点で確認された遺構からは、遺物の出土は見られない。

石器については、挿図65の3がこの時期の石器と考えられる。

#### 4) 1746番地

##### ① 縄文時代早期

第Ⅲ～V層（挿図9）より、挿図62の5～7の押型文土器が出土するほかは、図示できる土器片はほとんど無く、いずれも小片である。

石器は、挿図66の8がこの時期に該当するといえ、10はスクレイバーと考えられる。また、挿図67の6は草創期～早期の拇指状搔器と考えられる。

#### 5) 1759番地

##### ① 縄文時代中期

該期の遺物は、土坑20付近の褐色砂土より出土する。いずれも中期前葉の土器と考えられるが（挿図63 3～6）、出土状況より氾濫による流れ込みと判断できる。

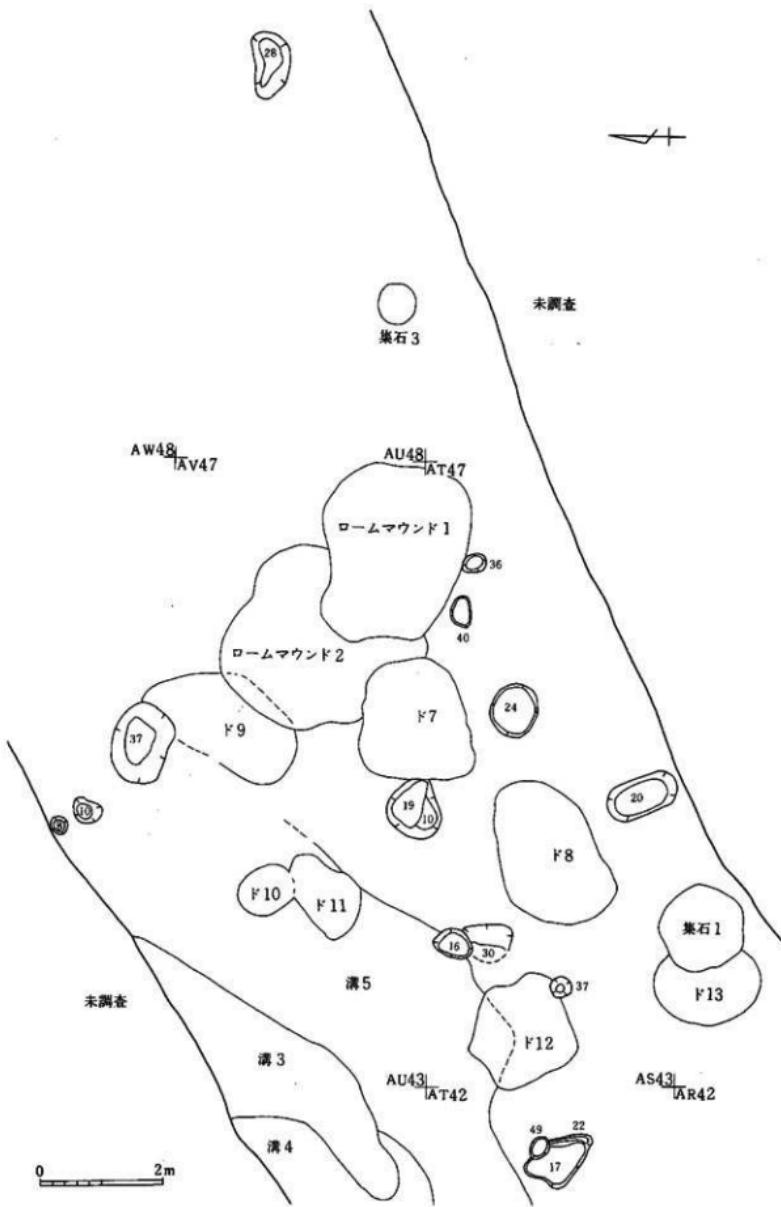
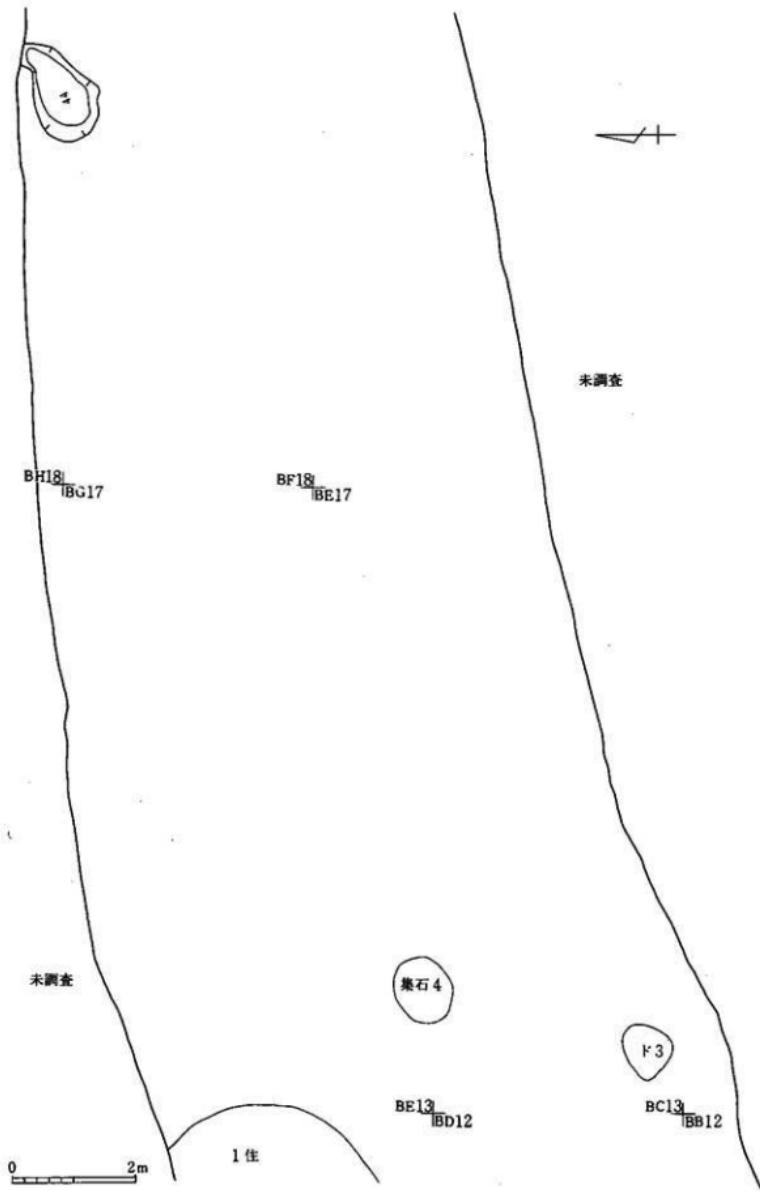
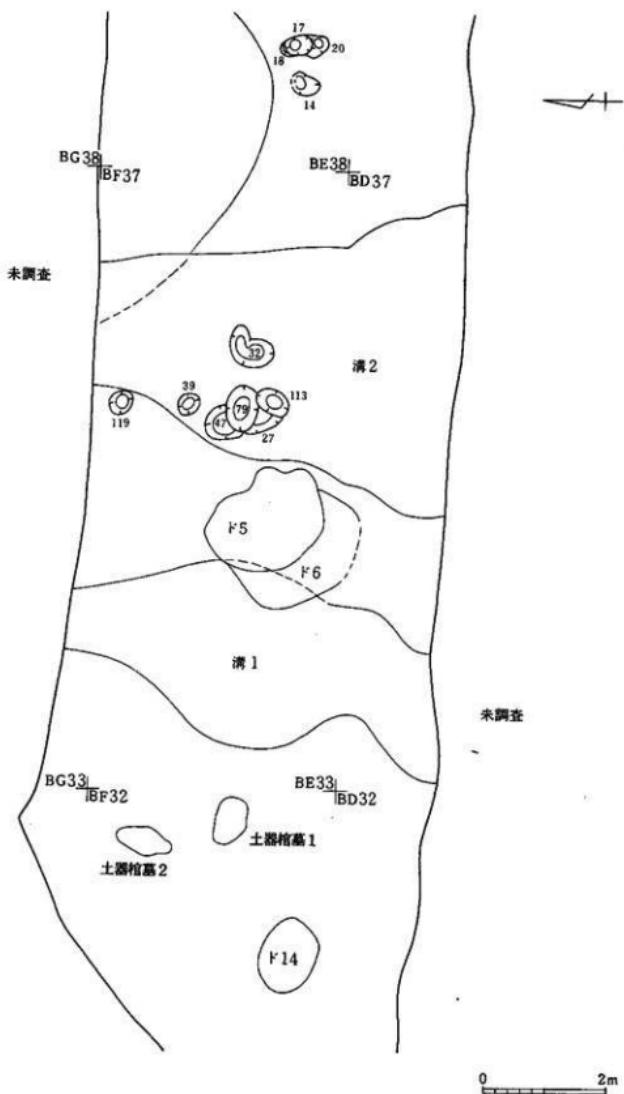


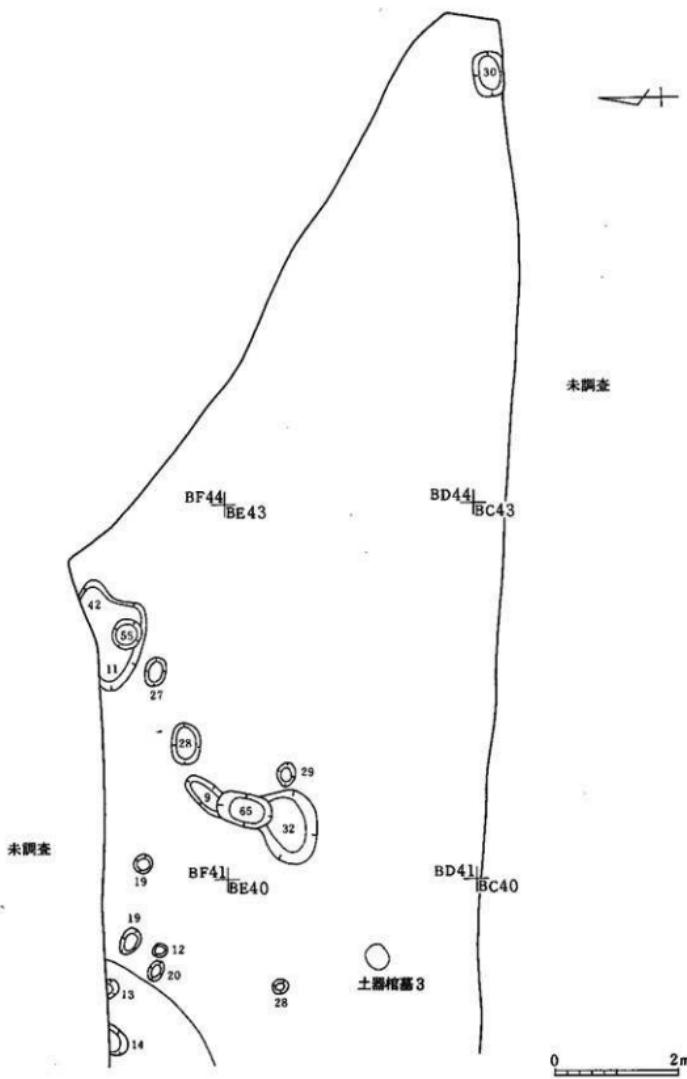
図26 1861番地 第Ⅷ層検出ピット



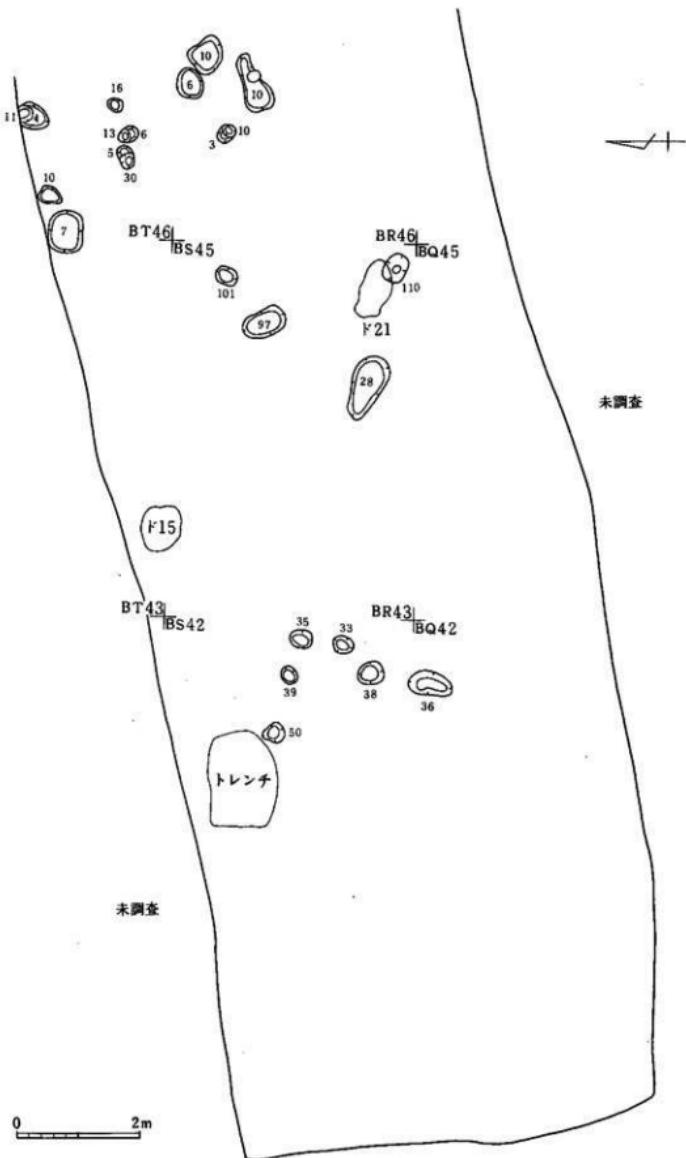
挿図27 1861番地 第Ⅳ層検出ビット



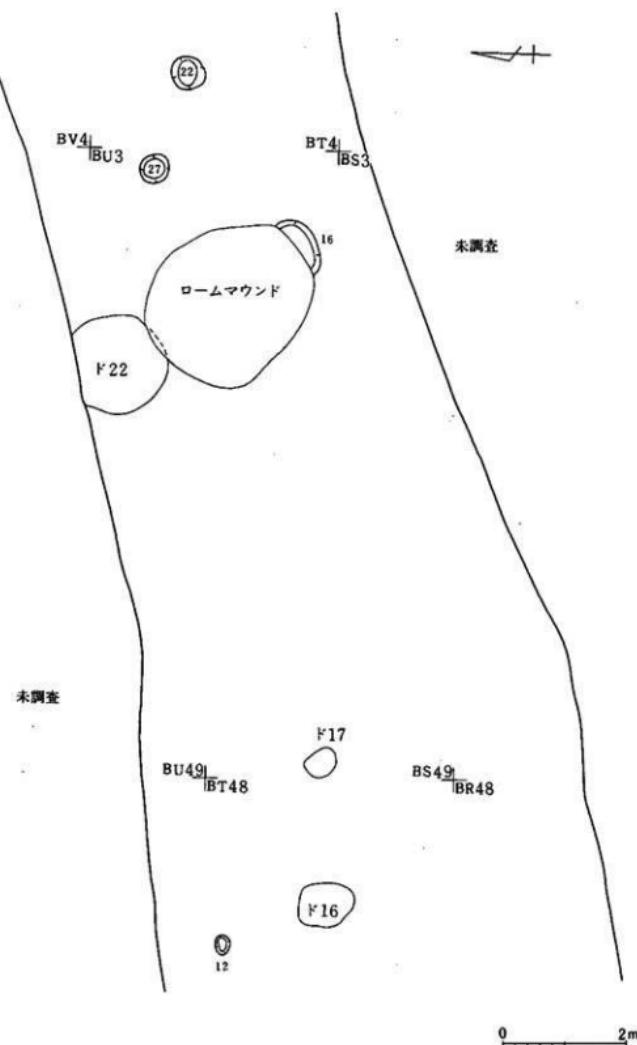
挿図28 1863番地 第III～IV層検出ピット

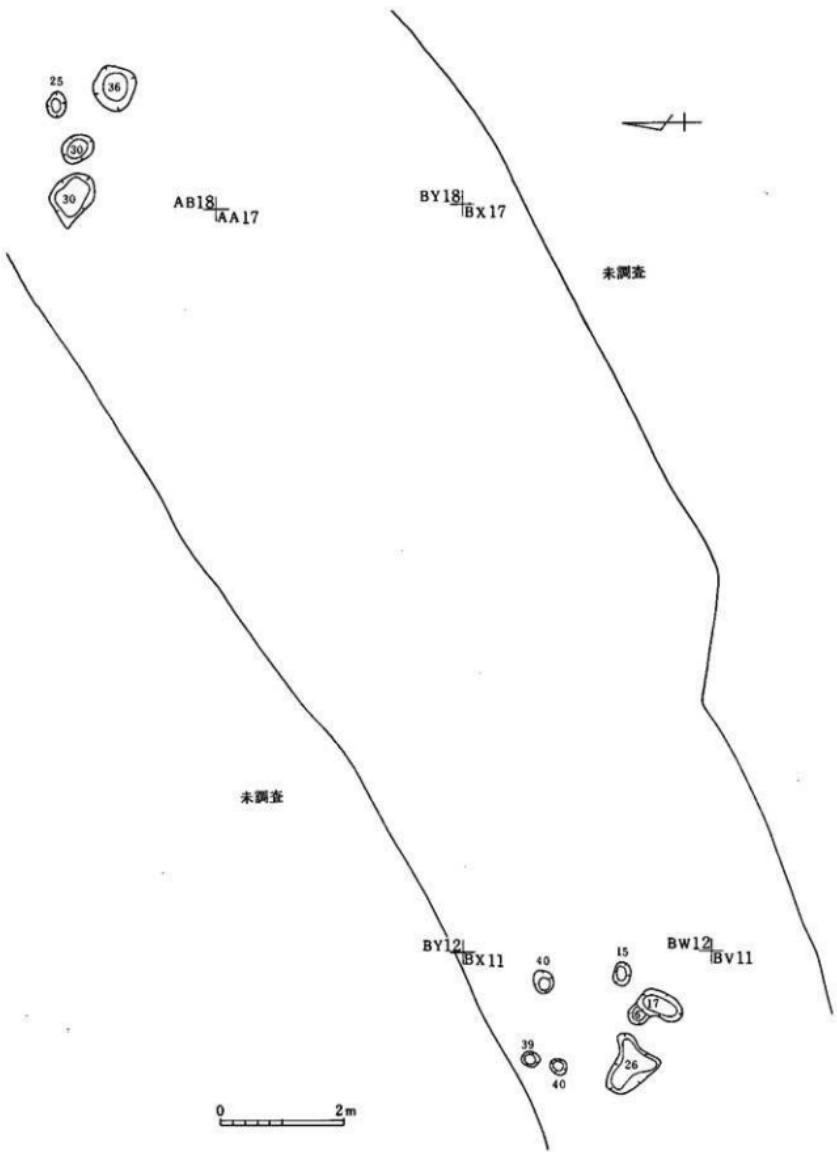


挿図29 1863番地 第III～IV層検出ピット

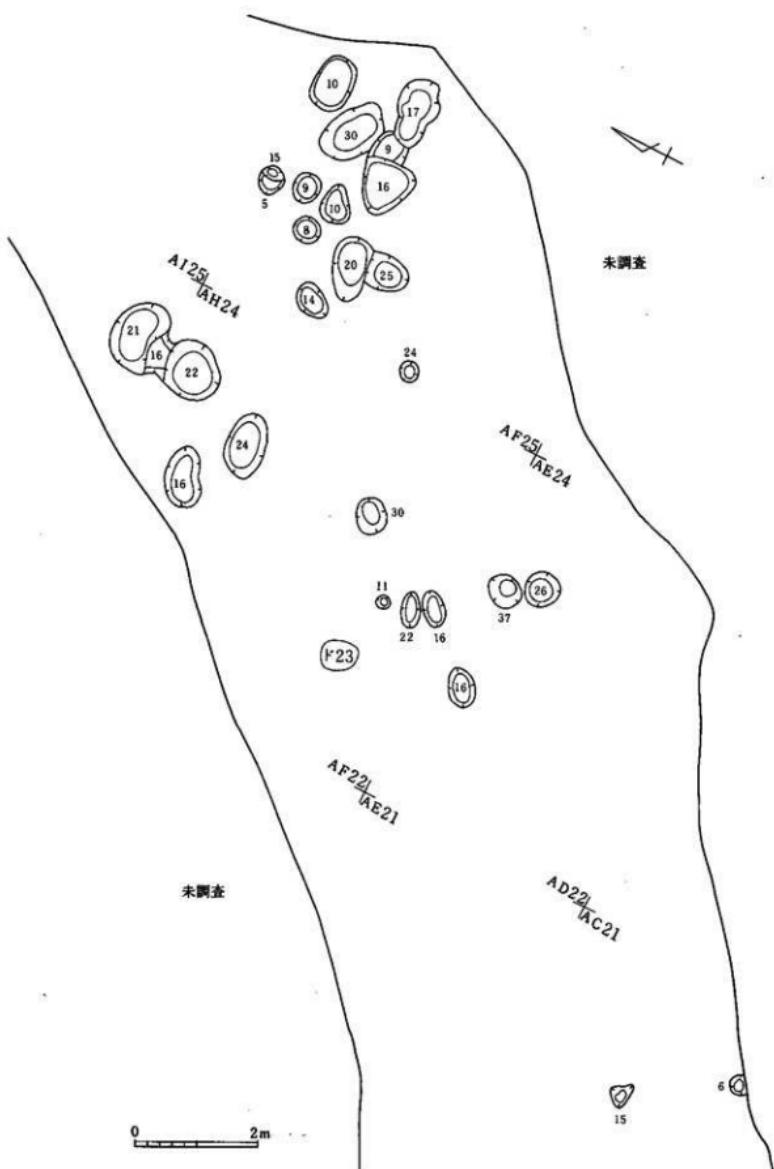


挿図30 1736-2番地 第IX層検出ピット

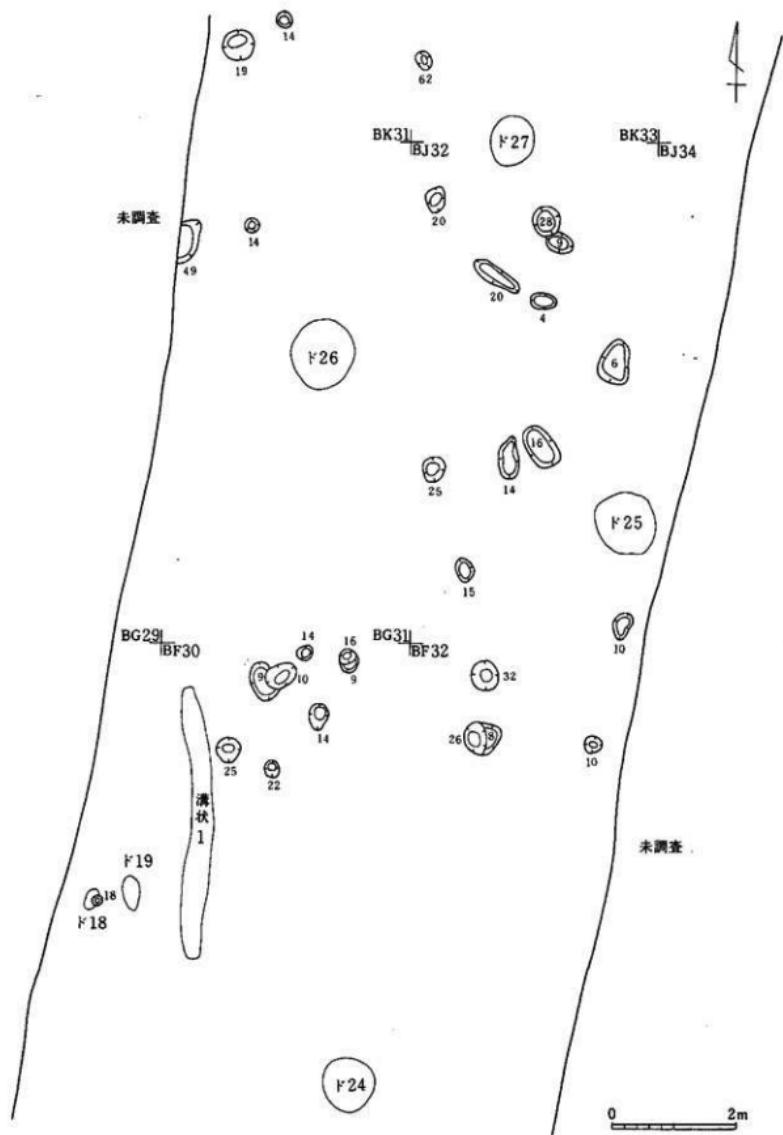




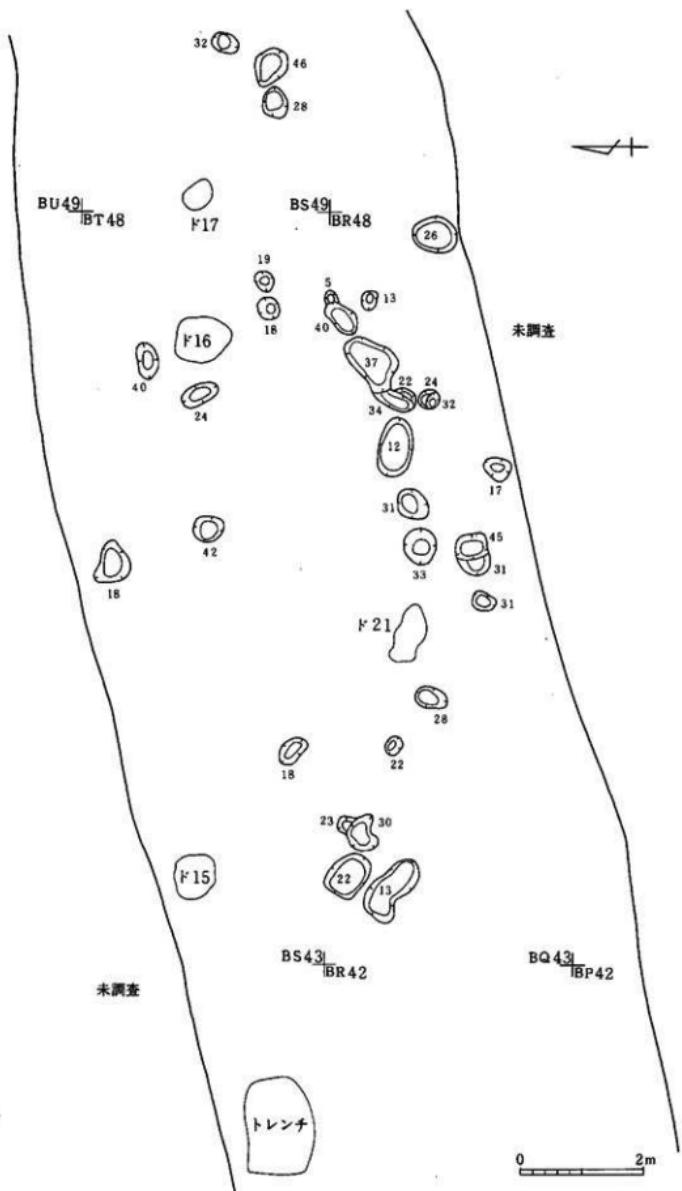
挿図32 1736-1番地 第IX層検出ピット



挿図33 1746番地 第IV層検出ピット



挿図34 1748番地 第III～IV層検出ピット



挿図35 1736-2番地 第XII層検出ピット

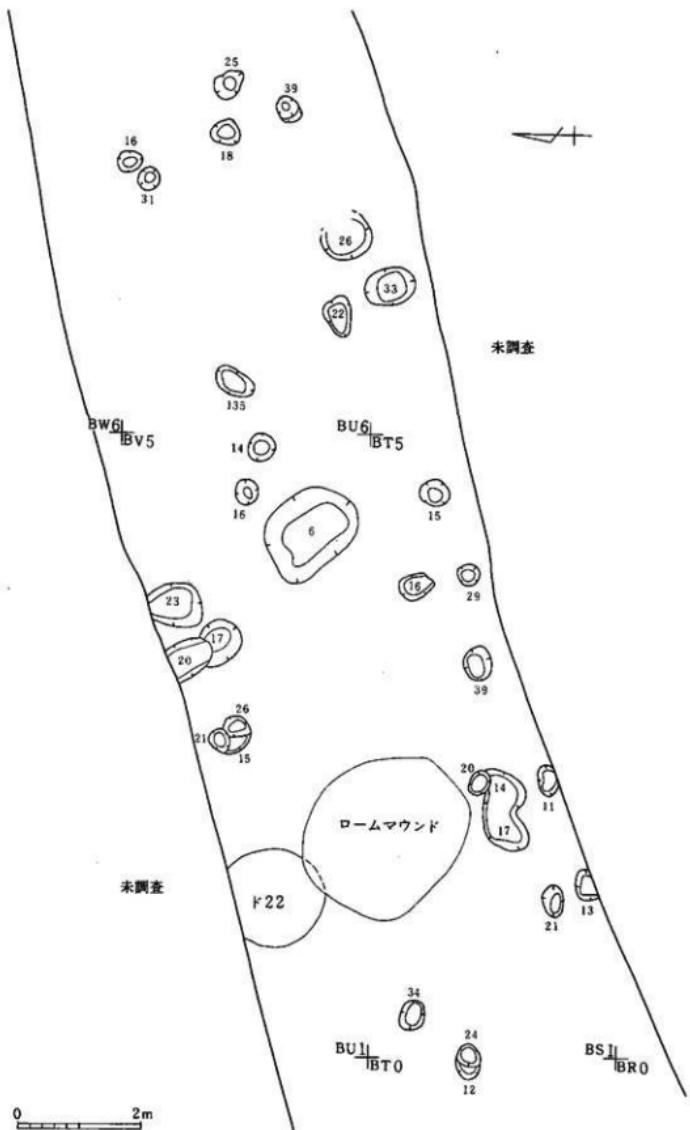
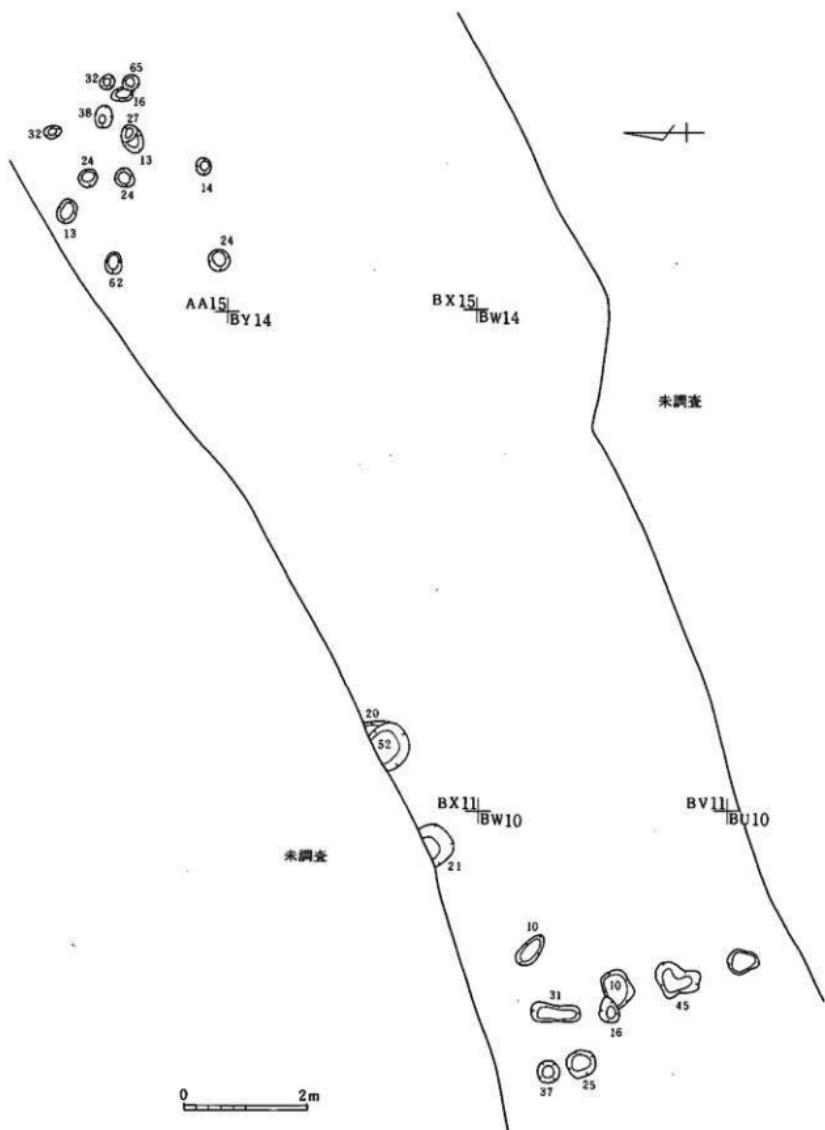
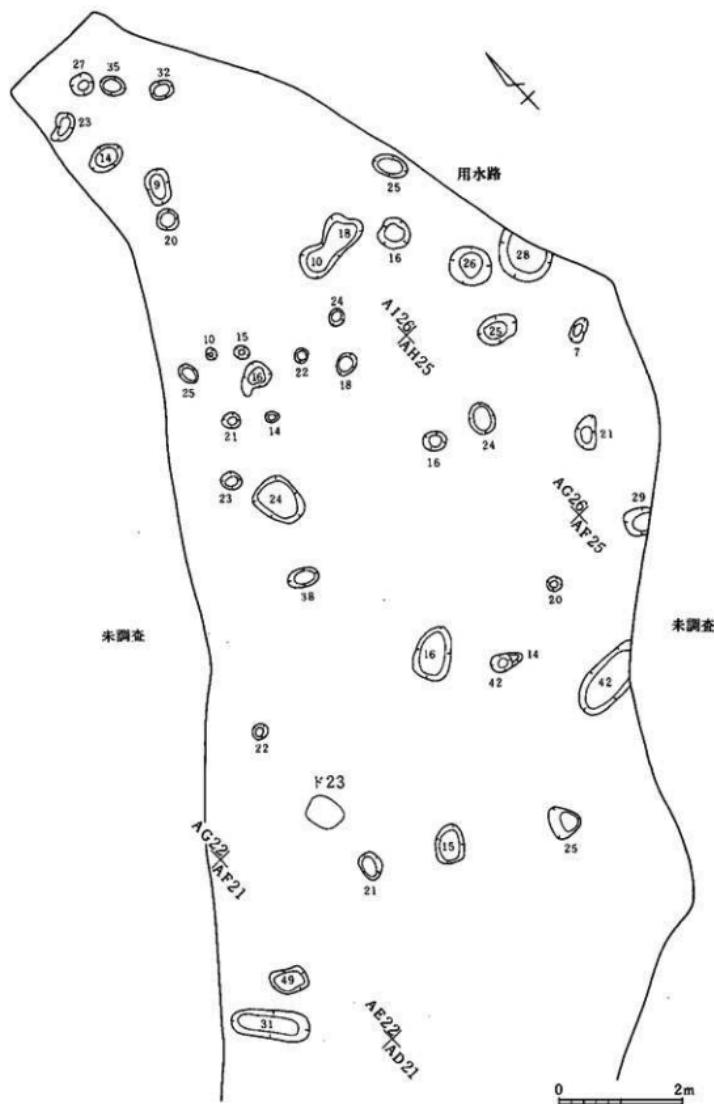


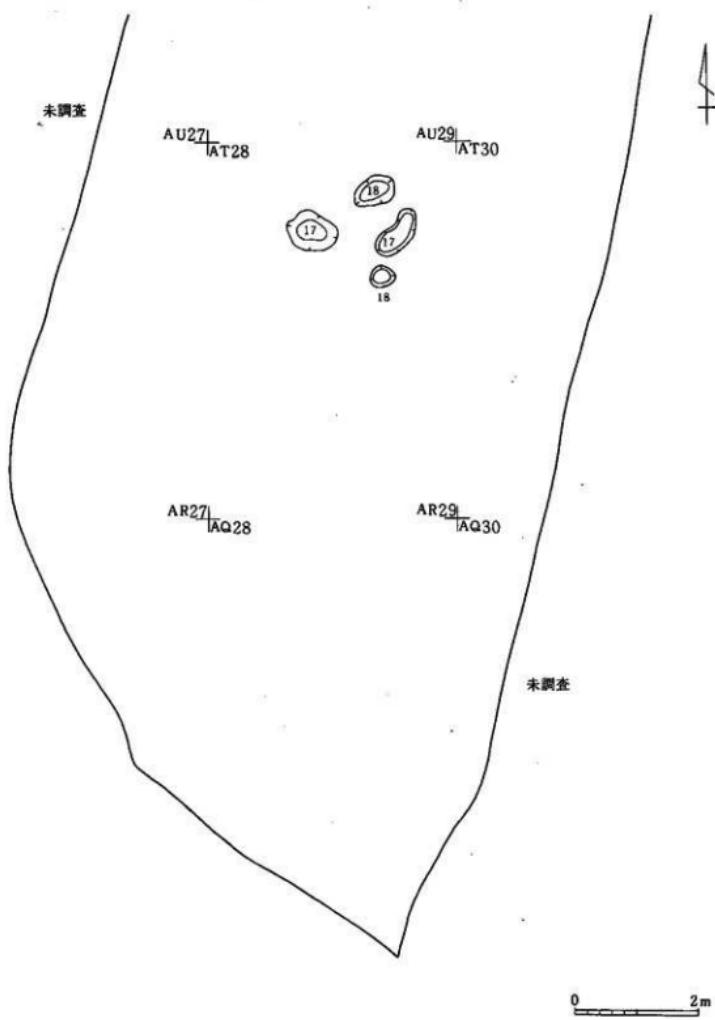
図36 1736-2番地, 1736-1番地 検出ピット



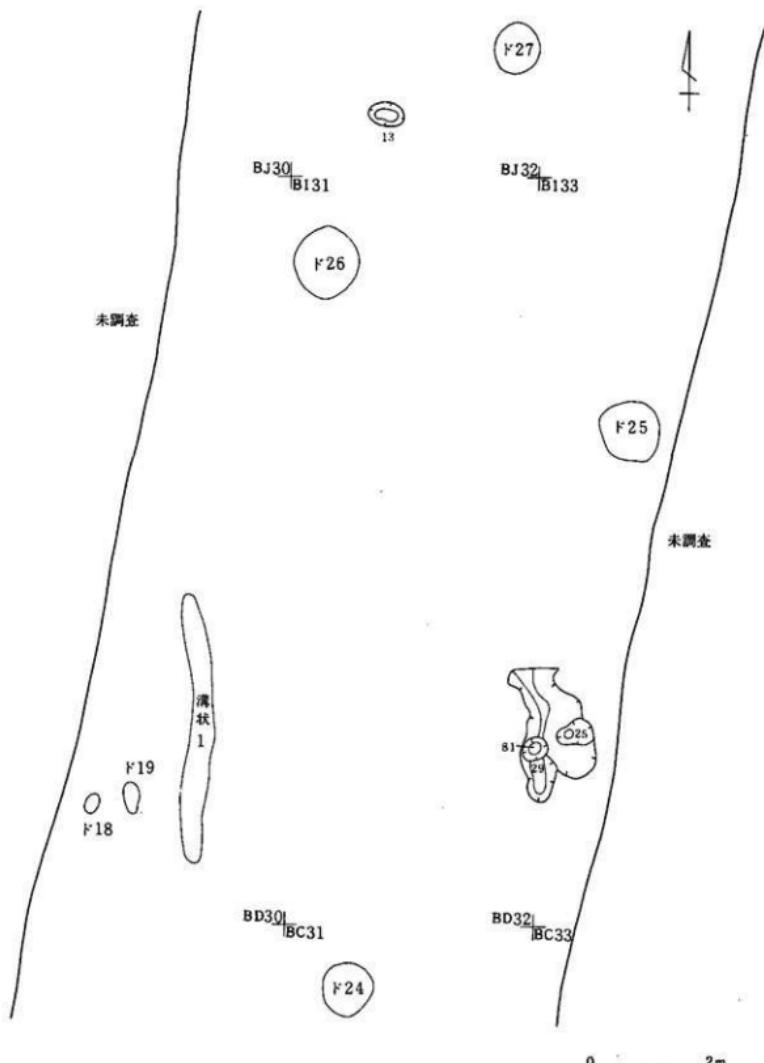
挿図37 1736-1番地 第III層・1746番地 第V層 掘出ピット



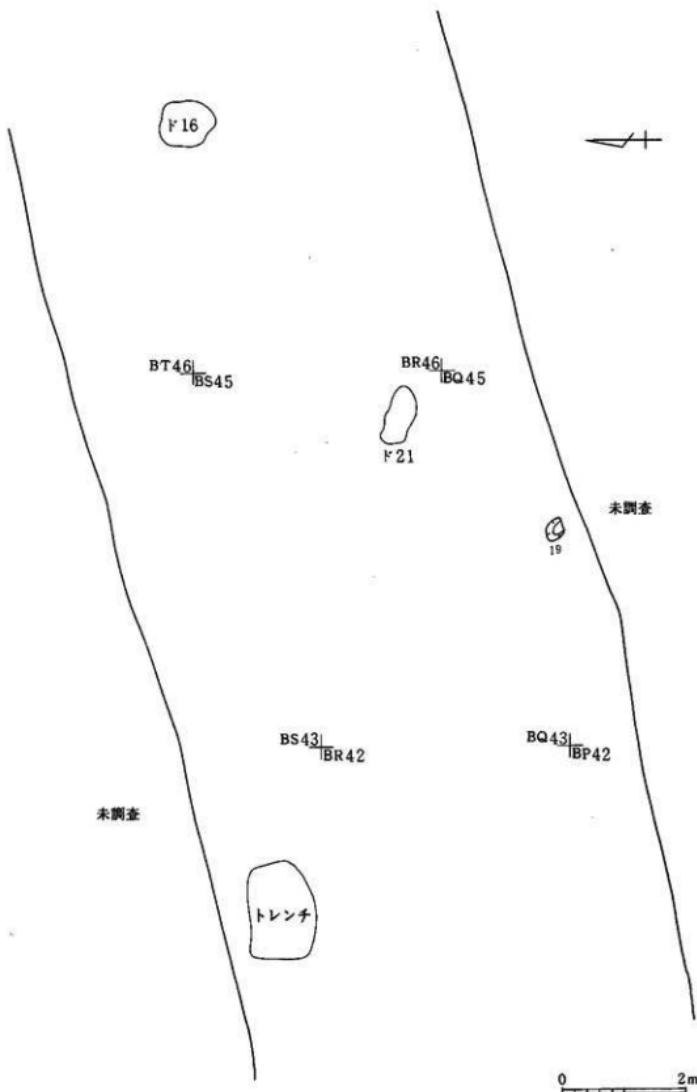
挿図38 1746番地 第V層検出ビット



挿図39 1748番地 第IX層検出ピット



挿図40 1748番地 第IX層検出ピット



挿図41 1736-2番地 第XI層検出ピット

## IV まとめ

今回の調査は、農道建設という狭い範囲に限られたもので、遺跡全体から見れば、そのごく一部にすぎないものである。その結果は本文中に記したとおりであり、今までに発掘調査例がなかった本遺跡の状況の一端が明らかになった。

それは、調査前の予想以上に入野沢川などの氾濫が激しく、砂礫層の堆積・浸蝕が見られ、いまだに、舌状台地先端部の形成過程にあることがわかる。

また、飯田市内では最も古い縄文時代草創期の爪形文土器が出土しており、また、後晩期の住居址・土器棺墓などが確認され、当地方における縄文時代研究に大きく寄与する結果が得られた。そこで、調査地番毎に概要を記して今次調査の総括としたい。

### (1) 1861番地

北方北の原遺跡の西端に当たるこの地点は、立野遺跡より続く縄文時代早期以降の集落の存在が予想された。調査結果は前述のとおりであるが、入野沢川沿いにあるこの調査区は、たび重なる氾濫を受けしており、砂礫層の堆積が何層にもなっており、比較的安定した層は薄いものの、遺構が確認されていることが、この地点の特徴である。

ほぼ全層より、縄文時代中期中葉から中期後葉にかけての土器等の遺物が出土しており、それらは入野沢川上流の立野遺跡・在京原遺跡・真慶寺遺跡より、氾濫により流れ込んだものと考えられる。

また、土坑10・11出土の土器群はいずれも中期終末に比定されるもので、区画文中に結節縄文を施すものである。これらの土器の当地域での出土状況は土坑より出土する場合が多く、当該遺跡も同様である。

安定している第X層（挿図5）では晩期後半の土器の出土が確認され、1号住居址の検出面でもある。遺構外出土として提示した後晩期の土器については、ほとんどがその周囲より確認されており、接合するものはなかったものの、それらは1号住居址遺物の可能性が高い。

完形品は少ないものの、器形・文様から水式土器がそのほとんどであるが、無文の粗製土器も多い。市内では上郷地区の矢崎遺跡・座光寺地区石行遺跡等で調査例があるものの、稀有な遺物である。

### (2) 1863番地

この調査地点は、南より広がる尾根の先端部分にあり、この尾根上には比較的安定した第III層・IV層・V層の堆積が見られる。

この第III～IV層より出土した土器棺墓は、2基が合わせ口甕棺・1基は正位の甕棺で、これら縄文時代晩期の土器棺墓の出土は飯田市内では最初の発見であり、下伊那地方では高森町深山田遺跡・大宿遺跡・豊丘村林里遺跡・阿智村川畑遺跡・阿南町根吹遺跡と、出土例が増えつつあり、この時期の当地方に於ける墓制を解明する資料が整いつつある。

高森町深山田遺跡に見られるものと同様に、土器棺墓1～3を構成する土器の主体は氷式土器であり、底部を欠いて使われているものもある。特に土器棺墓1は、底部を欠いてある深鉢の外側に、口縁部を欠いた小型の深鉢をかぶせてあり、これは他では確認されておらず、一つの特徴である。

胎土は、いずれの土器も暗褐色で石英を多く含む。内面は平滑であるが、整形時の指頭による凹凸が、明瞭に残る。

大宿・深山田遺跡の土器棺墓は、直線的あるいは固まっての土器棺墓群としての出土が確認されており、今回の調査は道路幅のみの発掘調査であるため、土器棺墓群というまでの出土には至らなかつたが、周囲に存在する可能性は高く、1861番地にて出土している1号住居址との関連についても、考えていく必要がある。

爪形文土器・表裏縄文土器は、点数は少ないものの、伊那谷では縄文時代草創期の貴重な資料である。

爪形文土器は、図化してあるものを含めて7点出土している。文様は、長さ6mm～8mm、幅1mm～1.5mmで、横方向に密接に刺突しており、先端の尖ったヘラ状工具で施文したものと考えられる。部分的には方向を変えて交差するように刺突しているものもある。

色調は褐色で、石英・雲母を含む。纖維は入っていない。内面は平滑で、薄く炭化物の付着が認められる。いずれも4～5mmと薄手で、焼きがよい。

それらは、いずれも一個体であると考えられ、諏訪市曾根遺跡出土の爪形文土器に近い。

表裏縄文土器は、図化してある同個体が5点出土している。文様は、両面L R横位に施文されており、いずれも3～4mmと薄手で雲母を多く含む。

色調は内外面ともに黒褐色で、胴部下半のものと考えられ、接合部で剥落している。

いずれも成形は、接合痕がうえ向きに凸で、内外面とともに下方に粘土を移動させており、同一個体であるといえる。

### (3) 1736-2・1736-1番地

土坑等の遺構が確認されているものの、全体的に遺物の出土はわずかであり、押型文土器が4点の出土していることを記す程度である。

押型文土器は、第IV層より3点、第VII層よりの1点がある。

挿図62 1は、楕円文で縦位密接施文され、口縁部は弱い面取りが施されており、石英・雲母を含む。2は、凸部の狭い2単位の山形文で縦位密接施文され、内面に火はねがある。石英・雲母を含み、内外面とも丁寧な調整が施される。3は、横位の帶状施文と考えられる山形文で、石英を含む。内外面は黒褐色土を呈する。無文部に刺突と考えられるものがあり、細久保Iの類に類似する。4は、縦位の帶状施文と考えられる山形文で、径3～5mm程の粗大な石英を含む。

いずれも小破片で、詳細な時期は不明であるが、従来の編年では、1・2は立野式、4は樋沢式、3は細久保式と考えたい。

扇状地の先端部にあたる本調査地は、入野沢川の氾濫による砂層の堆積が厚く、安定した層は、その氾濫による堆積層の間で薄く確認できるのみである。これら堆積層のどの層にも、礫はほとんど入っておらず、地形的に見てもこの地は氾濫の端部であったといえ、本遺跡の地形形成状況を考える上で、特に重要な結果が得られた。

#### (4) 1746・1748・1759番地

この地点は北方北の原遺跡の最北端に当たり、飯田松川によって形成された段丘の端部上に立地する。入野沢の押し出しによる堆積が深く複雑で、地点毎に様相が異なる。特に、最も北の部分に当たる1759番地とそれ以外の地点で遺跡の状況が異なっているのでそれぞれに記述を進めることとする。

1759番地は、白味を帯びた砂の堆積が連続しており、4m程掘り下げたが地山面は確認されず、極めて深い堆積を成していることが想定される。崩れやすい砂層であるため危険防止の為それ以上の調査は実施しなかったが、この地点の状況は把握できたと考えている。同様の様相は、平成7年度で実施した当遺跡北側に当たる樋の沢遺跡の試掘調査でも確かめられている。この地点の北側には現在の入野沢が流れおり、その影響を最も受けている箇所が、当地点から北側の樋の沢遺跡にかけてといえる。

確認された遺構は時期不明の上坑が1基のみであり、出土遺物は流れ込みによると考えられる縄文土器・石器が認められるのみである。いずれにせよ、安定した生活を営むには不適な場所と考えられる。

1746・1748番地は、連続する地点でもあり、ほぼ同一の状況が確認できた。何度も記述してきたが、扇状地としての堆積がこの地点でも複雑で深く、遺構確認面を把握することが重要な要素となった。比較的安定していたと考えられる第IV層上部とV層上部が遺構確認面と考えられ、そこに土坑等が掘り込まれていた。土坑から遺物がほとんど出土しなかったので時期を確定することは困難であるが、縄文時代のいずれかの時期に営まれたといえる。遺構検出面下にも層位の堆積が見られたので、地山面の把握のため地表面より2.3m程掘り下げ調査を実施した。その下部層から出土した遺物は、縄文時代草創期にも想定しうる石器等が出土しており、本来この場所に存在したかどうかの確定はできないが、下層の堆積は該期前後と考えている。

出土遺物は、打製石斧等縄文時代の石器は、比較的多く出土しているものの、縄文土器は、早期から晩期の土器片が僅かに出土しているのみである。

なかでも、挿図62 5～7で提示した押型文土器が3点出土している。5・6は第Ⅲ層より出土し、5は、振り幅の小さい山形文で、内外面ともに暗褐色を呈する。6は、小破片のため定かではないが、横位の帶状施文と考えられる山形文で、胎土に石英等砂粒を多量に含む。7は、3単位と考えられる格子目文で、縦位密接施文されている。外面は褐色、内面は黒色を呈しており、磨り消されたと考えられる部分がある。

いずれも小破片のため、詳細時期は不明であるが、5・7は立野式、6は樋沢式に比定されよう。

そのほか一点ではあるが、早期末の条痕文土器が（挿図62 8）第Ⅲ層より出土しており、纖維を含んでいる。

以上のように、縄文時代以外の遺物はほとんど見られておらず、縄文時代の比較的長い間に堆積し、その間の安定した期間に利用していた地点といえる。

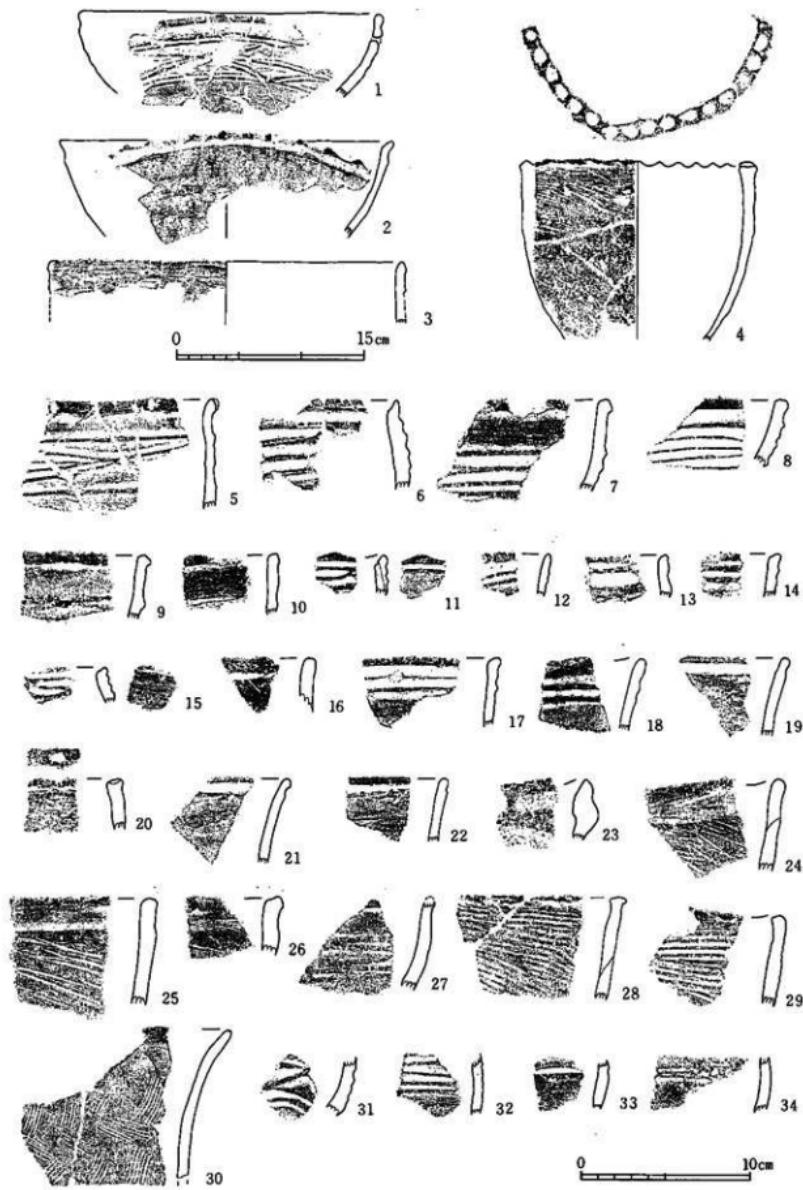
今次調査区は、全域にわたって昭和36年の大雨による入野沢川の氾濫を受けており、縄文時代以降現在に至るまで、幾度となく氾濫を繰り返していることがわかつてきた。

今もなおこの地は、笠松山麓より広がる扇状地の形成過程にあるといえ、その氾濫があるにもかかわらず、墓域あるいは集落域として生活していた当時の人々の苦労が偲ばれる。

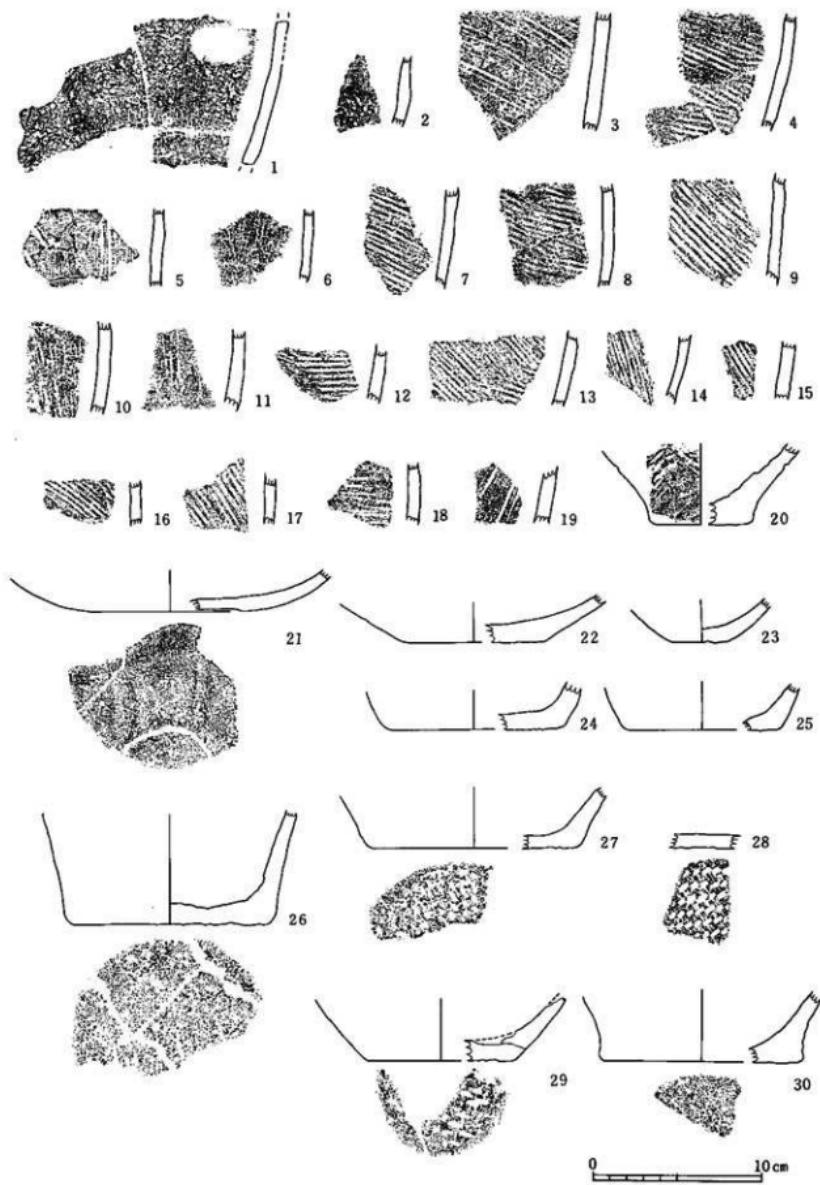
## 参考文献

- 飯田市教育委員会 1994 『中村中平遺跡』
- 飯田市教育委員会 1995 『北方大原遺跡』
- 上郷町教育委員会 1988 『矢崎遺跡』
- 神村 透 1968・69 「立野式土器の編年的位置について(1)～(7)」『信濃』20卷10号～21卷7号
- 神村 透 1982 「立野式土器の編年的位置について(完)」『信濃』34卷2号
- 木曾郡町村会 上松町教育委員会 1995 『お宮の森裏遺跡』
- 下伊那史編纂委員会 1955 『下伊那史 第2巻』
- 下伊那史編纂委員会 1955 『下伊那史 第3巻』
- 下伊那史編纂委員会 1967 『下伊那史 第5巻』
- 下伊那史編纂委員会 1991 『下伊那史 第1巻』
- 高森町教育委員会 1994 『深山田・広庭・ヨシガタ・大宿遺跡』
- 筒井泰藏 1973 『伊賀良村史』
- 長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 主要遺跡(中・南信)』
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』
- 長野県史刊行会 1989 『長野県史 通史編 第1巻 原始・古代』
- 松島 透 1957 「長野県立野遺跡の捺型文土器」『石器時代』4

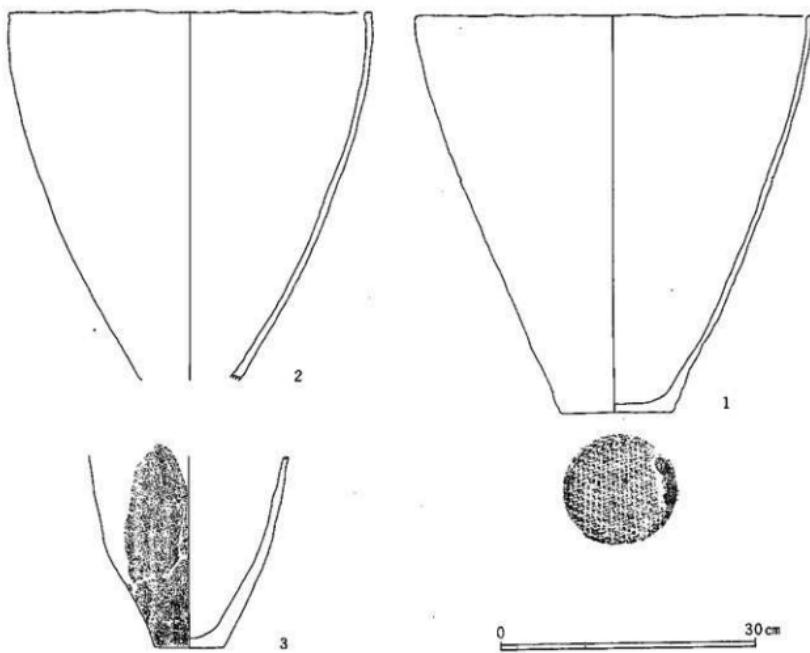
## 図 版



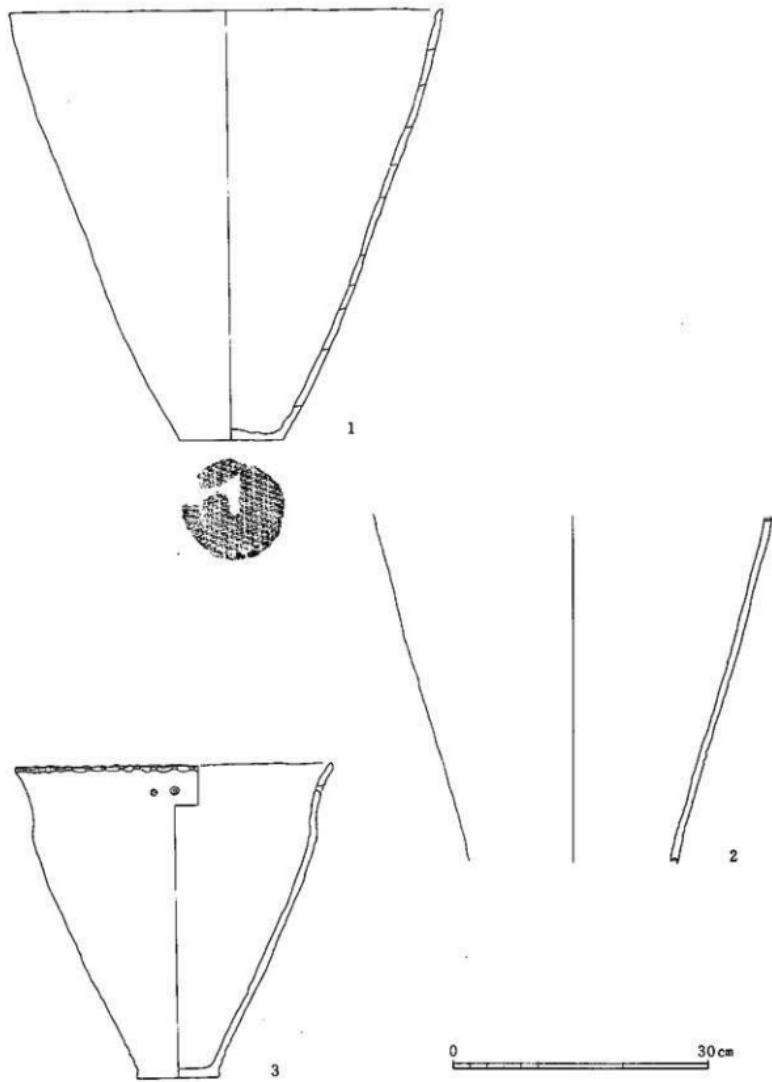
插図42 1号住居址出土土器



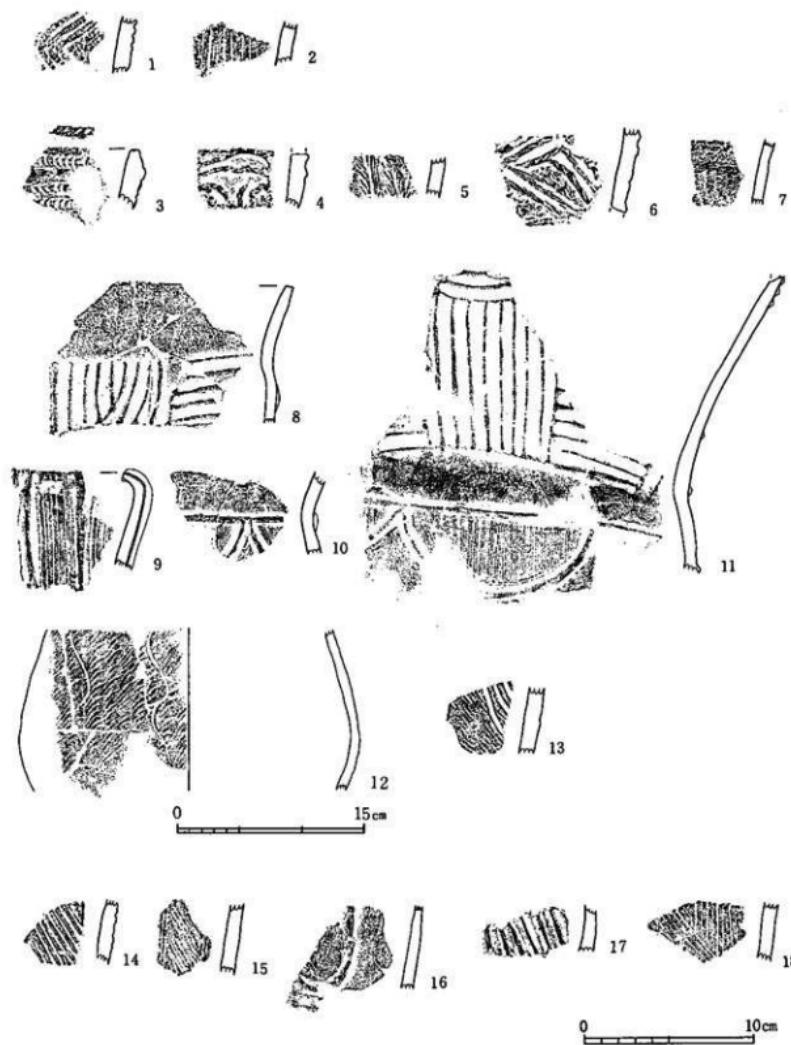
挿図43 1号住居址出土土器



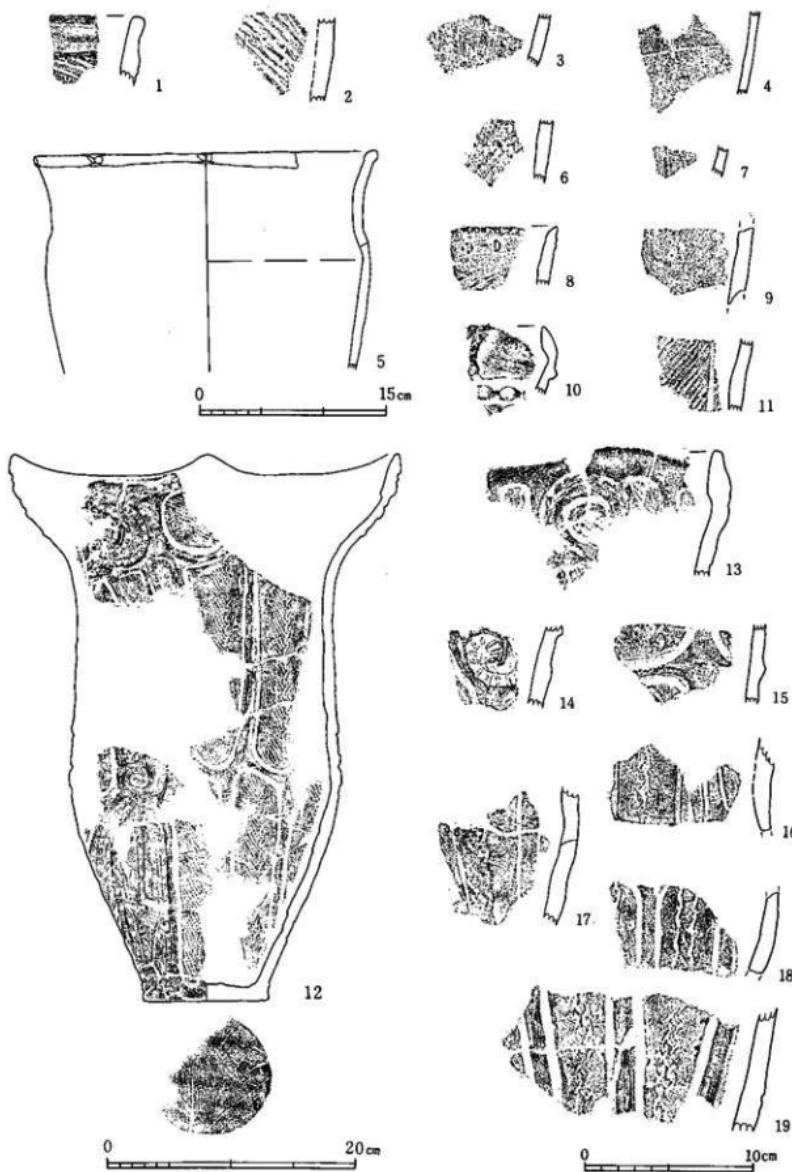
插図44 土器棺墓 1



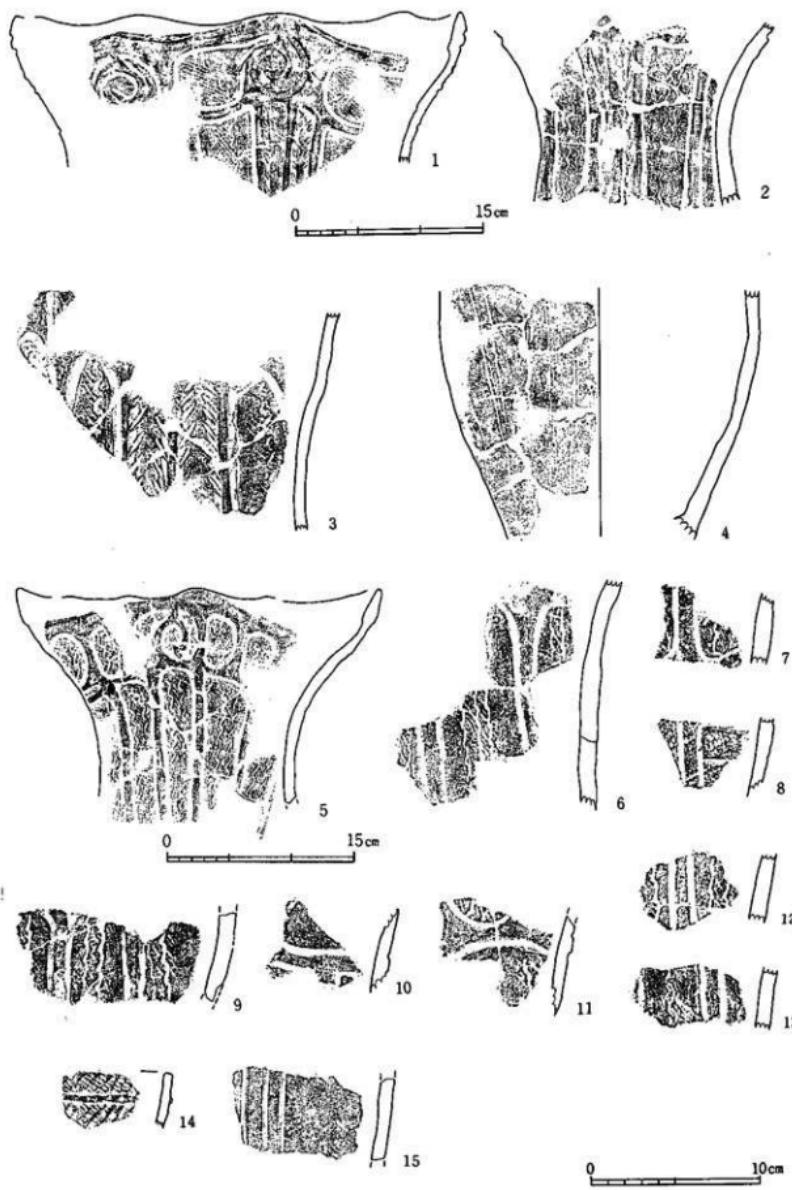
插図45 土器棺墓 2 (1, 2)・土器棺墓 3 (3)



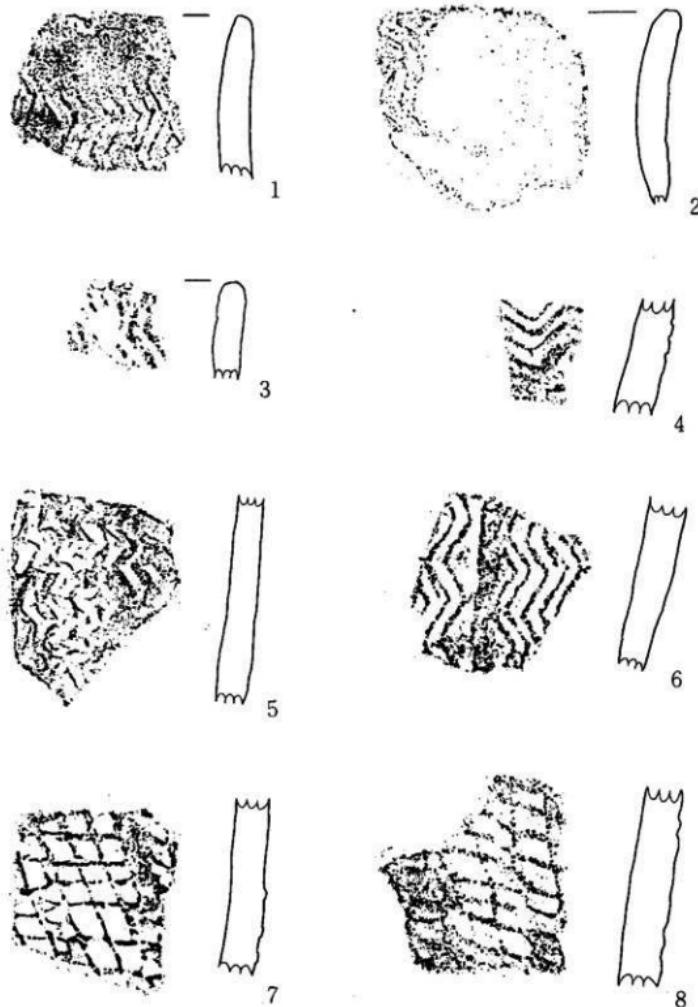
插図46 溝址3 (1, 2)・溝址4 (3~13)・溝址5 (14~18) 出土土器



插図47 土坑2(1~4)・土坑6(5)・土坑7(6, 7)・土坑9(8, 9)・土坑10(10~19)



挿図48 土坑10（1～4）・土坑11（5～13）・土坑12（14、15）出土土器



0 5 cm

插図49 1861番地 遺構外出土土器



1



2



3



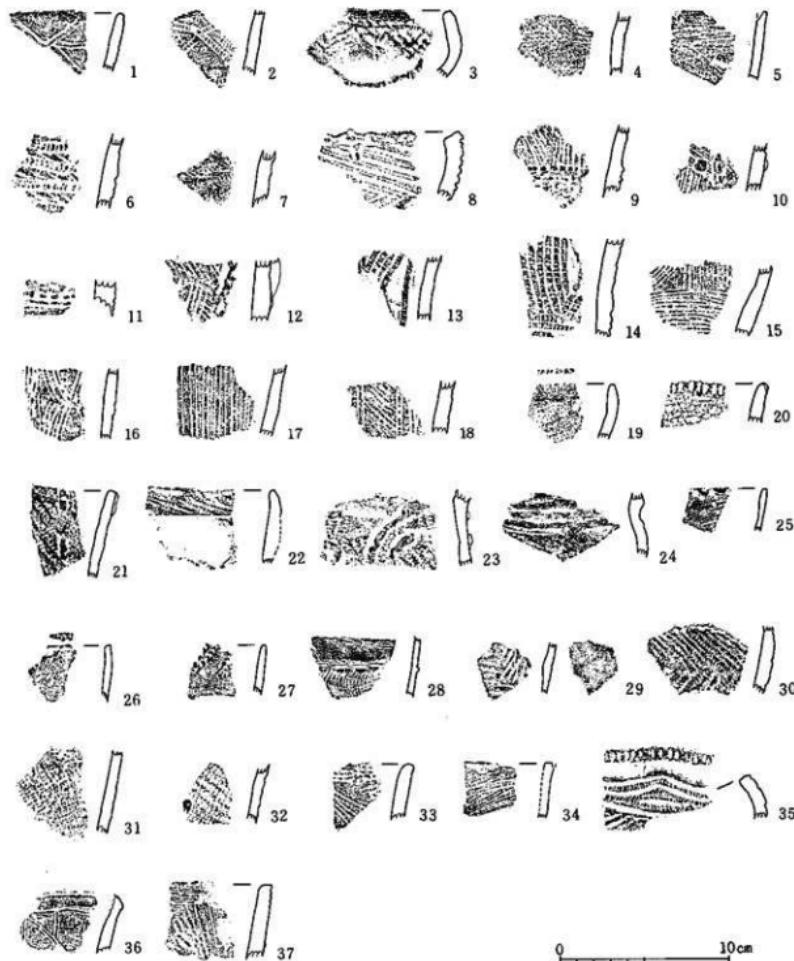
4



5



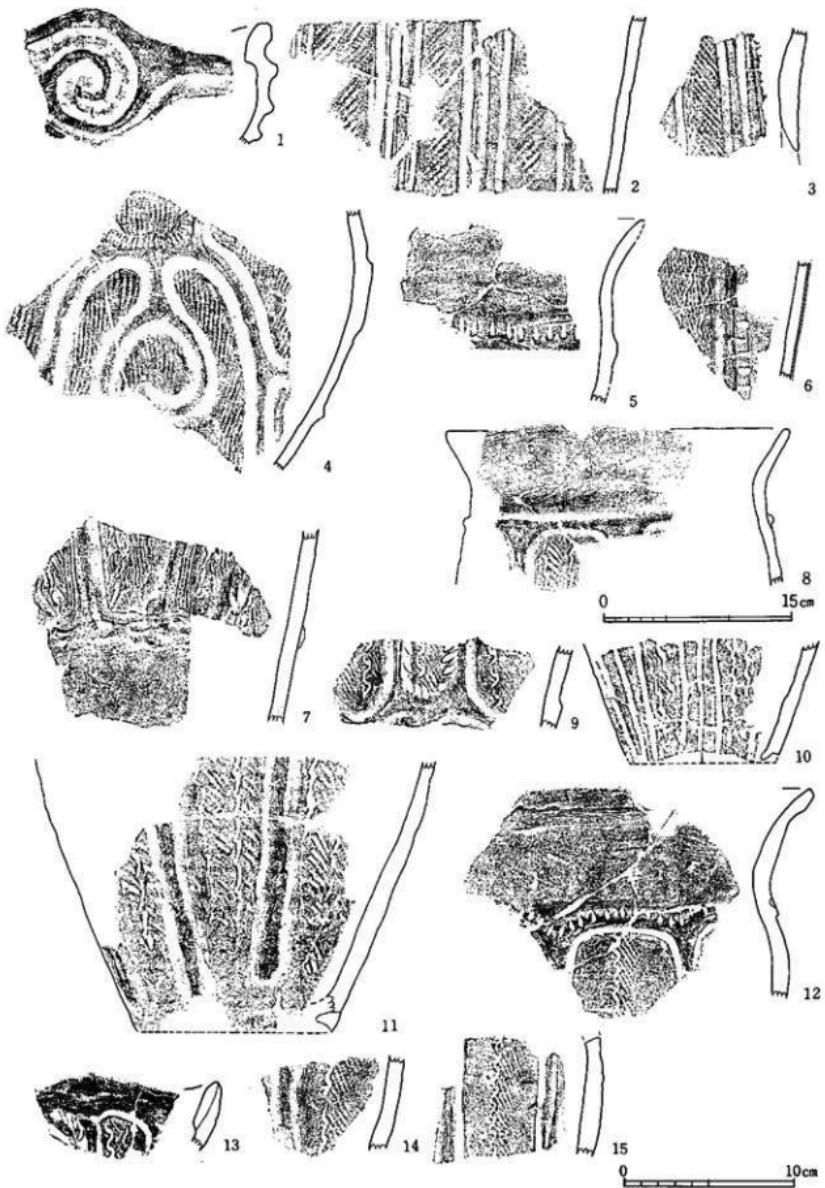
擇図50 1861番地 遺構外出土土器



插図51 1861番地 遺構外出土土器



插図52 1861番地 遺構外出土土器



挿図53 1861番地 造構外出土土器

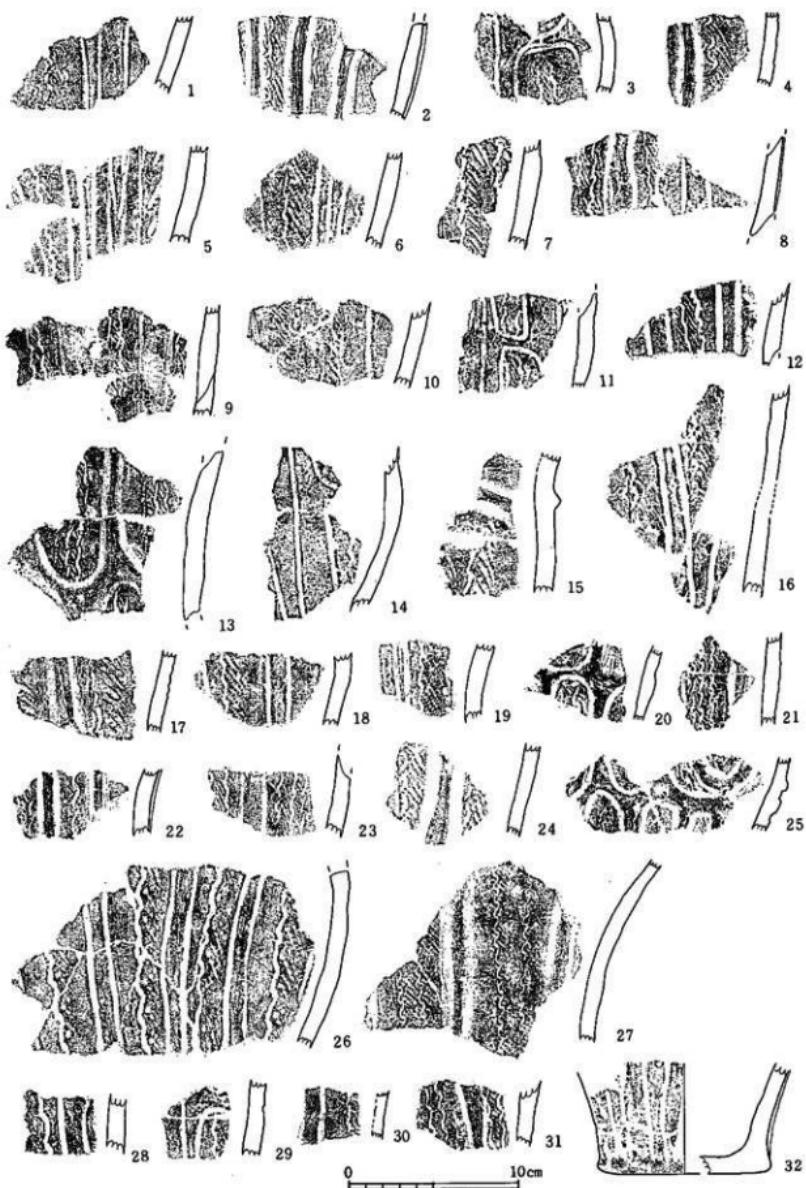
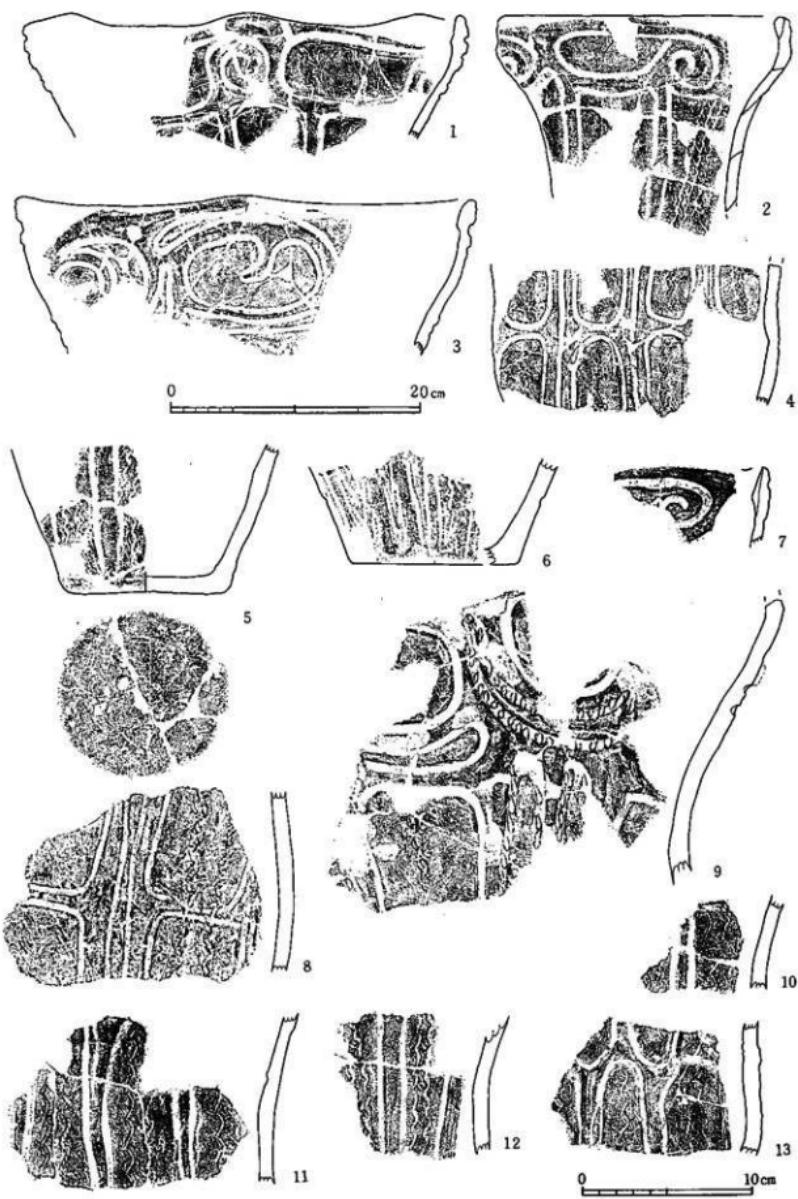
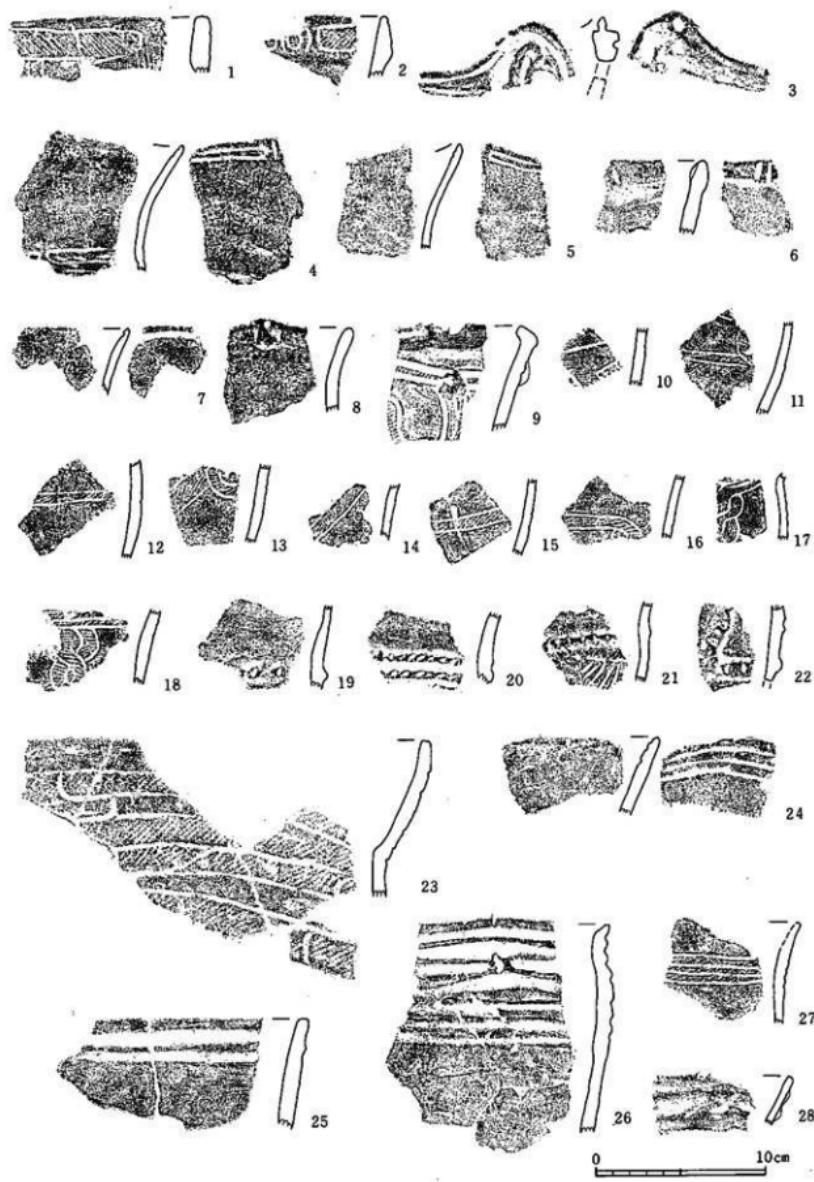


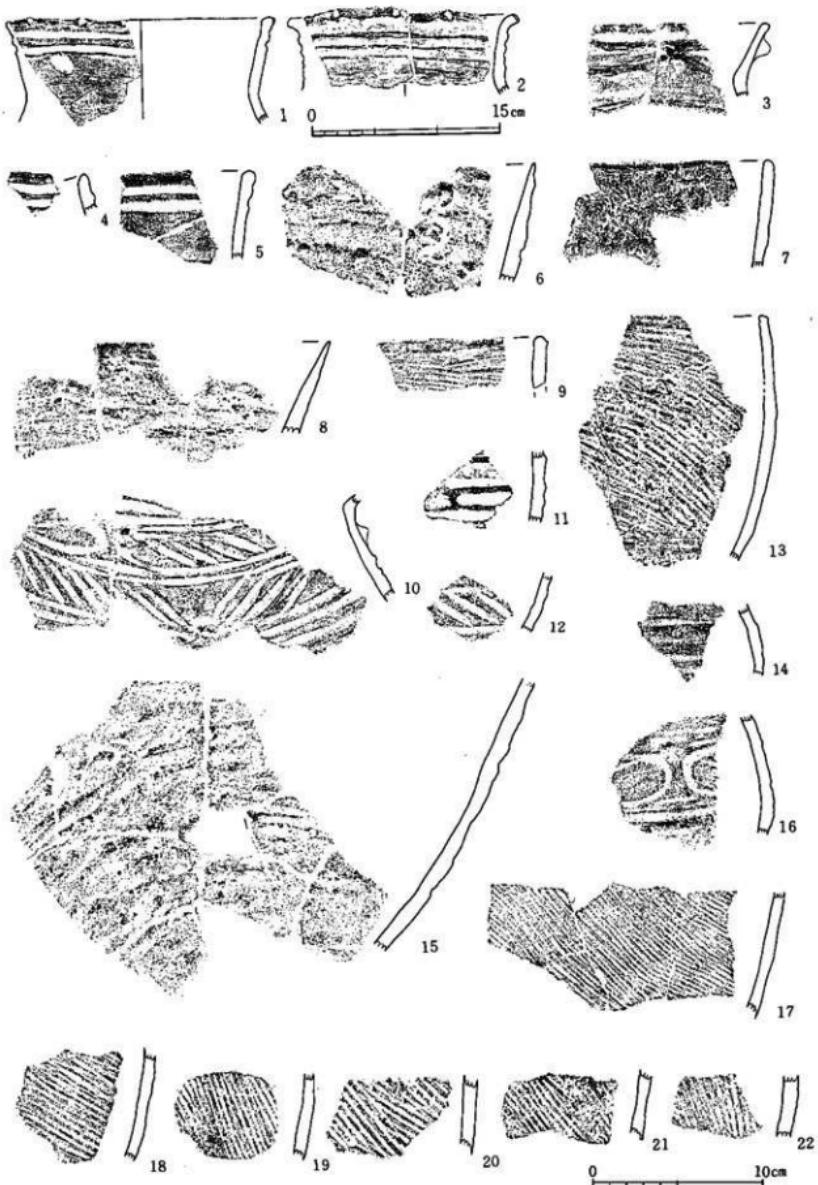
図54 1861番地 遺構外出土土器



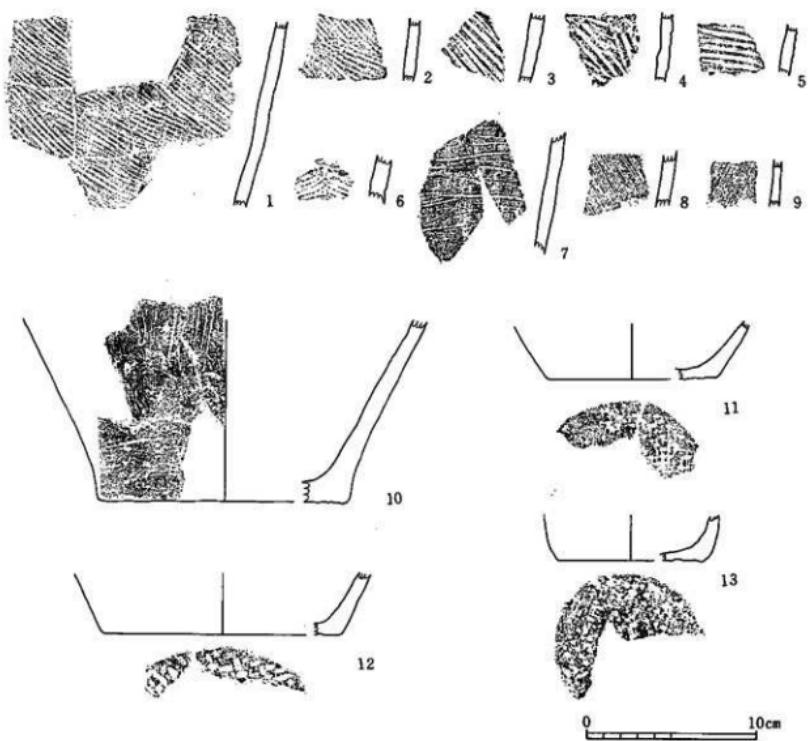
插図55 1861番地 造構外出土土器



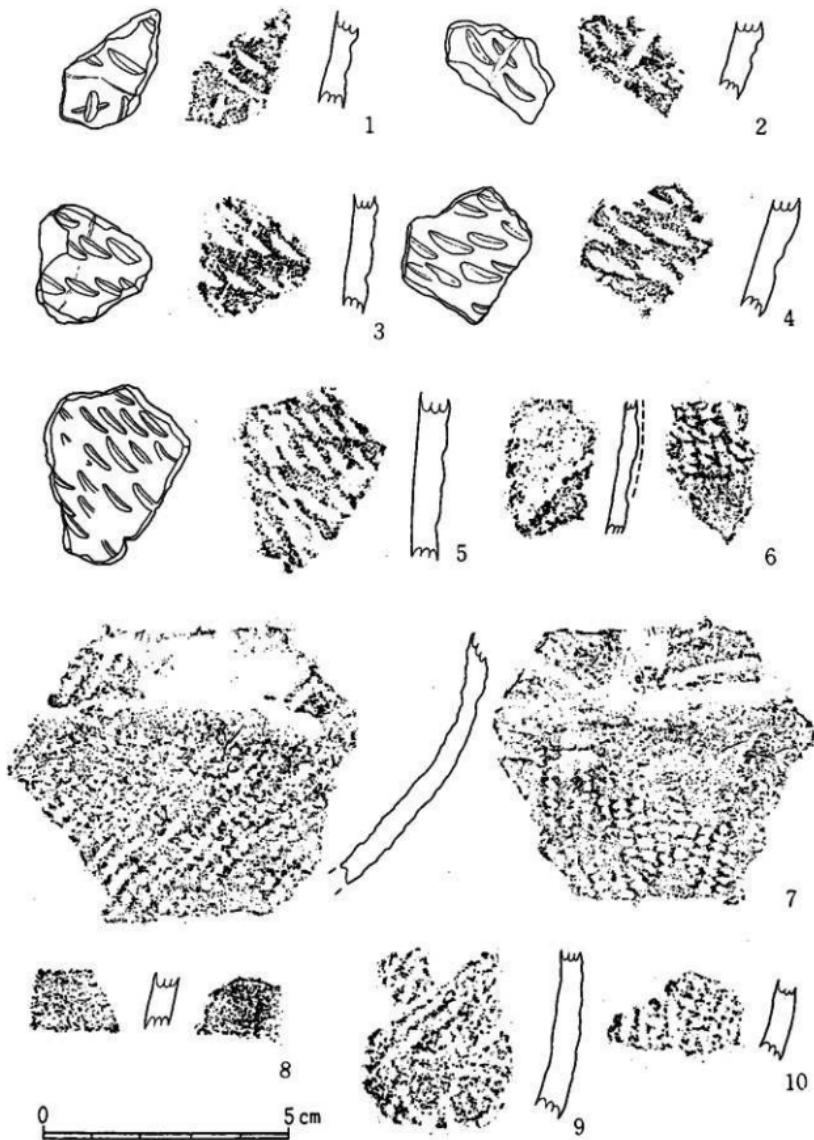
挿図56 1861番地 遺構外出土土器



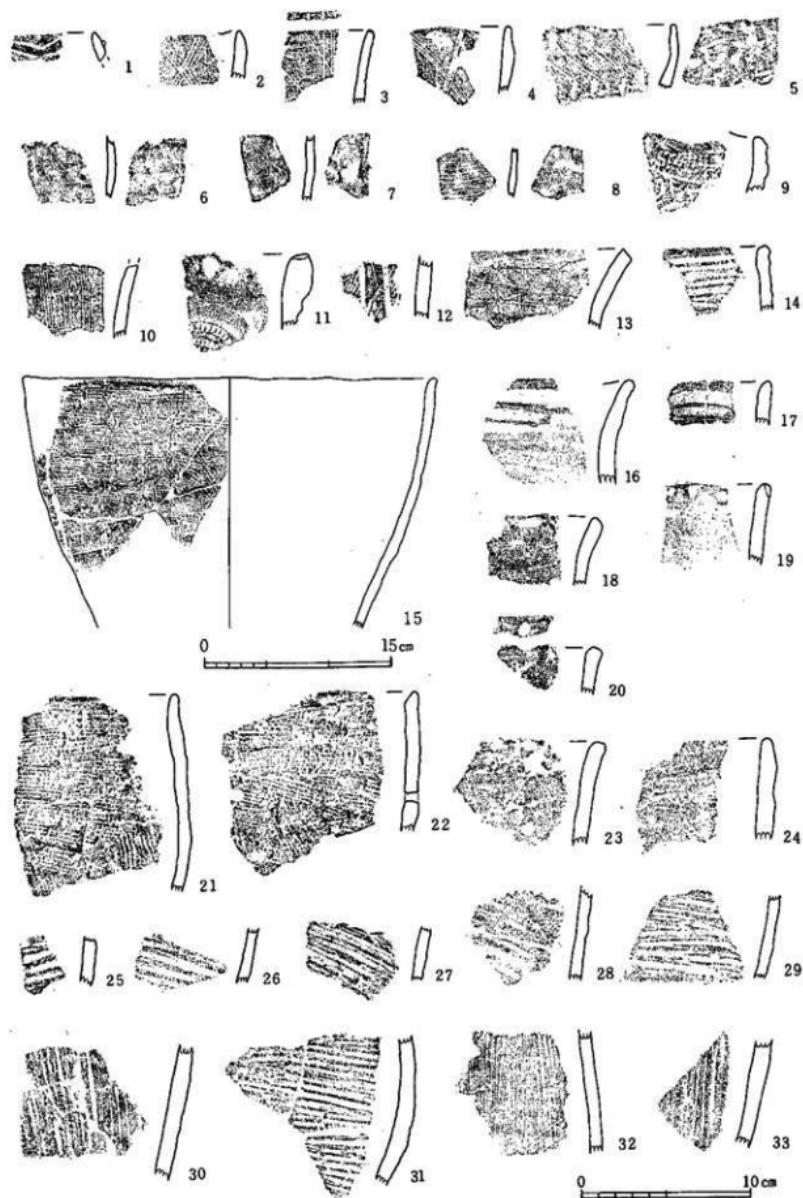
挿図57 1861番地 遺構外出土土器



挿図58 1861番地 遺構外出土土器



插図59 1863番地 遺構外出土土器



挿図60 1863番地 遺構外出土土器

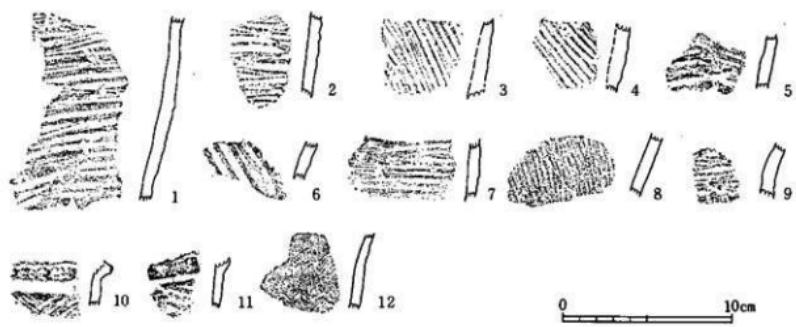
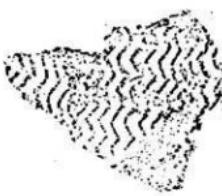


插圖61 1863番地 遺構外出土土器



1



2



3



4



5



6



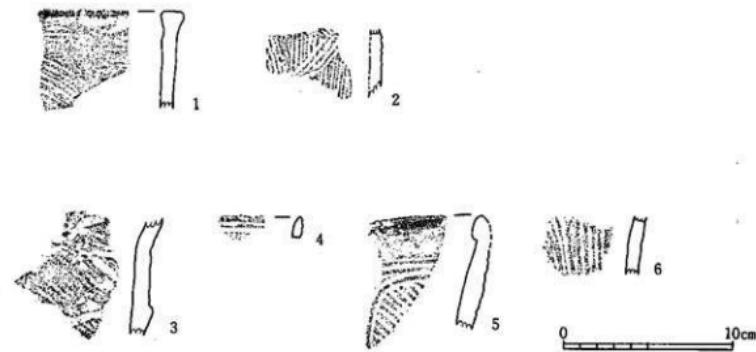
7



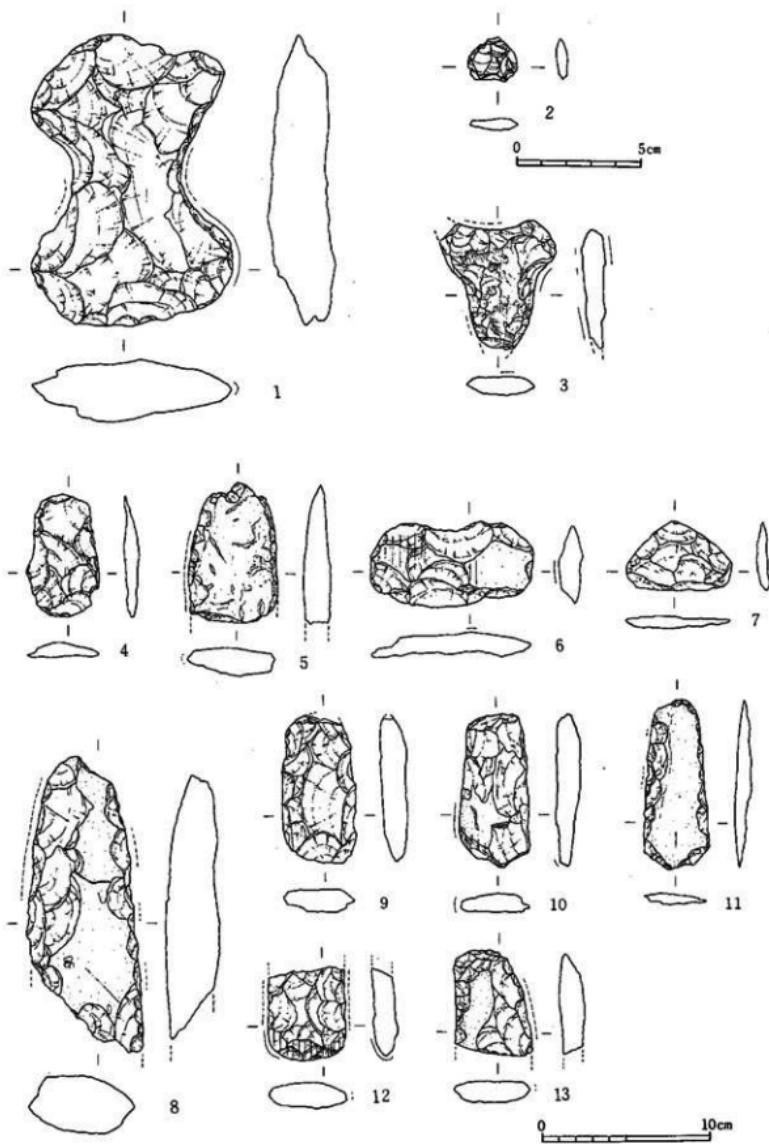
8

0 5 cm

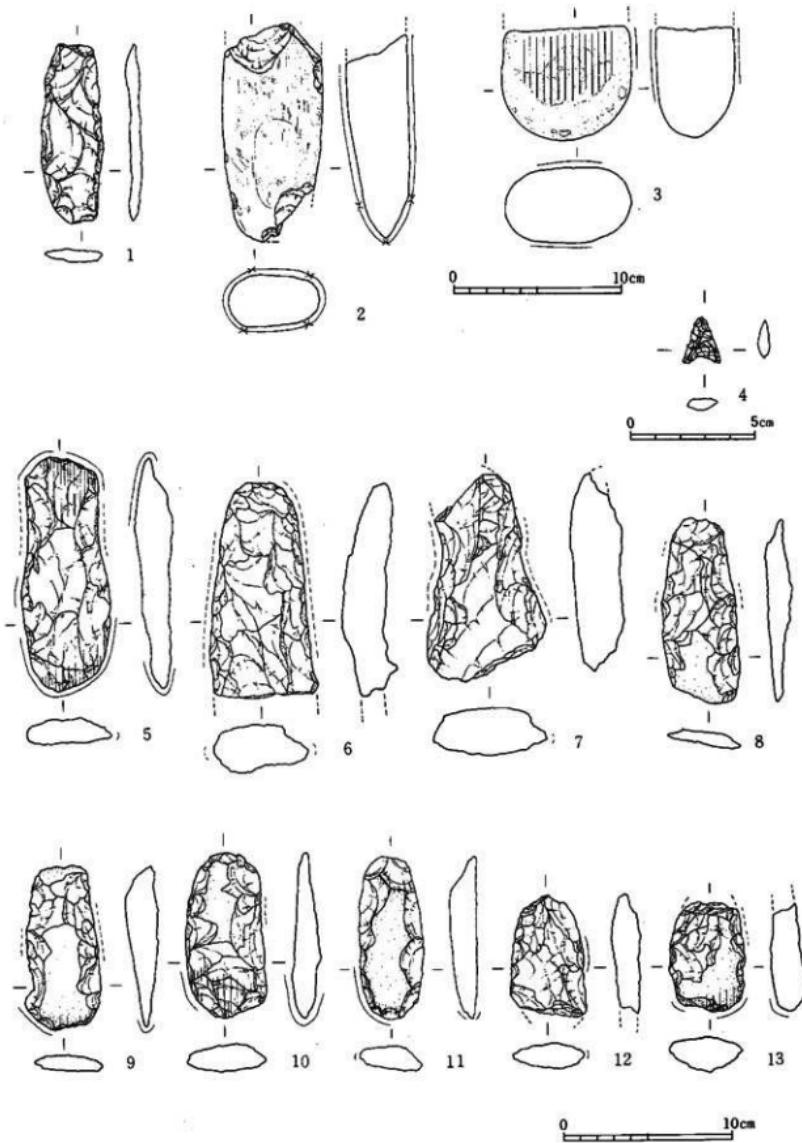
插圖62 1736-2・1746番地 遺構外出土土器



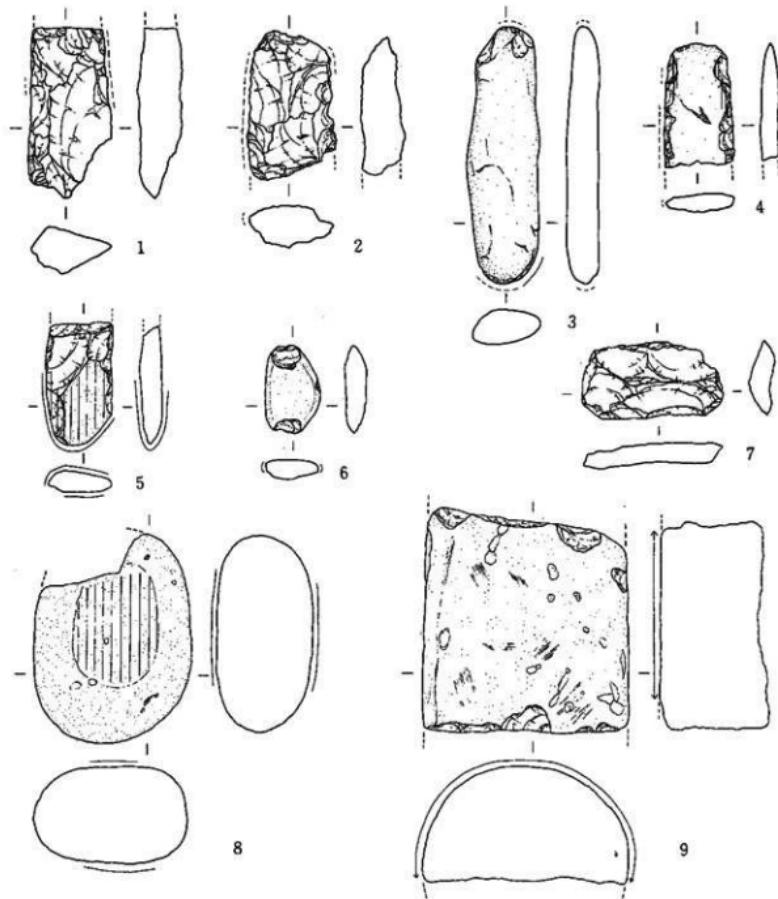
挿図63 1746・1759番地 造構外出土土器



插図64 土坑1（1, 2）・土坑13（3）・1861番地遺構外（4～7）、1736-2番地遺構外出土石器



插図65 1736-2番地(1~4)・1746番地(5~13)遺構外出土石器



0 10cm

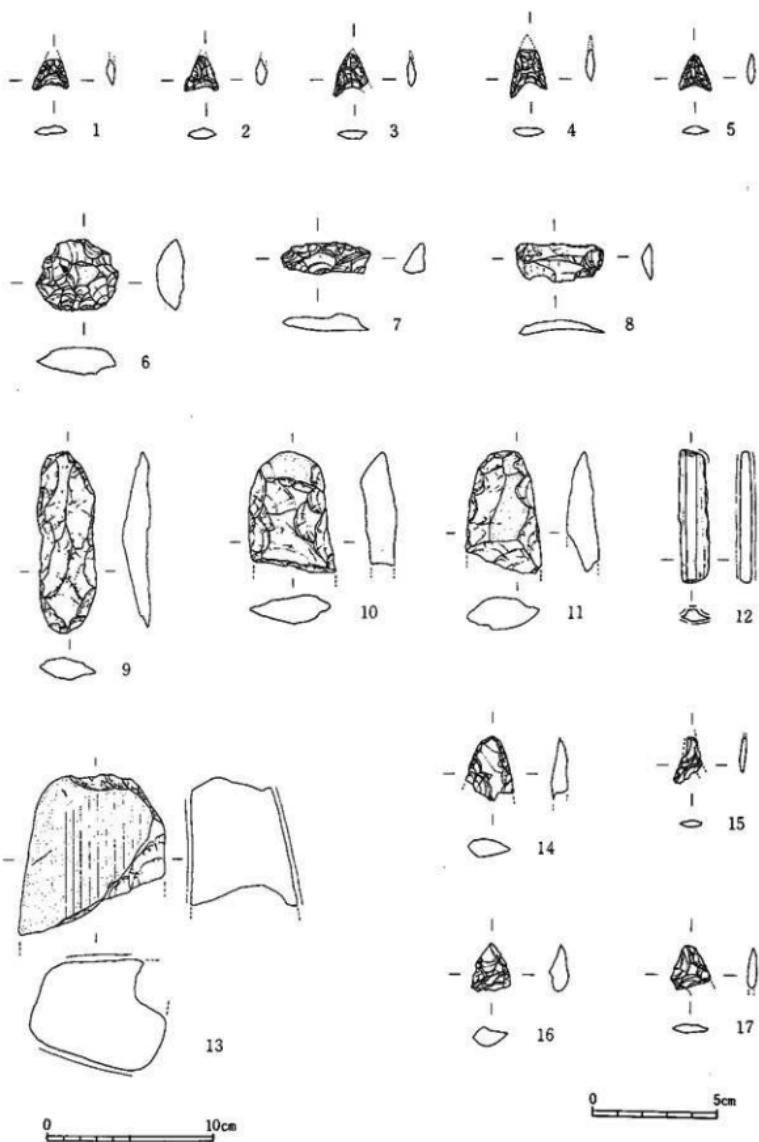


10

0

10cm

插図66 1746番地 遺構外出土石器



擇図67 1746 (1~8)・1759番地 (9~17) 遺構外出土石器



# 写 真 図 版

図版1

調査前  
(1861)



調査前  
(1861・1863)



調査前  
(1748・1759)





重機表土剥ぎ作業  
(1861)



重機表土剥ぎ作業  
(1748・1759)



作業風景  
(1748・1759)

爪形文土器出土  
地点作業風景  
(1863)



作業風景  
(1748)



作業風景  
(1759)



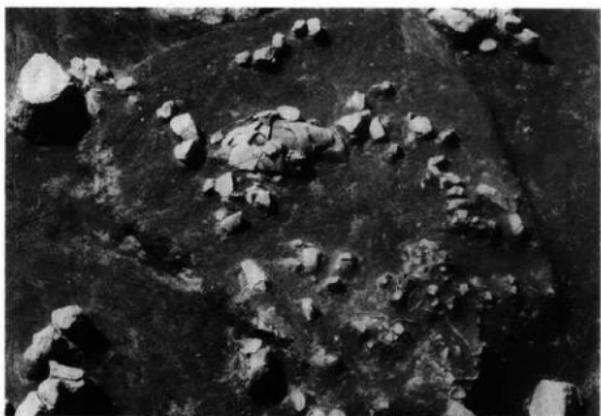


1号住居址 (1861)



1号住居址断面 (1861)

土器棺墓 1, 2  
(1863)



土器棺墓 1  
(1863)



同上  
(1863)





土器棺墓 1 断面  
(1863)



土器棺墓 2  
(1863)

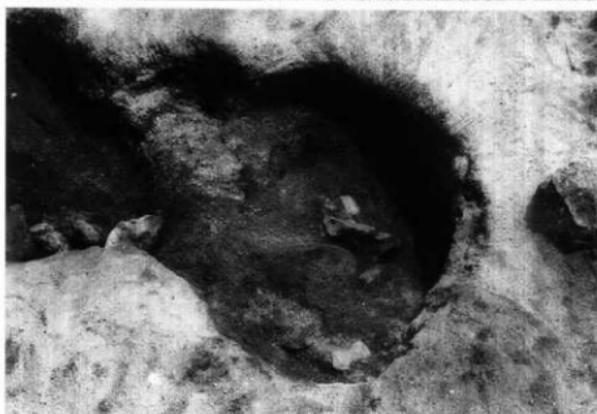


同上  
(1863)

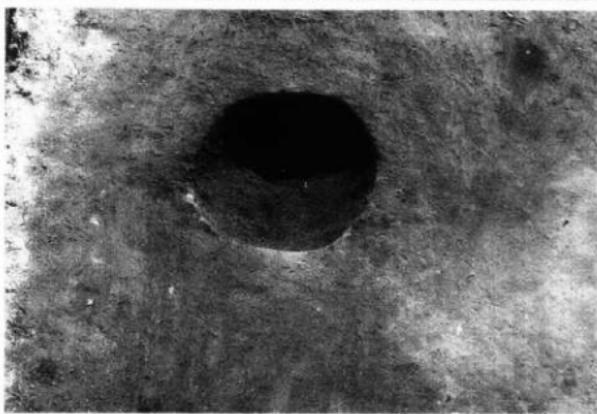
土器棺墓 3  
(1863)



土坑 1  
(1861)



土坑 3  
(1861)





土坑 5  
(1863)



土坑 5 · 6  
(1863)



土坑 7  
(1861)

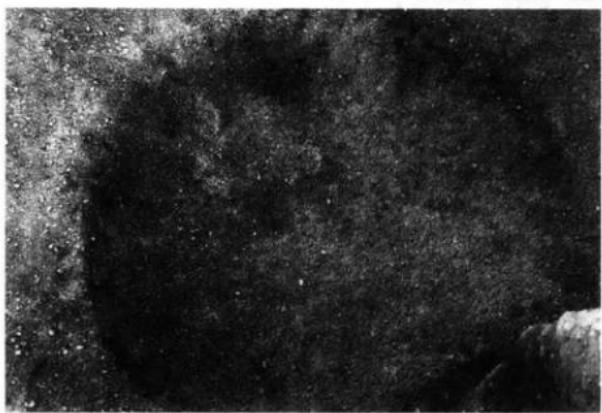
土坑8  
(1861)



土坑10・11  
(1861)



土坑12  
(1861)

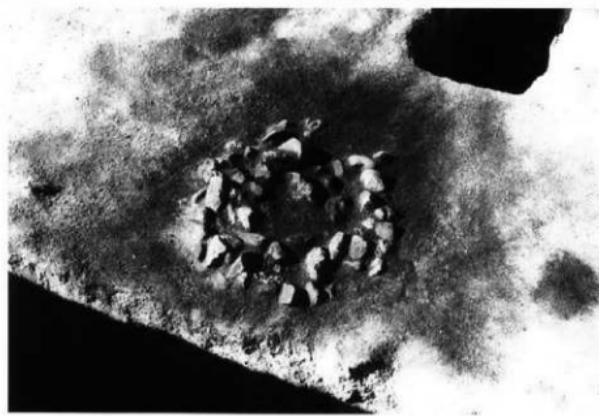




集石1



同断面



集石3

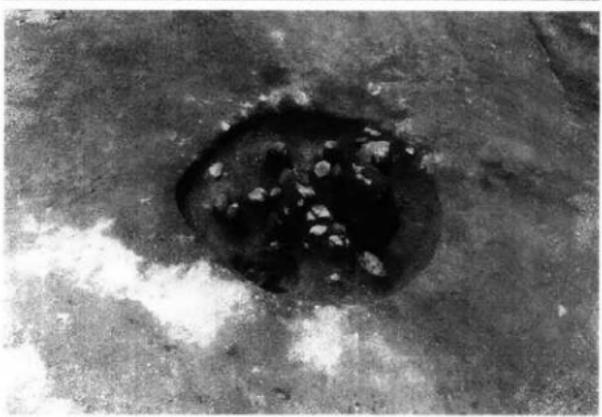
集石 3



集石 4

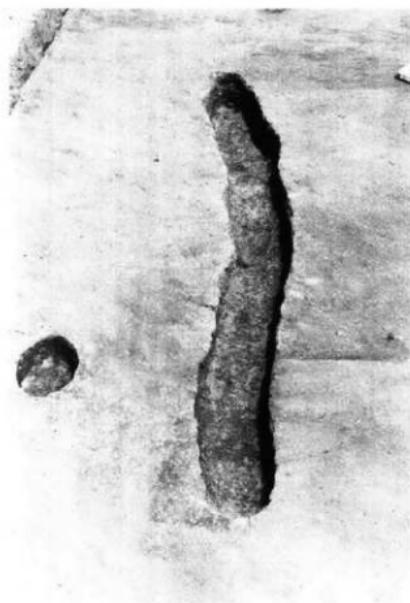


同 上





清理 1



清理 1

1861番地  
遺構全景



1736-2番地  
遺構全景

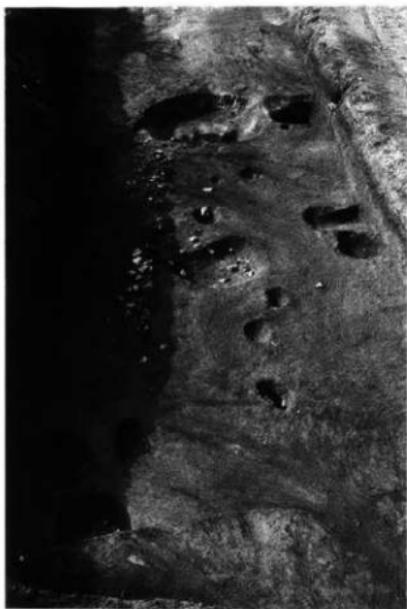


1736-1番地  
遺構全景





1746番地  
遺構全景

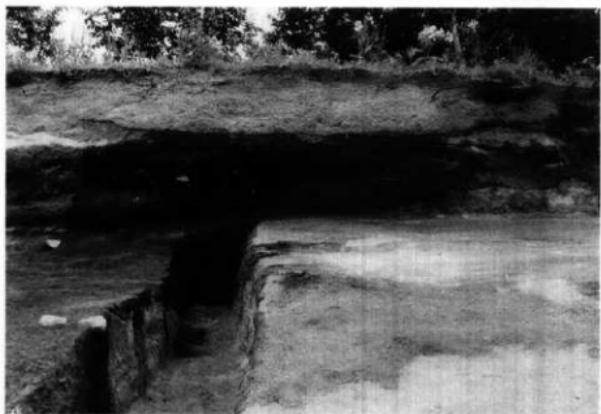


1748番地  
遺構全景

1759番地  
調査区全景



1861番地  
基本層序



1736-2番地  
基本層序



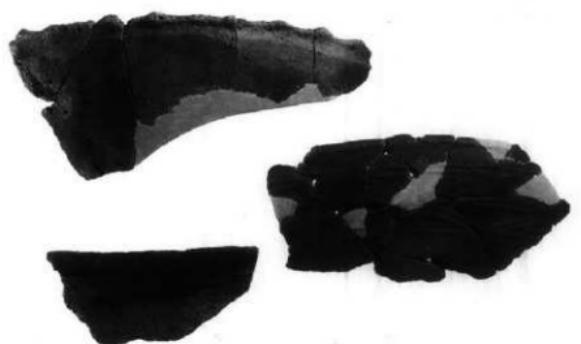


1863番地  
基本層序



1746番地  
基本層序

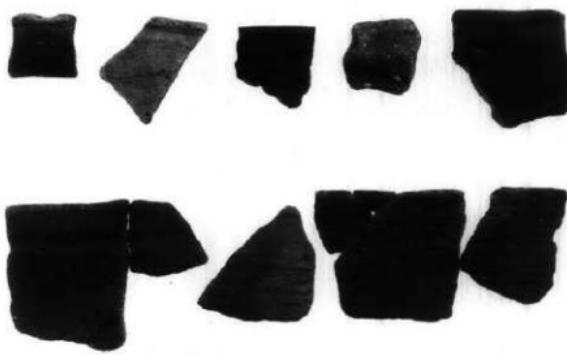
1号住居址  
出土土器

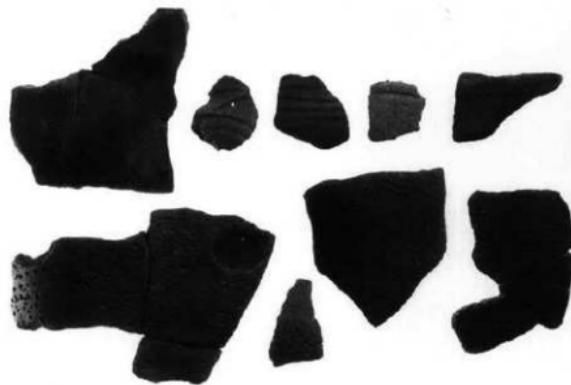


同上



同上





1号住居址  
出土土器



同上



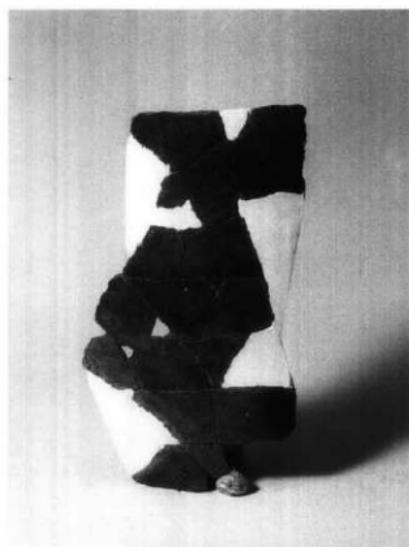
土器棺墓1  
(1-3)



土器棺墓 1  
(1-1)



土器棺墓 1  
(1-2)



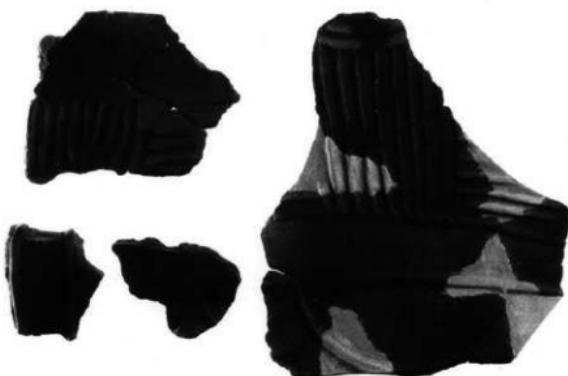
土器棺墓 2



土器棺墓 3



溝址 3  
出土土器



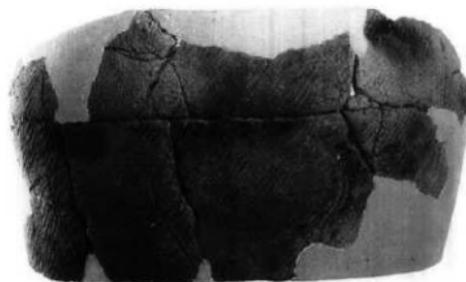
溝址 4  
出土土器



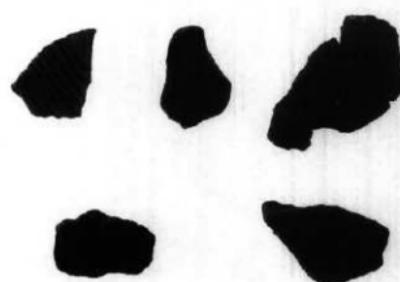
同 上



溝址 4  
出土土器



溝址 5  
出土土器



土坑 2  
出土土器

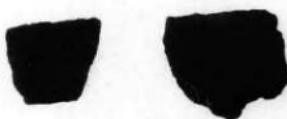




土坑 6 出土土器



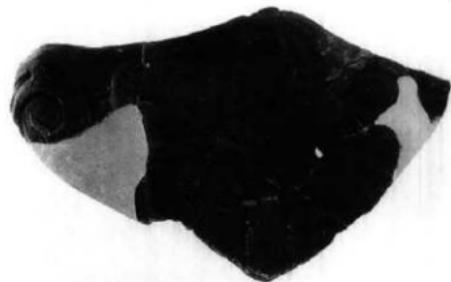
同 上



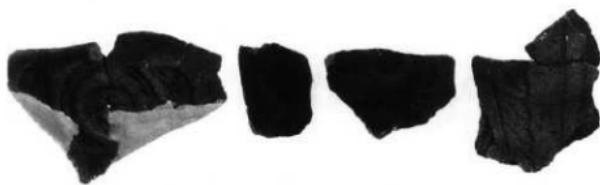
土坑 7 出土土器



土坑 9 出土土器



土坑10 出土土器



土坑10 出土土器

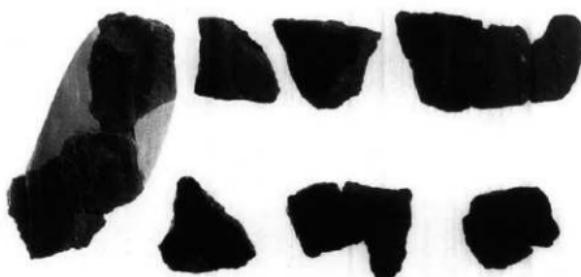


土坑11 出土土器



同上

土坑11  
出土土器

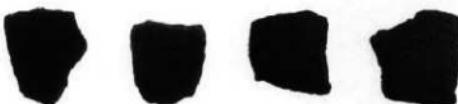


土坑12  
出土土器

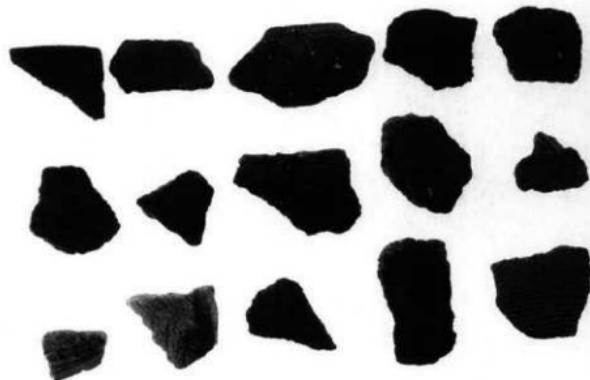




1861番地  
遺構外出土土器



同上



同上

1861番地  
遺構外出土土器

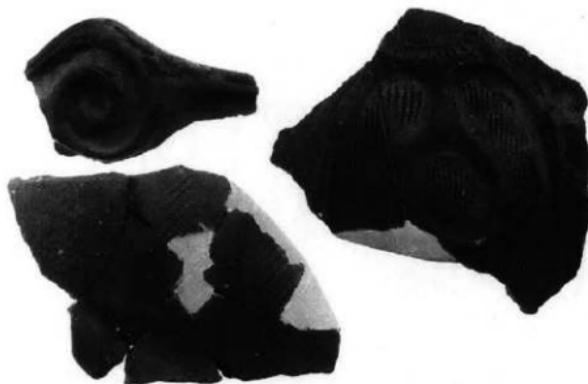


同上

同上



1861番地  
遺構外出土土器



同上



同上

1861番地  
造構外出土土器



同上

同上

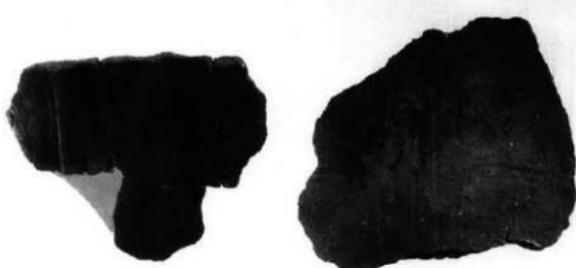
1861番地  
達構外出土土器

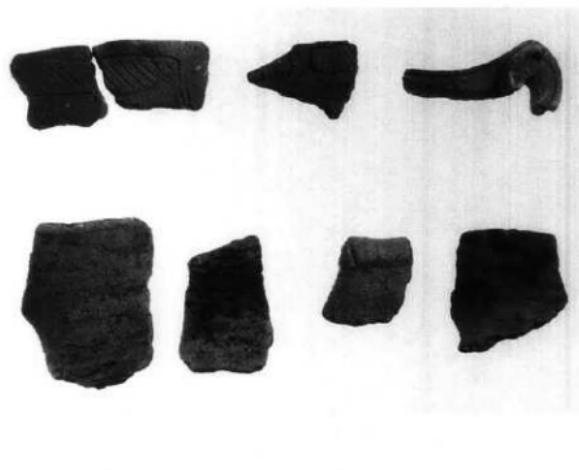


同上



同上

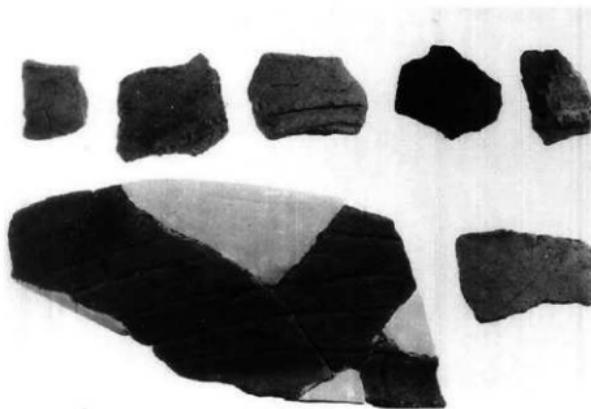




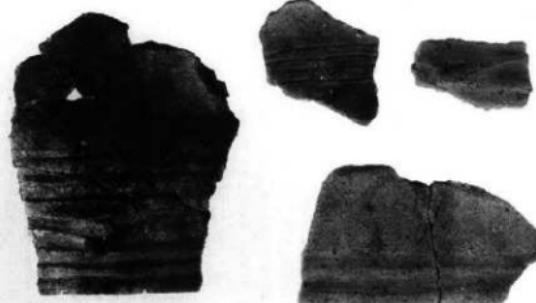
1861番地  
遺構外出土土器



同上



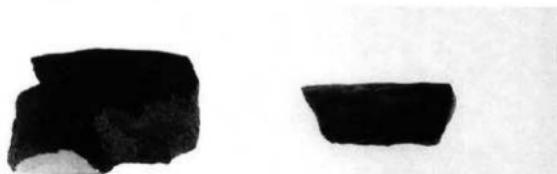
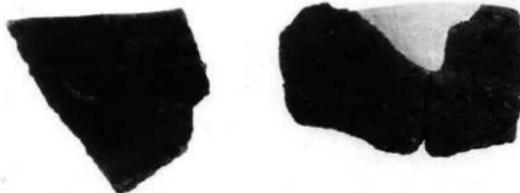
同上



1861番地  
遺構外出土土器



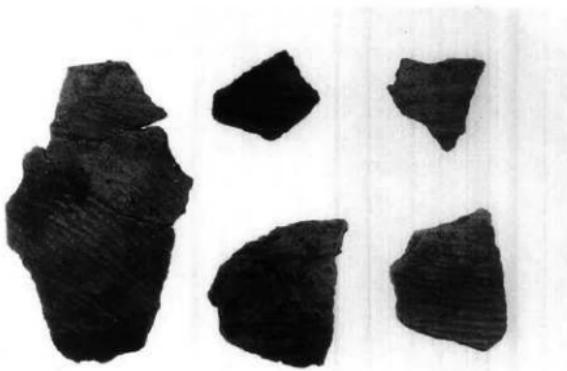
同上



同上



1861番地  
造構外出土土器

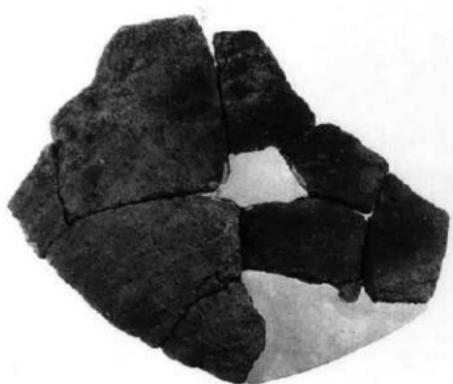


同上

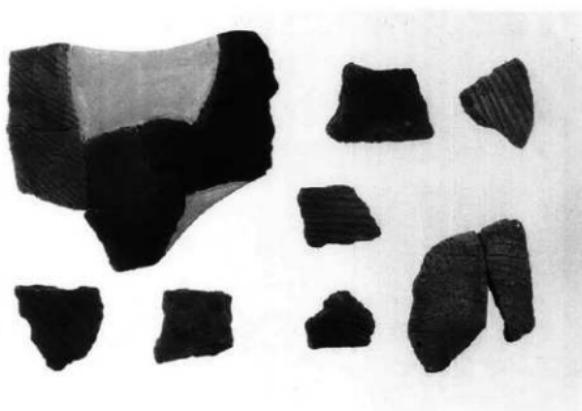


同上

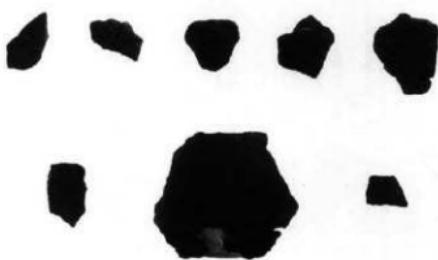




1861番地  
遺構外出土土器



同上



1863番地  
遺構外出土土器

1863番地  
遺構外出土土器

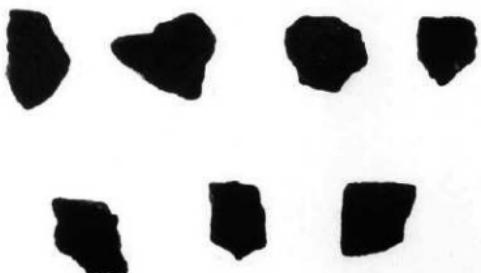


同上

同上



1863番地  
遺構外出土土器

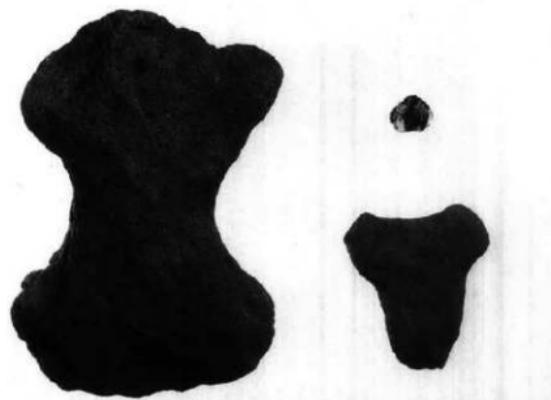


1736-2, 1746番地  
遺構外出土土器



1746, 1759番地  
遺構外出土土器

土坑1、13  
出土石器

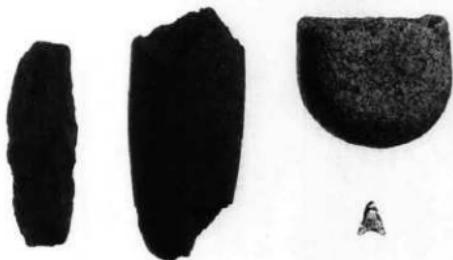


1861番地  
遺構外出土石器



1736-2番地  
遺構外出土石器

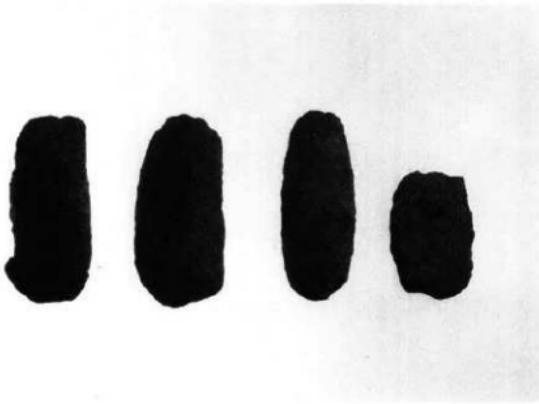




1736-2番地  
遺構外出土石器



1746番地  
遺構外出土石器

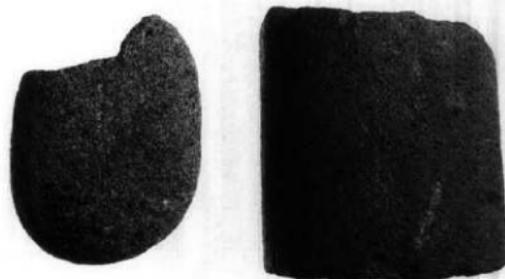


同上

1746番地  
遺構外出土石器



同上

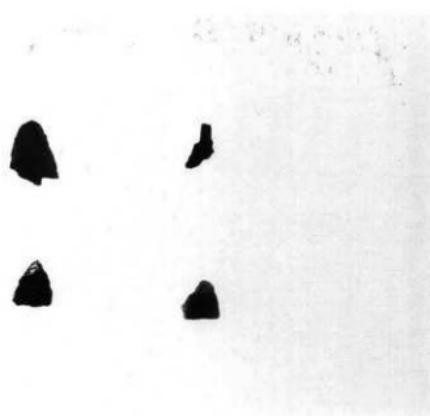


同上





1759番地  
遺構外出土石器



同上

## 報告書抄録

ふりがな	きたがたきたのはらいせき							
書名	北方北の原遺跡							
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に先立つ 埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	佐々木嘉和・吉川 豊・馬場 保之・吉川 金利・下平 博之・福澤 好見							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎ 0265-53-4545							
発行年月日	西暦1996年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡名	市町村	遺跡番号						
北方北の原	飯田市北方 1861番地他	2053		35° 31' 25"	137° 48' 28"	平成5年 8月4日～ 平成5年 11月18日	2,205m <sup>2</sup>	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北方北の原	集落址	縄文時代 草創期～ 晩期	竪穴住居址 集石 土器棺墓 溝址 溝状址 土坑	1基 3基 3基 5条 1条 26基	縄文時代	土器 石器	爪形文・表裏縄文 土器が出土する。 また、合わせ口壺 棺墓が出土する。	

---

## 北方北の原遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業  
西郎山麓線（3期工区）建設に先立つ発掘調査報告書

1996年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145

長野県飯田市教育委員会

印 刷 株式会社 新葉社

---

